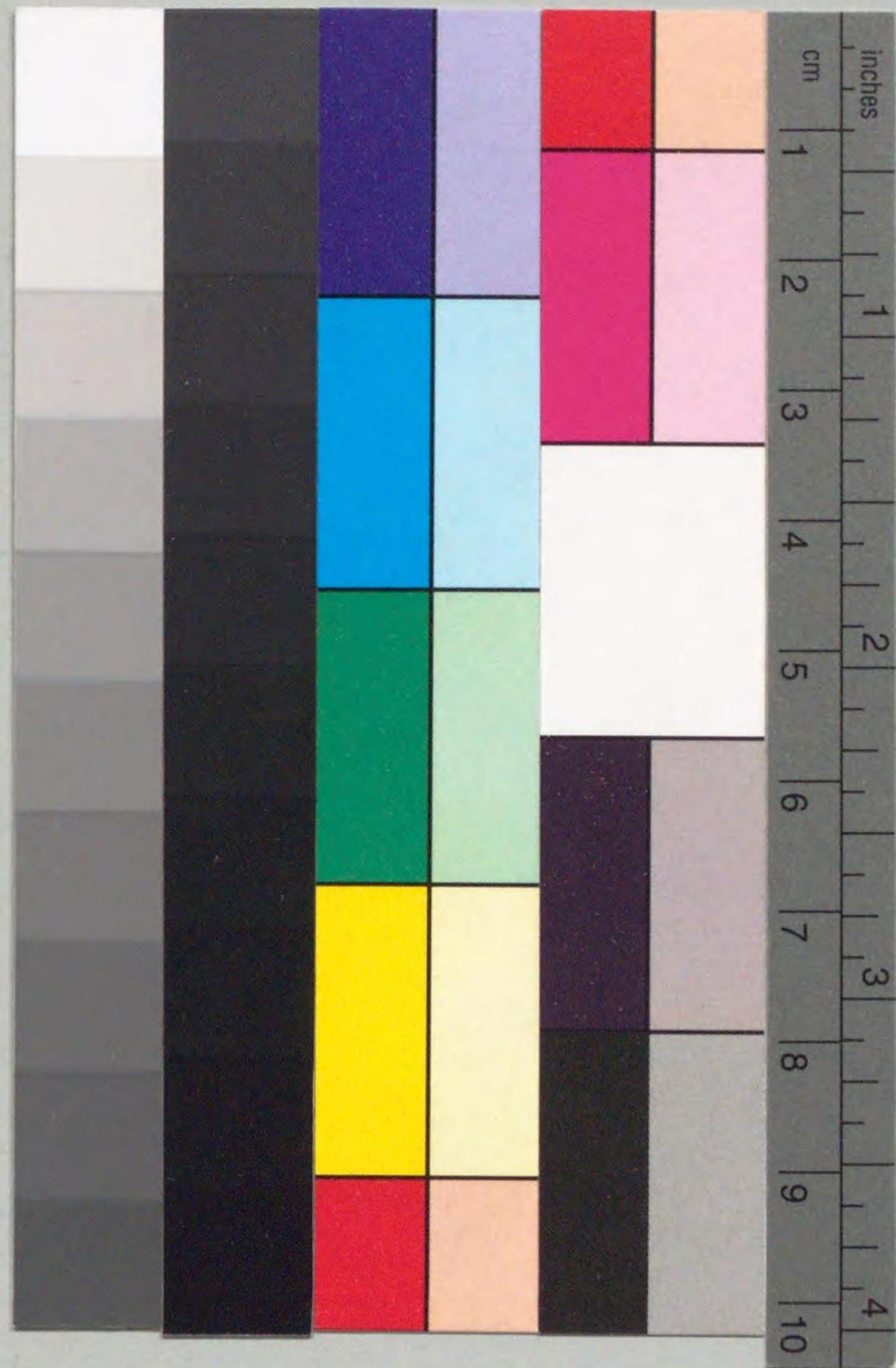
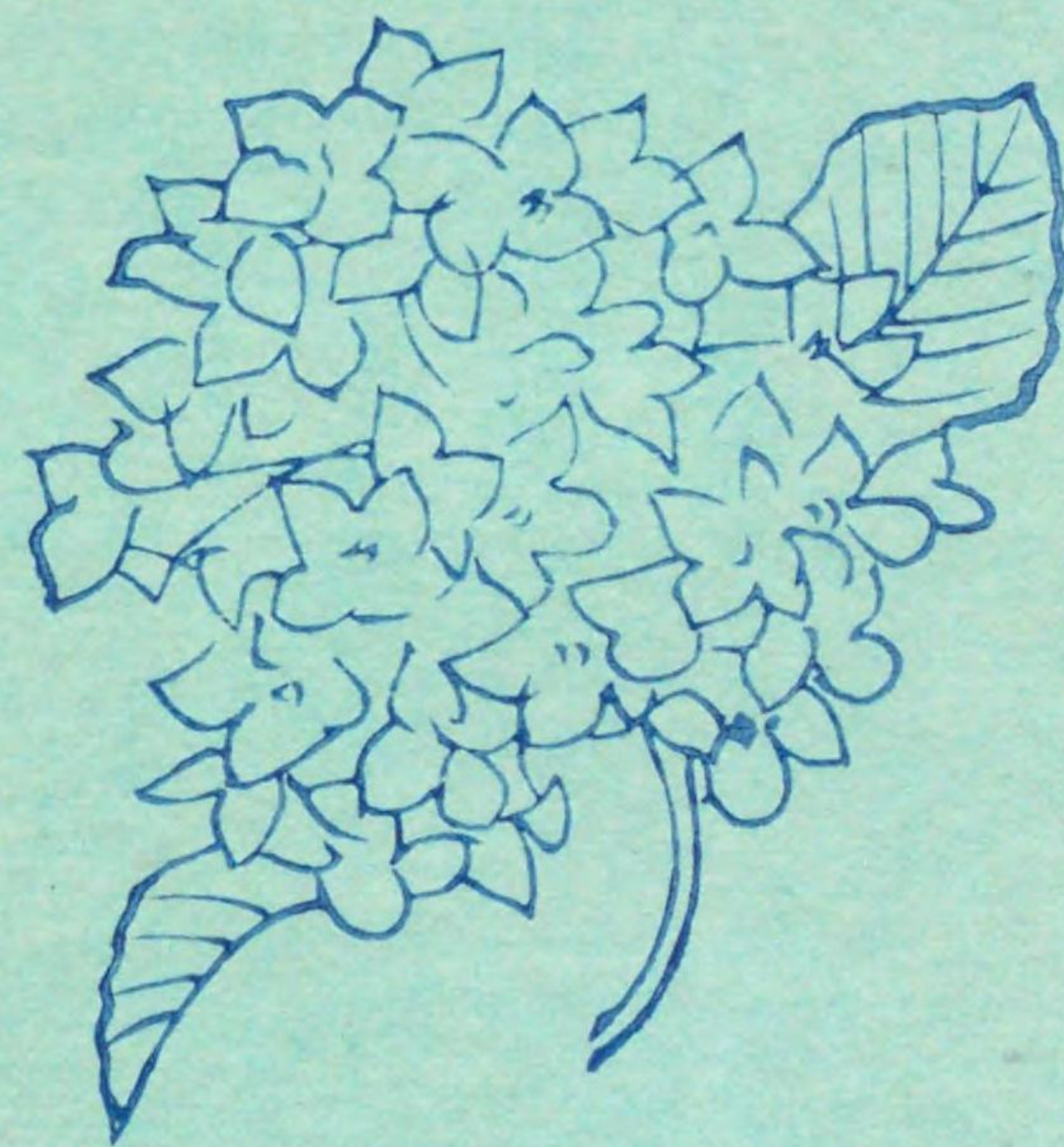
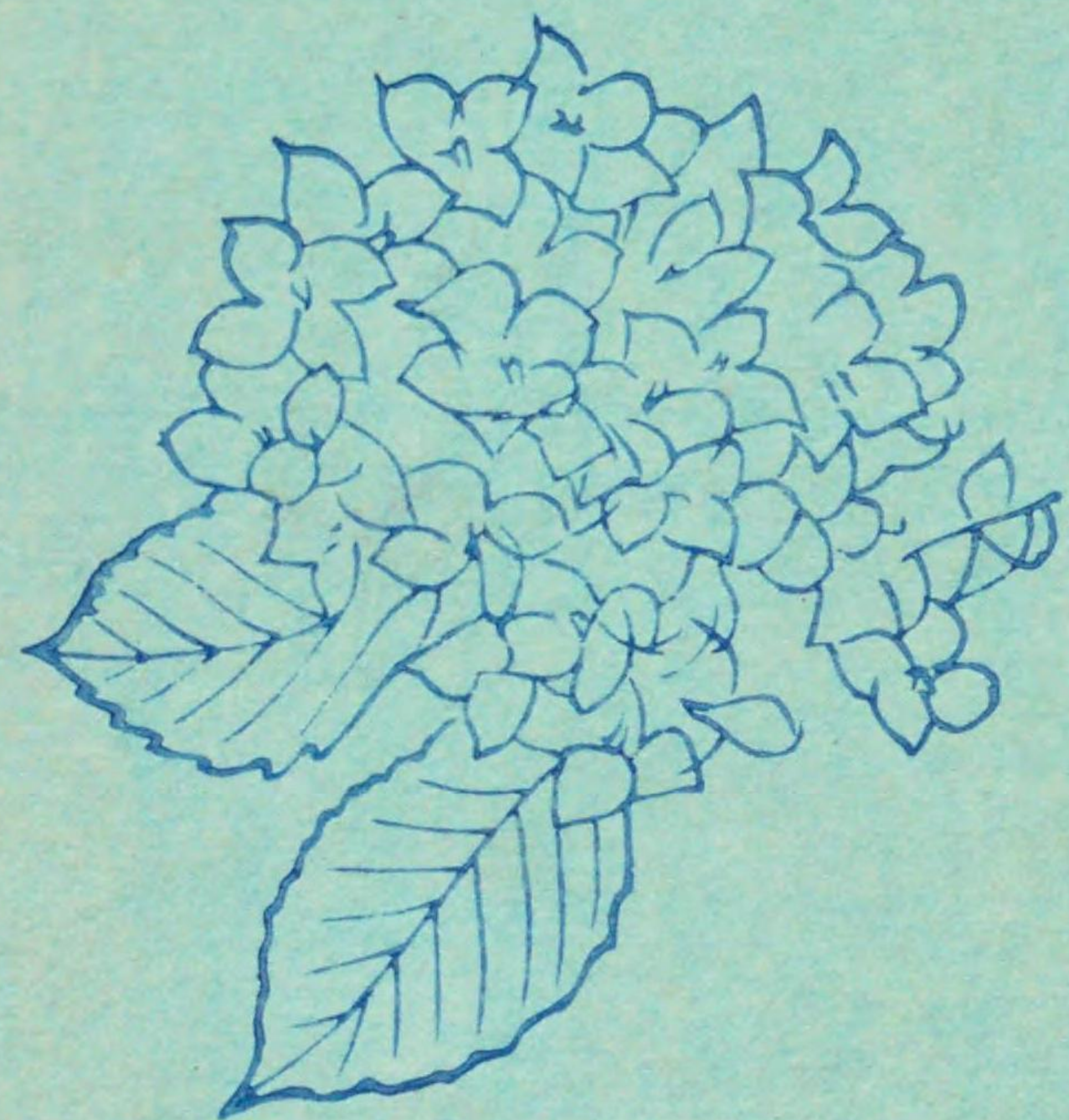


918.6
1989k



00252006







鏡

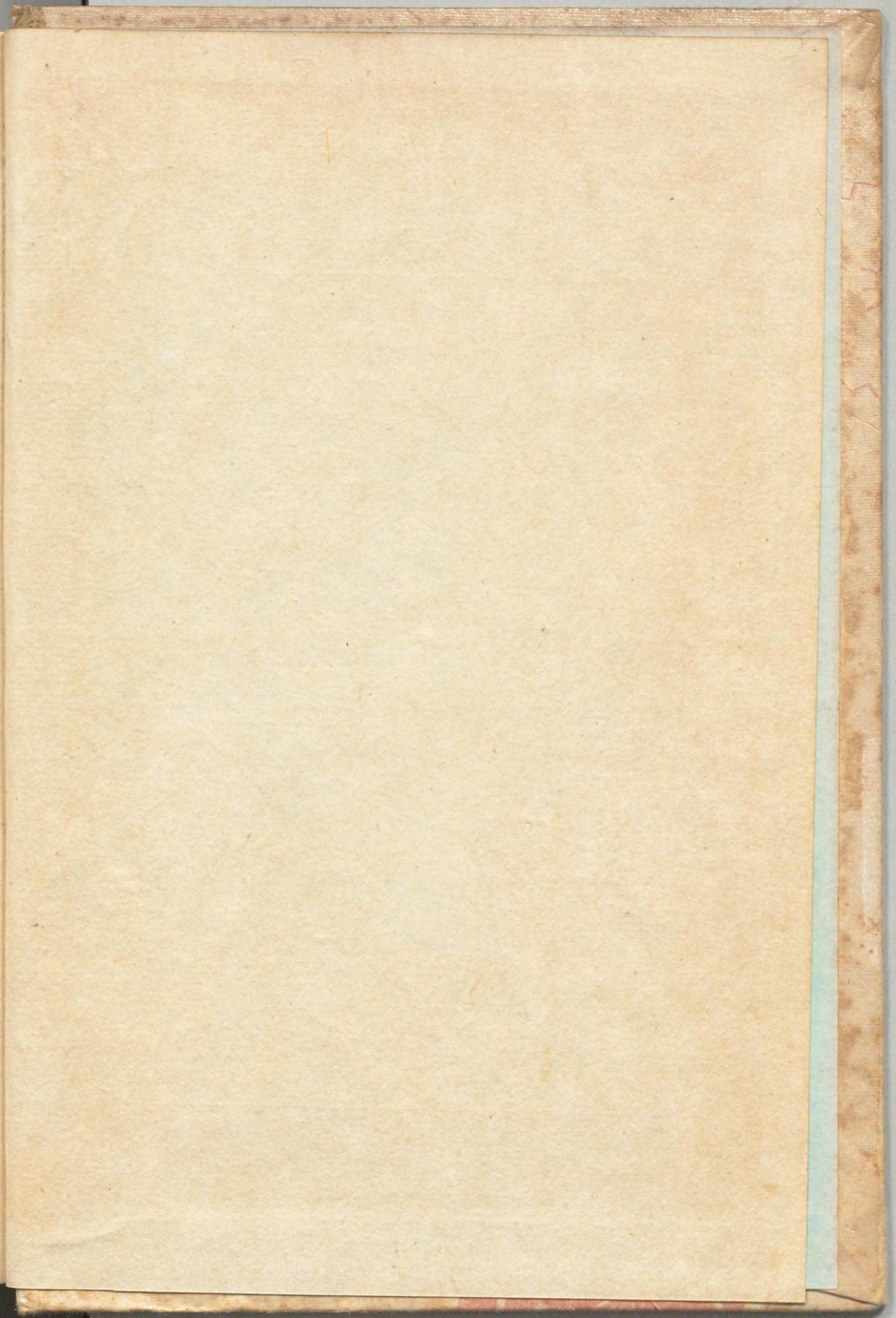
花

全

集

卷

十五





252006

目次

青	小	朱	櫛	色	三	楊	月
鷺	春	日	卷	曆	味	柳	夜
(明治四十四年一月)	(明治四十四年一月)	記	(明治四十三年十一月)	(明治四十三年十月)	線	歌	車
.....	(明治四十四年一月)	堀	(明治四十三年四月)	(明治四十三年三月)
四六九	四四七	四一五	三九一	三〇三
					二一七	一五	一

酸	漿	(明治四十四年一月)	四七九
露	肆	(明治四十四年二月)	四九三
築地兩國		(明治四十四年二月)	五三九
吉原新話		(明治四十四年三月)	五四一
妖術		(明治四十四年五月)	六三三
逢ふ夜		(明治四十四年六月)	六六一
高棧敷		(明治四十四年六月)	六七二
池の聲		(明治四十四年六月)	六八九

月夜車



一

宴會と云ふが、優しい心ざしの人たちが、なき母親の追善を營んだ、其の席に列なつて、式も盞も濟んだ、夏の夜の十時過ぎを、袖崎と言ふ、……今年東京の何某大學の國文科を卒業して、故郷へ歸省中の青年が山の麓を川に添つて、下流の方へ車を走らして歸つて來た。やがて町に近い、鈴の緒と云ふ橋が、河原の晃々と白い、水の蒼い、對岸の暗い、川幅を横に切つて、艶と一條架る。袂に黒く、こんもりと濃い縁を包んで、遙かに星のやうな遠灯を、ちらりと葉裏に透す、一本の榎の姿を、前に斜に見た處で、

「車夫、」

と上から聲を懸けた。

「待つとくれ。」

「へい、」

「其處へ。一寸、右へ入つて貰ひたいな。」

ト車は、急に石礮路に、がた／＼と音を立てて山の裾へ曳込んだが、ものの半町もなしに、直ぐ上り口の、草深い峻い坂に成るのであるから、黙つて居ても其處で留まつた。

「旦那、何うなさります。」

「下せ。」

と云ふ時、袖崎に續いて、背後から並んで來た五六臺の車が、がら／＼と川縁を、町へ差して通過する。看板の薄黄色い灯が、幕を開けた舞臺を走る趣に見えた。

尤も彼の前にも車が續いた。爾時、橋の上をひら／＼肩裾の薄く濃く、月下に入亂れて對岸へ渡つた四五人の影も見えた。其等は徒歩で、些と早めに宴會を辭した連中。初夜過ぎの今頃を如何に夏の川縁でも人通りは絶えてない。人も車も、いづれ列席したものばかりで、……其の前後の車の中から、彼は引外して、此處に入つて來たのである。

氣の可い中親仁だつた。車夫は、楫棒を上げたまゝ、捻向いて、

「草場の夜露が酷うござりますで、旦那、お袴の裾が濡れませう。乗つていらつしやいませ。ええ、何んでござります、最う彼是然うして待ちますほどの事もござりますまい。お連の方は皆通過して了つたやうでござりますで、大概大丈夫でござりませう。徐々曳出して見ませうで。いや、何うも其の、あれでござりますよ。つい此のお酒と言ひますものが、得て其の素直に内へお

歸りになり憎いものでござりまして、二次會とか何とか申しますんで、えへ、
と人の好い笑ひ聲。

「あ、若い衆何かい、連のものが、何處か二次會へ引張出さうとして、私を中へ引扱んだ、
其れを外したのだと思つたのかい。」

「へい、それ引込め、と仰有りますから、精々目着りませんやうに、突然蠟燭を消して来たでござります。山の蔭に成りますで、車一臺は月夜でも、一寸目には着きますまいと思ひまして、へい。」と云つて、些と間拍子の抜けた、看板をぶらり笠の下へ釣つて見せた。が、地方の事とて、番號もなく茫と白い。

「御深切、御深切、」

と笑つて、

「然うぢやないのだ。まあ下りよう。」

「へい、お待ちなさいまし、石礎で齒が軋みますで。」と蹲つて、ぐい、と楯を壓へる。

其處へ下りた。

「しかし、然う思つたのは道理だよ、同伴が同伴だからね。」

「え、大分、お綺麗な處がお揃ひでござりました、皆新地の御連中。」

「處が、今日の會は眞面目なんだよ。婦人たちはお酌に來たのでもなければ、取巻きでもない、實は施主なんだ。」

「施主、へい、施主と申しますと……」と何かまぶしさうな目を細うして、薄い眉毛を俯向けた、寡た親父が手拭で額を拭く。

「志す佛の追善をしたのさ。藝者たちが感心ぢやないか。」

「お珍らしい、奇特な事でござります。いづれ旦那筋のでござりませう。」

「一寸聞くと誰でも然う思ふだらう、處が違ふんだ、客筋のぢやない。皆の師匠の追善なんだ。」

「お師匠さんと申しますと？」

爲に蠟燭まで消した車夫は、つい通りの乗客ではない、馴染の氣らしく、親しげに問懸ける。

「若い衆、知つてるだらう、此の川下の稻荷河原と云ふ、新地の裏に成る。彼處に、——遊廓の女が、遊藝から讀書、茶、花なんぞの授業を受ける女紅場と云ふのがあるのを、」

「ござります、へい、成程。」と早や半ば合點した風をした。

「其處のお師匠さんの十三回忌を營んだのだよ。」

「十三回忌、はあ、大分久しいあとの佛様を、あの徒には猶更奇特な事でござります。」と手拭を掴んだ手を、胸に置いて傾いて、

「旦那、くだい事をお尋ね申しますやうでござりますが、あの其の十三回忌の今日の佛様は、旦那衆でござりますか、それとも御婦人で、」

「女だ。何うしたい、と言ひながら、袖崎は尾上の松を仰いだ。山懐に緋が暗く、髪黒く、月影に其の色が白い。」

笠の下から、これを透かして、車夫は其笠を取りながら、思案顔の額を伏せた。

「もし、それぢや、其のお方は、袖崎さんの御新姐ぢやござりませんか。」

「え、知つてるかい、若い衆。」と振返つて熟と視た。

「面目もござりません。」と手拭を笠に落して、裏返しに膝へ下げた、腰を屈めて、

「十三回忌の其の佛様は、貴方の御母様でいらつしやいませう。坊ちゃん、前に御厄介になりました友造でござります、最う、お覚えはござりますまい。」

と滅入つた聲して、目のしよぼくした寂しい眉を擡げて言つた。

「まあ、何うした？」

と手にした扇子を、その、袴へ。

「僕は些とも気がつかなくつた。」

「此の體でござります。へい、御見忘れは御道理で。いや、最うからつきし、意氣地もだらしも

ござりません。貴下は御成人遊ばしましたな。何うも御様子が肖ておいでなさいます、と今申せば申しますやうなもの、餘りおほきくお成りなさいましたで、まるで以て、思掛けずでござりました。失禮ながら、お幾つに。」

「友さん、後厄だよ。」

「へ、誰にお聞き遊ばしたやら、大分高慢な口をお利きに成ます、お廿六で、」

「あ、」

「しみく存じて居りますのは、まだ七歳八歳、御親父様も、御存命の時分でござりますから、彼是雜と二十年。其れがお亡くなりなすつて、母様が、女紅場へいらつしやつて、踊やなにか、遊藝の師匠を遊ばして、手一つで、貴下をお育てなさります時分は、蔭ながらお顔を見ましたくらのなもの。大い御恩を蒙りましたに、いざお家が、と言ふ頃には、碌に暑寒見舞にも御伺ひたしません。手前が其の不都合な料簡方と、お家の罰で、此の體裁でござります、へい。」

こんな薄汚い、車夫風情をつかまへて、かつたい坊ともお呼びなさらす、

(友さん)と今おつしやつて下さいました、其の御聲が、御新姐様そつくりで、——友造は胸が

充満に成りました。」

袖崎は再び峰を仰いだ。言はれて見れば我ながら、||友さん||と呼んだ自分の聲が、谷深く

に響いたやうにも思ふ。母親の其の墳墓は、此の山の唯ある丘の、此の月の浅茅生に、影薄く露濃かに寂とある。

友造は鼻をすゝつて、

「え、人間恠うまでに成りませずば、表向き貴下のお供をいたしまして、今夜なんぞ、たとひ對手は藝者でも、御新姐様には齋檀那、施主方の下足番でもしませうものを、早や全く腑甲斐ない、残念な事でござります。」と曲げた腰も立ちあへず、石を嚙む齒の根に蹲まつた。草も荒れ、地も破れて、樹蔭を洩る月斷々に、骨を砕いて散らしたれば、片輪車の影を倒して、輪廻を凄く描ける其の状。

二

此の可哀な車夫に向つて、大川の流の音の身に沁むやうに、姿を引締めてゐんだ袖崎の帽子には、殊更に月が宿るが如く見えた。

「何も稼業なら可いではないか、天秤棒を擔いだつて桿棒を握つたつて、誰に、何が極りが悪いね。

しかし仕事は何うしたんだね、友さんは手に好い職があるのぢやないか。」と訝しさうに然う言つた。友造が袖崎の家に恩があると云つたのも他ではない、此の縣に聞えた蒔繪師だつた、彼の父に師とし事へて、友造は一廉腕の出來た職人であつたので。固より以前から、友造の家は、土地でも、場末の、町はづれの、舊の足輕町の破れ長屋に、家族が大勢で、かびた、濕つた、じとじとした貧しい暮して居たのであるから、自分に店を張つて註文を取るほどの資力はないまでも、同業の許に雇はれて、給金を取らうなら、恠うした力業をするには當らぬ。又其の方が収入も多い筈ではないか。

「え、其れが矢張、手前心から仕方がないのでござりまして、以前、お家に居りました時分から、何うも此の目が悪いので、」

と掌で上へ擦つて、

「此に就けては御親父様、御新造様も大概御心配下すつた事ではござりませぬ。友造や、身體を謹め、友さん、酒をお飲みでないよ、と親身に仰有つて下さります。……貴下の前でござりまするが、我ながら愛想の盡きた不身持でござりまして、毎々男の面目玉が溝濱の茄子に成らうとする處を、幾度お救を頂いたか分りませぬ。其れにも懲りず、一時なんぞは、頓と遊蕩の金子に困ります處から、最う目が見えぬ、へ、へ、へ、と情ない聲を出して、

「言はうやうもござりませぬ。もう、最う目が見えぬ、一生の大難でござりますと、御新姐様を

お拜み申して、此の二十里先の大巖の不動様と申すのへ、お籠りの願掛けに参りたい、と泣いて見せて、最う其れまでも毎々の、逆も御利生のない處を、御新姐様のお執成で、些と纏まつた草鞋錢を頂戴する、と其の足で新地入りでござります。何處へ罰が當りませう。達者な目でも盲目に成らずには濟まぬ筈を、其の上にもお詫を叶へて下さいました。御兩親の御利益で、まだ、へあ恠うやつて大まかな處は、雲と霞と、見分けの着きまするのが、目つけものでござります。へい、陰徳は何んとやら、と御酒の上では、能く御親父様がお話しになりましたが、世の中の事と申しますものは、書物の通りには参りません。……お慈悲深いお方だけに、お貯蓄と言つてはござりません。……お亡なりなさりますと、直ぐに御新姐様が、貴下と、お年寄を抱へて、お一人で御辛勞をなさりました。

女紅場で、お師匠さんをなさります、其のお心の中を存しながら、勿體ない、引張りの地獄宿で、鮎の脚を嚙りながら、袖崎の御新姐が直傳だ、と紀伊國は音無瀬川の狐が憑いた人畜が、沙汰の限りでござります。

え、坊ちゃん、こんな世迷言を申しまして、今更貴下に、お詫を願つて、又お目に懸りたいの何うのと申します、然うした料簡ではござりませんが、それでも貴下の母様の何回忌ぐらるは心に覺えて居ります處へ、餘り思懸けないお方にお目通をいたしましたで、つい、其處に、御新姐様が目の前へお立ち遊ばしたやうに見えましたものでござりますから、豫て胸充滿の申譯を、かうか喋舌つたでござります。

と言が途絶えた、咳をして、

「ヤ、而して、お宿は何方においでなさります。」

「あ、明日でも話しに來ないか、私はね、針屋に居るよ、知つてるだらう、祖母さんの實家で、再從兄妹の内さ。」

「道理こそ、私を雇つてくれました若い衆が、小菘小路まで、と申しました。いえ、彼處に供待ちをしました、あの徒は皆遊廓のでござりますで、看板がどれも新地組合、印が麗々と書いてござります。姉さんたちが心着けたでござりませう。貴下をお送り申しますのに、町中を新地組合の看板では、御外聞に係はらうと云ふ、……其處で此の橋向うを、あぶれてぶらついて居ります、私が、お見出しに預りましたものと見えます、へい、へい。」と叩頭馴れて、生れついて車夫らしいのも、目の薄いのが物寂しい。

「はあ、御串戯をなさりますな、貴下からお酒錢なんぞ、何うして最う餘分な御祝儀を姐さんたちへ頂いて居ります。格別氣をつけてお供申せと言ふ事。へい、是も全くもちまして今日の御新姐様がお恵みでござります。なか、まだこれでも坊ちゃんさへ御承知下されば、車を此處

へ打棄つて、猿抱負に負ひ申して、友造が禪の紐へ通した天保錢で、風車を買つてお持たせ申したうござります。ヤ、然う言へば、今夜は遊廓前の毘沙門様のお裏祭禮。あれ、お聞きなさりまし、どんどろくと、刻んだ太鼓が聞えます。」

と眩しさうに仰向いた。月は時に川浪の上に打傾き、左右に薄雲の手を伸べては、思ふまゝに光を投げ、水を砕いて、十日の影が澄渡る。……空を劃つた峰の姿は、此の山懐へ暗く成つて、峯の樹立の黒い中に、折から晃々と星が輝く。

友造の影は石碓の上に搖いで、

「あゝ、最う大分遅うござります。さあ、お召しなさりまし。御存じの、あの目の赤い大蜈蚣の紆つた、下り藤の揃ひの軒提灯を御覧しながら、徐々お歸りなさいませんか。」と話に紛れて、友造は、こゝに自分たちが不意にめぐり逢うとして、其れがために同伴の中から車をはづして引込んだものと思つて了つたらしい。

此方も、又墓から草鞋穿で出て来たやうな古い男に逢つたので、忘れるともなく紛れたが、祭禮の太鼓と云ふにつけて、夢見る耳に、一撥、どろくと入つたやうに、目覺むるばかり思出した。

こゝに待合はす婦がある。

立直つて、

「友さん、最う可い、歸つておくれ。何んだか、此の上の山見たやうに話があるが、立つて居ては、落着かない。何處かへ一所にと思ふが、其れも遅し、明日でも又逢はうよ、ね。」

お前さんは稼人だ、忙しからう、此處は最う可いよ。否、遠慮をするんぢやない。はじめから最う此の坂で車から下りるつもりで入つたんだ。友さんと知れて、其れで乗るのを止すんぢやないから。さあ、構はず、お出掛け。」

「へい。」と煮切らない返事をして、少し退つて、猶豫ひながら、

「而して、貴下は、坊ちやん。」

「こんなに、月はよし、」

と悠然として、草を踏んで左右へ一歩。

「追善のあつた今夜だし、墓参りする路だらう。まあ此の清水で、」

と言ふ袴の裾を、サラ／＼と石を漕つて、草の下行く細流あり。坂はたら／＼と筆を絞つて、峯から路に滴るのである。

「……手でも灌いで、此處からお参りをして歸らうと思ふんだから、」

「さあ／＼御緩り御拜をなさりまし、お待ち申しますとも、私は。……貴下、手をお灌ぎなさる

なんのと、可い加減な水悪戯をなさつて、袂が引摺ると不可ません。さあ、袖を持ちませう。」と眞面目にぬつと両手を出す。

笑ひながら、片手を袖口に、ぐつと入れて、

「友さん、幾つだ、と思つてる。」

「へ、へ、へ、然やうでござりましたな。」

……え、其れでも貴下、石の下に、多い事、澤蟹が、此處の水には居りませんで、指を挟まれると不可ません。……お待ちなさりますし、晝間の辨當箱が開いて居ります、洗つて一番、其れへ波出して差上げませう。」

「まあ、お待ちよ、友さん、眞個に可いんだよ。……決して邪魔にするんぢやない。一人の方が、何んだか落着いて、寂然として、墓の松に吹く風も聞えるだらうと思ふからだよ。」

「あ、如何様。」

と又しんみりして、

「最惜げな。早くから御両親にお別れなすつた貴下でござります。格別のお心持、お墓の松の風の音が、峰からして此處までなあ……なまいだぶ、なまいだぶ、なまいだぶ、……」
時に山彦が口笛吹くかと、梟の聲が、月の空をホッオーホと走る。

楊柳歌

松原小橋の停留場で、當日の同行二人が電車を下りたのは黄昏であつた。
「此處々々、」

と清之助は、外套の下に腕組みをして、あの、通りの西側を颯と流るゝ、京の水の、淺葱を煽つ岸を覗き、

「着いた晩です……それ、心得た顔をして、翻然と威勢よく飛下りると……もう一足で既の事に踏込まうとしたんだよ。暗さは暗し、勝手は知らず、いや、おのぼり、のつけに吃驚さ。……確か此處だつけ。」

今頃を一時、上る下る人通り、繁きが中に立停まる。これは自分が名告らずとも、其の風采でも能く分る。……名所圖繪以來、祇園の前の二軒茶屋では、赤前垂の姉さんが、すらりと揃つて、とんととんと、とん／＼とんと豆腐を切る……と今でも和蘭陀の唐人が、長い煙管を唇下りに、あツけらかんと其の顔に見惚れて居ると心得た、おのぼり氏。

其の附合ひに、……土地では何んの珍らしからう。木の葉一枚流れぬ水に、同じく袖を映したのは、襟直して、二三年、舞妓上りの、今若手で、花の都に紫の俤も見よ、お桐と云ふ、祇園の藝子、薬湯の町の名取である。

が、派手ならず。恠う、俯向き勝ちの、襟を深く、細りした姿に引締めて着たから、其の二枚小袖の、下着の袂も捌かぬが、上着と同じ大島を襲ねたらしい。白羽二重の裏細く、たよ／＼としたハツ口の、帯腰に掛るのが、白無垢のやうで清らかに、雪の膚には冷たさう。桔梗の花の八重らしいが、白桃に一寸見える……三ツ紋の羽織の黒縮緬が、——生際の濃かな鬢の毛のや、曇つた中に、星の簪の珠とともに、——此の女の色香に榮えて、濃い紫に視めらるゝ。

身動きに、堇の薫りで、
「あんたなあ、暗夜でも覚えてお居やすか。」

と清しい眉して優しく言ふ。

「驚いたから覚えて居ますとも。だが、何んだねえ、夜見たよりは町の幅が廣いやうだね。」

「あいな、」

と袖を合せたまゝ、顔ばかり振向けて、

「電車が行きやはる、來やはるよつて、家が引込みやはつたんえ。」

と露の然も垂りさうな、黒目勝な瞳で教へる。
清之助は眞面目な顔して、

「はてな……は、は。」
と笑出した。

「然うかい、いや、家が引込みなすつたら、人間は、さあ、お出掛けなさらう。」
お桐は襟もきちんと澄まして、

「何を笑やはる、私可厭え。」

と情らしく斜に見て、

「頬に何ぞ着いてやへんの。」

「何んの、頬邊にもしか着いて居れば、笑醫のほかはありませんまいがね、口が些と可笑いぜ。」

「え」と袖口を口に當てる、紋が揺いで、含まれた呼吸が、其の眞白な花片に觸つた。

「嘘だよ。お前さんと私が二人で居るんだ。紅がはづれはしないがね。……だつて變だもの。家が引込みやはるからさ。」

漸と分つて、莞爾した、切の長い目を伏せて、

「憎體やな。そない毒なこと言やはるなら、私最う清水様へ連れてつては上げへんえ。」

と肩を細う、衝と伸上るやうに横を向く。

「あ、あやまつた。今日の處は杖柱ともお頼み申す、何分とも。」

「それな、貴下やかて、そない言やはる。私のとこ杖やつて、をかし、一寸、もしな、お爺はん
でるやすかえ。」

柄のない處へ、柄をすげて、切返したのも、うら若い。——今日は晝頃から一所に歩いた、
途すがら、心盡しの案内振で、電車が唯通るのさへ、あれ往きやはると、言教へる、——蒼い焰
で飛ぶ車も此の人の語に乗ると、眞綿の上をすらくと迂るやうに見えて、清之助は、をかしい
處か、其の實、柔かに懐かしく身に染むのであつた。

「いや何うして、不思議なほど優しく聞える。……」

「難有うおすえ、おかみはんに宜しう」とお桐は莞爾して、また俯向いた。

「然う慇懃に挨拶をされて、家内にお言託まで承ると、勢、停車場へ驅出して行かねばならな
い。さあ、眞面目に、御案内、……なんのつて、話しながら線路を抜けられる處が嬉しい。え、
と、此處を眞直に参りますかね。」

「然うどす、此の邊も一寸賑かだすやろ。」

と人通りの中を、横に切れると、酒屋の藏らしい白壁造りの横町を、つい加茂川の岸へ出た。すぐに橋があつて、お渡りやすと、色もほんのりと白んだ中に、夕日の餘波を薄く留めて、撓やかに夕越人を迎へ顔。水の面も同じ姿で、向う岸の軒行燈の、東山の袖に提げた雪洞のやうなのが、まだちらちらと點いたばかり。流に映るのも二片三片で、一足づゝに暮近う、紅の視めが増すらしい。

磧に干した……枯草が酔つたやうな……赤合羽の上を、冷い風が靜かに渡る、と眞白な腹を蹴して、ひらりと千鳥が飛んだ。比叡おろしが、雪にしようか、天氣にしようか、と密と様子を見に來たのであらう。それ、其の山の峰あたりを、寒い雲がスーツと通る……飛梅の氣勢かな。あの、雲の動きやうで、星が霜に成らうも知れぬ。

「寒くはないかい。コオトを着て來れば可かつたつけ。」

「否、大事おへん、と……其れでも艶々とした黒い毛皮の頸巻に、細い頤を埋めて言つた。

「貴下はん、寒うおすか。」

「私は男だ。」

「私かて女え。」

と、唇がちらりと赤い。岸には又一ツ灯が殖えた。

「此の橋は。」

「松原の橋とす。彼方が五條の橋え。」

「あ、然うか。」

と云つたが、清之助は、此の際、御曹子牛若丸に失禮した。凡そ名所古跡を見るに、美人の案内者は宜しくない。如何な事にも、武藏坊さへ忘れたのである。……其の癖、薄明るく桃の下路を行くやうな、此の橋を、清水に向いて渡るのに、女に袿、男は狩衣して然るべしと思つたのに。……然も橋の上で、四五人の工夫が、どやどやと來たのさへ、墨染の法衣に顛巻して、七ツ道具を背負つたと視めた。髯の生えたは奴殿。どれも大津繪のやうな人通、ト腰を極めて、ふらふら躍るやうに擦違ふ。向うの、あの墨繪の廂の何れかには、鬼の面の看板掛けて、白酒を賣らうも知れぬ。

渡つて廳て中央にかゝると、嵯峨野に落つる日の影か、音羽の森の月の氣勢か、二人の姿が欄干かけて薄く映る、其の空へ、ふはくと被さるやうに、東山の薄紫が、一所に落ちて、色を重ねて、橋も春めく下萌である。

ト此の京都が被衣した姿の、東山のなだらかな肩を掛けて、松原橋の欄干越に、高いとも低い

とも、何方つかず、他愛のない、空な處を、ぼんやりした、圓い形の、……光るでもなし、曇るでもなし、薄紫の紅がかつた、たとへば鳳凰の卵のやうなものが、二人の中を、お桐の黒髪の上あたりを、ふはくと浮いて通る。

清之助は、とぼんとして歩行きながら、此れを熟と見て居たが、橋の袂で、急に思出したやうに笑つた。

「あ、まだ護謨風船を持つて居るんだね。私は、何うも、前刻から、何んだらうと熟々視めて、景色も何も見ずに來た、橋の途中から氣が着いたんだが、」

「貴下、何や思ひやした？」と一所に引合はせて持つてた袖を、白い手首で、少し開いて、ト上を向くと、白齒が幽。口で呷へたやうな護謨風船が、加茂川を離れようとして、ひよいと動いて、反奮みもせず、二三寸ふはりと高くなる。

ちりくと千鳥が啼いた。

三

「又悪く、黙つて澄まして、お前さんの頭の上を來るぢやないか。足もなくつてさ。」

「あら、」

と瞳を大きくして、

「風船に足があつて可いものだつか。でもな、薄暗うならばつて、絲が能う見えんよつて、ほんに、青い球ばかり浮いてますえな。」

と眞顔で言ふ。

「だからね、何んだよ。お前さんの名に花が咲いて、其奴が幻に出て、慙う、はつと簪から後光でも射して居るのかと思つた。……何しろ、お美しくつて居らつしやる。」

「ま、阿呆らしい、私が、何の……」

「眞個さ。」

「驕りますえ、ほ、そんな處覗きやつても、鮎は賣つて居やせぬもの。ほ、。と些と蓮葉な微笑。

橋を渡越してから、向通りの兩側は、皆綺麗な店で、人形の顔のほのめくのもあれば、清水焼であらう、大花瓶の颯と五彩に輝くのもある。其の硝子戸の中には籠洋燈が點いて居た。然うかと思ふと、藥屋らしい、看板の金文字の、晃々と、暗い軒に光るのもあつた。娘らしいのが、ぼんやりと奥と隔ての暖簾から、戸外を覗いて居たのもあり。

で、清之助は、物珍らしさうに、通りがかりに、其處等をきよろくと見向す處を、一足後れ

に背後から、笑聲を密と浴びせて、鮒は賣らぬ、とお桐がからかふ。
鮒に一寸わけがある。

清之助は、お桐の導きで、今日は北野から壬生へ廻つて、大廻りに電車で前刻の處まで来た。が、其の天満宮から地藏堂へ巡る間を、相談づく……は可笑いが、お桐も望んで二人で歩いた。途中、何處かの小路で、一人鮒を賣つて居た漢があつた。姫御前が、と云ふではなし、緋の袴と云ふではなし、魚屋が鮒を賣るに不思議はないが、さ、其の商つて居た場所が、大きな溝板を前にして、商家と商家の羽目板を、兩方から、しかも二三枚、どちらだつたか、引められて、壁の崩れを見せた真中の、路地口の木戸へ附着けて、箆二つ臺にして、ト上へ莫菴を渡したのに、活きた鮒の水を切つて、ぴち／＼するのを、ざらりと置いた。

金物屋……古着屋……荒物屋……など、どれも平屋づくりの矮い家が、道から一段下つたと思ふ處に、件の大溝を前にして、頽然と成つて控へたから、何んでも場末には違ひなかつた。が、青天井……とは行かない、空のどんよりとした、先づ露天の鮒賣。

其の日は、一體節分であつた。……年越と云ふので、北野から壬生へ掛けて、浴中の老若男女の參詣が夥多しい。境内は申すに及ばず、道筋の處々、商人が澤山出て居る。……處で、此の鮒賣も、東京ならば小父さんが、ト植木屋の灯を横取りに、薄暗く蹲込んで、縁日宜しき處に、金

魚を賣らうと云ふ格に當る。

處を、伴のふなうりは、のつそりと頭を高く、木戸の上へ兀の越すまで、大漢の肥つたのが、見ると下駄穿で突立つた處は、見越入道と云ふ體がある。……何を赫と逆氣せ上つて、あらう事か、うしろ顛巻。看板のやうな洲濱形の眼鏡を掛けたわ。

はて、珍らしい。清之助は別に見る氣でもなかつたに、丁度此の前を通る時、背後から聲も掛けず、唯地響がしたと思ふと、腕車が揃つて、がら／＼と被つて來た。

「静としておいでやす、車夫衆が、よう避けはるよつてな。」
と今はじまつた事ではない。頻りに腕車が往來をするので、路すがらお桐が言つて聞かしたものを。性根の据らぬ。おのぼりさんの癖として、慌てて飛んで交したので、溝板をがたりと踏んで、漸と大道に、身體を斜に堪へながら、其れでもひよい、と車上を見れば、眞前に練つて飛ぶのが、爽なりける紋着にて、イヤ塗つた事、塗つた事……男女七歳にして而して以來、京女郎は色が白いと覺悟をした男にも、其白粉の分が分る。……素顔の人もあるものを、如何な事、瞼にばつと生臍脂で、頬の皺が風に縮む。あ、其の上に情ない、受口反らした笹色紅。

其れが白襟の裏を眞紅に翻して、やがて乳のあたりまで、押寛げた衣紋の据首、兩天の筭、紅白の葛引して、漆のやうな島田髷。

これは、と清之助が驚く途端に、お桐とは知つた中か、ニヤリ、で——眉をビリリとさせると、車は人ごみの足を拂つて、眞中を畝つて四五臺。——中には日傘さした圓髷も交つたやうだが、初手の羅生門に度膽を抜かれて、續いた眷屬はよくも見ず。……

「あれは？ お桐さん。」

「おばけどす。」

「え、

と言ふ。其の拍子に、恰も其處で足を留めて、件の鮎賣の額を見た。事情止む事を得ず、大入道の店頭に突立つた次第に成つた。

餘り近々と鼻の前に附着いたので、其のまゝ、然やうなら、とも言はれぬ段取。氣なしにぼんやりと、びく／＼動いて、へし重なつた鱗を見た。

優しいお桐が又、おのぼりは鮎を見物するものと悟つた風で、柔順に一所にイんだが、推して案ずるに、九尺二間で、手鍋提げたり、水仕事の風がある。

鮎賣の入道は、黙つて、其の莫産の上の秤を取つて、ぶらりと紐を取つて下げて、目を刻んで、

スイと分銅を扱いて、ちよんと留める。ときちんと水平に成つた處で、眼鏡の太枠の上から、八の字に白眼を寄せて、額で睨むやうに二人をじろり。

唯見ると、顔なり圖體なり、……はて、誰やらに肖然、と思出すまでもない。……清之助もつい昨日一昨日、道で逢つて其れだと聞いた。祇園新地を横行する、鬼なんか言ふ幫間に其のままである。

清之助も可厭な氣がして、直ぐに溝板を離れようとしたが、妙にじろ／＼と凝視める入道の、其の眼の力で、其處へ押据ゑられたやうに思ふ。

片目で扱、ぐい、と壓へて置いて、濁と其は睜つたまゝ、片目を眠伏せて、うむと撓めて、一寸一寸。横に秤の目を一匁、と指して、じろり。二匁、と指して、じろり。三匁、と指して、又じろり。づい、と一渡り當つた、と思ふと、忽ぐわちやり、秤棹を引くり返して、莫産の上へ放り出す……其の手もおかずに……

ずぶりと、蠢き合つた魚の中へ手を突込む、腥い臭が芬と立つと、ぐしや／＼搔廻した、と先づ思へ。……鱗と鱗が無慙に生きて、ざつと時雨の音を立てる、口々に、生れ故郷の湖を呻吟いたらう。——魚尺は取らぬと言ふが、ト人指指ぐらるな小さなのが、一つ翻然と刎ねて、莫産から溢出しさうに成つて、頽然とする。最一つ見事な、一尺ばかりなのが、下づみから、びくりと

胴脈を打つて出て、ひく……ひく……とまだ皮に弾力がありさうに、身を突張る。と膏汗を流したらしく、燼と鱗に光澤が添つて、眞黒な鱗が紫がかつて、腮が金色に衝と照つた。而して、つるつると小肥りなのが、あの可愛い目を、濡々と黒く睜つて、血が染むらしく紅を輪取る。處を、大出刃の腹を返して、入道が、ひた／＼と逆に撫でた。堪りかねて、清之助が衝と退く。

背後から、

「へッ、へッ、へッえ。」と、氣味の悪い白晝の高笑。浴せかけて、

「切賣りもするんだでえ、へッえ、切賣りもするんだでえ。」

と吐出すやうな、あゝ、可厭な聲。

お桐がこれを、すかん、とても言つたほどなら、清之助は然までも思ふまい。……

が、前に、遁げるやうに急足で、些と待合はすと、お桐が後から、靜々と歩いて寄つて、

「あのな、氣にしやはりますなえ。」

と却つて慰めるやうに優しく言つた。けれども、顔の色が白澄んで、寂しく曇つて見えたので

ある。——二條の停車場は近かつた。

其の廣場で、何處か野原を見通の、田圃に骨のやうな枯樹が見えると、カチ／＼其れが鳴りさ

うに、けた、ましく風が吹いた。

五

颯と鳴るや、二つに分れて、砂煙を捲いて、大地を舞つて、眞赤に吹着ける一幅の中に、ざらつく霧を潜るが如く、腕車が宙を、停車場へ乗着けたのがあつた。乗つてる女は、眞俯向であつた。その風の一筋は、たゝと小石を叩いて瀬を作すばかり、裾を拂つて、ぶる／＼とお桐の嬌娜な姿を揉むと、生際を引亂して、おくれ毛が眉を掠めて、一つ撓つて耳朶に邪慳にかゝる。しつくり袖を取つて引合はせながら、屹と風に向いて顔を上げて、凜と睜つた瞳は、其の途端に一際清

清しかつた。が、袖も褌もきり／＼と、引締めるやうに膚に擽んで、雪なす八ツ口、友染も、切細裂いた風

情に見えた。其中で、

「一寸、

と呼ぶ、……聲も掠れる向う風で、じり、と清之助に肩を寄せた。

京都は豫て、星の雫が霽に成つたも、凄じい、こんな風は吹かない筈。然も今日あたり、四條、

三條、電車路も至極の風で、お城から鶴が立ちさうな空模様だつたのに。——

清之助は、見る目も何もいぢらしいやうで、然もく名物の江戸のからツ風を、我が手で持つて来て打ちまけたほどに、其の迷惑を察する最中へ、ト呼懸けられて、これは定めし、苦痛を訴へられる事であらうと、ぎよつとすれば、耳に口をつけるやうに、横顔を持つて来て、

「言うて見まほかな、ほ、と莞爾、埃にめげず、綻びた唇は、焼原に咲く紅梅一輪。

「今の、鮒賣な。」

「あ、」

「鬼……に肖然え。」

「眞個。」

と力を入れて、清之助は風に逆つて、ぐいぐ前へ出ながら、顔を見た。何うやら又一倍、臉のあたりの雲が重る。

「私な、恥かしおしたえ。」

と言ふ時、堪りかねたやうに、上まぶたを衝と伏せて、

「貴下はん、強う御迷惑どすな、私のやうなものと一所に歩行かはつて。」と、眞白な指の尖で、其襟巻を、つと合せた。

「飛んでもない事。」

とばかりで、目口の砂に、清之助は碌に口も利けなかつた。此のしばらくの間は、二人が唯、曠野の中を行くやうで、他の往來は目にも留まらず。いくら吹きまくつてもびくともせぬ、蒼空に髣髴たる青い停車場を左に見て、此の時ばかりは、京都も浮世だと思つた。が、此の風の吹いて行く奥に、嵯峨があつて、寂として、綺麗な水が流れるさうな。……

片側町へ入つて行く……一方は寺の墓地で、まばらな垣に吹く風は留まらぬが、目に附いた石屋が一軒、何うやら壁を築いたやうで頼母しらしい。

此處に成ると、ぞろ／＼と人が湧いて、頭も脚も動揺々々する……襟に一寸置手拭で、酔つたか、寒いか、赤い顔して、白木綿の尻端折で行く媼さんも、野掛めいて長閑に見えた。

「草臥れやしないかい。」

「私だつか。」

「些と心許ないやうだね。」

「貴下もな、私やかて、そない弱蟲やおへんえ。あのな、箱根のな、坂を上つた事がおした。」

「あ、あ、函嶺へ、これは初耳だ。」

「東京へ行く言うて、お客はんに連れられて行たえ、汽車が長う長うおすやろ。よう寝られしいへん。鹽梅が悪うなつたよつて、途中で下りて、其の時だつせ、……函嶺へ着くと、すぐな、夜

さりから、煩うてな、起きる事、……どうする事、なりへんやろ。連はな、東京に用があるのどす、私一人置いて、つゝと去なはつた。

京へ電報打て言やはつたけれど、私な、一人で居る方が氣安いよつて、と一寸軽い咳をする。……振の揃つて、白いのが寂しかつた。

六

「私な、誰にも来て貰はずに、一月ばかり居たのどすえ。些と快う成つた處で、山道を出て歩いた、坂も上つたのどす……」

「豪く言ふが駕籠なんだらう。」

と清之助は下駄の尖で、落ちた竹の皮を除けて通る。

「酔ふはけな、駕籠には乗りへん、私、馬に乗つたえ。」

「馬に。」

「呆れやしたか、お轉婆どすやろ。」と、おくれ毛を一寸搔く。

「お轉婆……が、しかしそりや、よく乗つたね。」

「其れがな、何んどす、ふらく歩行く中に、違つた他な、宿屋に居やはつた、西洋人と知合

ひに成つたのだつせ。其の人が馬を持つてどした。乗れ……言やはるはけ。私乗つたんえ。大きつ帽子被つてな、手綱曳いてくれはつて、柔順しい馬だしたえ、其れでな、賽の河原いふ處へ行な。……寂し、寂し。」

と四邊を見た。仔細構はず、京の人は、ぞろ／＼ぞろ／＼、茶粥食やはる足取なり。

「私、恐怖うおしたえ、一心にな、此處のな、お地藏様拜んだ。壬生は最う直きだつせ。」

「地藏様を拜むは可いが、ソレ見た事か。」

と清之助は前途を望んで、

「馬に乗つたつて威張つた處で、矢張り弱蟲に違ひはないぢやないか。」

「然うやかて、西洋人と、唯た二人ほか居いへんもの……私、然う思つたえ。ま、死んで、好いた人はんと二人なら……と。賽の河原どすやろ。馬に乗つて、悄然と、病上りどすやろ。芝居の引廻しのやうやおへんか。長襦袢も着うおした。あ、思つた人のためや言うて、何んぞした事な、殺されるのやつたら、嬉しおせうと思つたのどす。」

と細い手が、確乎と其の肩にかゝつた時、横顔をフト見れば、鼻筋がつと通つて、鬢の毛が靜に懸る。風は止んだ、が吹曝したあとの顔の色は、蠟のやうに白かつた。

歌柳様
清之助は言を外らして、

「しかし惜しかったね、途中、病気で滞つて。……東京が見せたかったよ。」

「否、又な、二度目にな、今度は東京へ行きましたえ。」

「いや、然うかい。で、東京は。」

「築地言ふ處で、水明館。」

「む、ぢや苦勞人だ。何うだい、氣に入つたかい。」

「……………」

「随分騒々しいだらう。あいつが名物さ、此地と違つて、」

「何うや知りへんけど、静うかな、可い宿屋だつせ。」

「市中の事さ。」

「私、何處も見いへんもの。」

「何故さ。」

「また煩うて寝たのどす。」

「又わづらふ……………」

「と思はず返した。」

「旅するとな、西へ行ても東へ行ても、あきへんのえ。神戸へ行た時もな、其の時は強うおして

な、病院へ入つたのどす。……何時もぶら／＼して……こない身體何う成るやろな。ま、あの莫
塵へ上つた鮎だつせ。」

と、不圖したやうに振返つて、屹と見た目が鋭かつた。

「姉はん、お拜み。」

「今日イは、姉はん。」

舞子が二人、天の川の金魚のやうに、薄曇つた空に映つて、綺麗びやかに、其處で辭儀をした。

「お、おでやしたか。」

「あい。」

「能うお拜みやすや。」

「あい。」

と又辭儀をして、襲袖の振長く、帯をひらく、と木履を、高く行く。

お桐は靜に向直つて、

「種次はん、玉菊はん、髪がよう出来たえ。」

「大きに、……………姉はん。」

「お桐姉はん、大きに……………」

と一寸振向いて、赤い襟で嬌態をして、二人とも、笑靨で莞爾。

七

「へい、お許し。」

と車夫が一人、これもお桐を擦抜けて、二人の舞子に添って行く。……地藏堂が近いので、最
う車は通らぬらしい。

下駄がかた／＼と鳴つたので、群集に紛れて足許を忘れた、清之助が、はつと思ふと、石橋に
かゝつて、根岸のやうな溝の上。

渡る、と土手に成つて、侘びた家が五六軒。何か中に隠れて居さうな小家の風情、やがて紅梅
もちら／＼咲かうし、蚊遣の頃は、燃立つやうな緋縮緬が、夕顔白く居ようも知れぬ。一方水田
で、吹止んだ風の名残が、どんよりと、砂煙をためた、裏を透かして、處々藥研形に底深く、朗
かな空が蒼い。其處から晝の月でも漏れさうに、刈稻の根が明いのであつた。

堂の屋根は、群集の上に、御輿のやうに顯れた。

清之助も可なり饒舌る……お桐も、しとやかなのは生得、今日は、もさ引の格で、裾を端折らな
いばかり、所體構はず話し續けて来て、人混雜に揉まれ／＼裏門から入つたが、と階へは、眞直

には向はれぬ。

で、敷石の端も見えぬ、ぞろ／＼眞黒な上で、鳩が、そくに突立つたやうな形で、顔を擦れ擦
れにほつと言ふ呼吸をして、目を合はせた。

「御堂へ上らるかいな。」

とうつとりした眉をする。

「いや、御免蒙つて此處から拜まう。」

「堪忍おしやすや。」

と襟巻を取つて、片手拜みをする、其手に打着かつて行く縞の羽織さへあつたのである。

カチ／＼ガタ／＼と猿芝居が柝を打つた。

何の木戸番やら、臺の上に躍り上る。さて何處も變らぬは、活動寫眞の繁昌で。

「一寸……待つておくれやすや。」

と襟巻さへ重さうに、なよやかに袖にかけて、お桐が片傍へするりと寄つた。する／＼と裾を
捌いたが、袂がしつとりと打つ。脊もすらりと高いやうに見えて、……其處に荷を出した風船屋
の前に、後姿でイんで、少し屈み腰に肩を細く、帯がすつと、しなつて羽織のかゝつたのが、慥
う……少い貴婦人と云ふ處があつて、且つ品の可い、華奢な母様の動態がある。

混雑な中で餘計らしいが、お桐は嬰兒の母様で、産後が漸々肥立つたばかり。で、稼業の方も、出たり休んだり、氣儘勤めは以つて來いの案内者には違ひない。が、清之助が太く其の疲勞を思ふのも、一ツは容體を憂慮つたのである。

お桐は、風船の色を選ぶのにさへ、下の絲から上へ見上げて、

「どれが、可うおすやろ。」

其處へ、外套の下の懷手で立つた清之助に聞いた。

「紫のが綺麗で……欲しいね。」

「可厭え、嬰兒はんのえ、貴下には上げへん。」

と微笑みながら、細い黄金の鎖をかすつて、氣取つた紙入を帯から抜いたが、出たのは大きな銅貨が可愛い。

「はい、はい、難有うござります……南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

と目を塞ぐ、風船賣は、頭にちよんぼり白い髻の生えた、面長な翁で、頭巾を着て居た。

深草から出たのぢやないか。趣は受取つたが、口上が些と可訝しい。

「何んだらう、小兒の玩弄物だものを、萬歳となりと云ふが可い。……日の丸の旗でも押立ててさ、お念佛は陰氣ぢやないか。」

と清之助は、何うやらお桐が鬱いだらしく見えたので、往來を仕切の綱に添ひつゝ、門を出ながら然う言つた。

ものともせぬ風。

「何のなあ、私等が嬰兒はんやはけえ、拜んでくれやした方が可いのどすえ。」

「私等が嬰兒はんだつて？」

と清之助は大眞面目。其の額の上に、紫の風船がボンとある。

八

お桐は襟巻を引合はせて、

「何うでな、こない母はん持ちちはつたよつて、嬰兒はんは不幸どす。……まめに、能う育ちし
いへんやろ。護謨風船買ふのやかて、行末な、讀書手習しやはる思へば、前にお拜みした北野の
天神はんで買うて來ますせ。歩くやうにもならはるか。ひよつとかして誕生過ぎんで、死なはり
でもしたらな、賽の河原へ行かはるやろ。よつてな、……お地藏様拜むのだつせ。可愛がつてく
れはるやうに、……而したら、風船屋のお爺はんが、お念佛言はつて、私嬉しいやおへんか。」
と澄まして言ふ。

清之助はあしらびかねた。前刻の鮎にもぎよつとしたが、これは又通越した挨拶で、黙つて居られぬ處だつた。けれども此の雑沓の中で、兎や角附けたりを言つて済まされる事ではあるまい。「お桐さん。」

と更めて呼び懸けた。

「は、」と今のを忘れたやうな訝えた顔。

「もう少しと、静かな處は歩行けまいかね。」

「あ、貴下も静かな處が好どすか。」

「恠う揉れては叶はない。最う谷底のやうな處が結構だよ。」

「今些と辛抱おしやす。しばらくはな、西へ行ても東へ行ても、同じ事にきつおすえ。」

と聞き、清之助は、枕が立つて、其處で綱の留まる、丁字形の突尖に立つた巡查の顔を見た。

髻はあるが、柔和なもので、若旦那が舞臺へ出た風に、靴を踏違へては莞爾々々して居る。：

「いや、所替れば品替る。……東京の女連れだと、ゾツとするやうな電がほとばしるが、此處のは衣囊から煙管が溢出す。

と立淀んで、見る處を、

「わい。」

と喚いて、女の聲で、驚かしたものがあつた。

「や、何處へ。」

「何處へもないもんや、貴下はんが行方知れず、迷子に成つて了やはつたで、見なはれ、皆が連れまうて、鉦太鼓で捜しに出た處だつせ、ほ、ほ。」

と大聲で笑つて、緋縮緬の前垂を挟んだ帯の處で丁と手を拍つ。清之助が宿つた、木屋町の旅館の年増の女中で、元氣の可い豊肌もの。成程三人ばかり、見知越の同じ朋輩が連立つた。

梅には早し、正月過ぎ、旅のものは餘りない。宿屋も隙で、手際な女中が、御堂へ參詣は分つたが、赤前垂は些と解せぬ。

「何うしたい、御袴着用は？」

「これかいな。」

と不器用に引摺んで、

「はけたのだつせ、仲居はん。……昨夜あたりも、万亭や大嘉でお見やしたやろ。……貴下はんに御馳走え。」

あとの少いのは優しく莞爾々々して居る。

「御馳走よりか、……實はね、何處か其處等から電話で然う言つて置かうと思つたんだよ。一寸

話した通り、今夜發足んだが、これからまだ見物して、緩り晩飯でも食つてると、汽車の時間で慌てにや成らん。部屋に散らかしてあるものを一纏に引包んで、革靴へ突込んで置いて貰はう。大事なものは一つもない。お前さんが好きな粗雑で可い。」

「あない言やはる、どもならんえ。」

と大圓鬚を押振つたが、

「言やはるな、合點で居る。お江戸はんなんか差圖は受けんえ。そないな事は、前刻承知や。

ちやつと若旦那から電話があつたえ。」

と胸を敲いて言ふ。此の若旦那が、清之助の友達で、此の度の京見物は、諸事其のはからひ宜しくであつた。

「そしたら、何どす、此から嵯峨へ行かはるか。……最う行かはつたか。」

「まださ。」

「若旦那は、貴下が、北野から二條へ戻つて、嵯峨へ行かはると、こない言うてどしたえ。ちやとしゃはらんと遅いがな、どないなもんえ。」

九

「汽車はゆつくりだつて、然うのんきにはして居られない。嵯峨と云ふ話もあつたけれど、行つた處で、此の様子ぢや日が暮る。で、今度は先づ見合はせたんだ。これから清水へ行くんです。」

と忙しい處で、時計を見た、彼は四時半。

「はあ、清水へ、そりや思ひ着きどす。えらい可うおすがな。貴下はん、氣をつけて行なはれ。

お連がある言うて面白づくに、音羽を越えて、兒ヶ淵へなぞ、行てはならんえ。」

「何んだ、矢張名所かね。」

「名所や云うて、藝子はんが心中をしやはる淵やえ。」

「馬鹿にするな。」

と笑ひ棄てると、案外眞面目で、其のま、擦違ふ清之助の外套の袖を、込合ふ中の人知れず……

「今日の貴下のお連はんの姉はんがな、つい近い頃死なはつたんどす。」

と帽子の鏢から、顔を見上げて小さな聲。

「それからな、妹はん、」

と愈々低聲で、

「……お連はん、可うすか。日が暮れてから兒ヶ淵へ行かう行かう言うて、人を誘やはる。誰も、

もう行き得ん言ふ是沙汰だすえ。氣をつけておくれやす。
清之助は胸を打たれた。

「人によらあな。」

「ま、其の氣でおいでやす。」

「行ておいでやす。」

「然よなあら。」

女どもが口々で。

ト別れようとしたが、密語にもせよ、其の噂が出たくらゐ、お桐は、人に隔てられて、一寸前後に見當らぬ。

はてな、と胸はしてきよろ／＼すると、巡查が顔を見て、ニヤリとして、黙つてぬい、と象の鼻のやうに腕を伸ばして指をする。波打つ帽子、廂髪、銀杏返、頬被、きんか天窓の動揺めく上を、スイと離れて、眞珠貝が氣を吹いて、月夜に飛んだやうな紫の球がスボンと浮く。

はつと帽子に手を懸けて、巡查に目禮をする背中を、身體ごと横なぐりに、年増の手がドンと来て、

「あれ、風船球お見なはれ、貴下の魂が抜出てます。」

微妙くも申されける哉、姉様。

清之助は群集に潜つた。

お桐が浮出したやうに待つて居て、

「……又鮒を見てお居やしたか。……」

此處で又、五條坂の薄暗がり。で、荅の中から鮒がひらり。

「其の鮒を言ひつこなし、思出しても可厭な氣持だ、鮒だ鮒だは不可いよ。……お前さんは師直だぜ。」と二人並んで歩行き出す。……お桐の黒縮緬の色が隠れて、一ツ星の下を、紋が白い。

お桐は眞直に道を拾ひながら、

而したら貴下は判官はんか。肖てどすせえな。」と、一寸横顔。

「腹を切らせようと云ふ謎かね。……成程些と……」

と行詰る。後に縋つて、

「些と何うおしやしたの。」

「京都ぢや空腹は不可いんだつけ。……北山は巫女所で、口を寄せると云ふんだつてね。」

「知らんえ、ほゝ。」

「いや、随分切つても可い。」

「而したら私、何うしような。」

「三千歳ぢやないが、其の時は、御飯を八杯もめしあがれさ。——あの娘は眞個に可愛いね。簪の晃々で、錦を蠟燭に照らしながら、きちんと高麗縁に坐つた處は、姫君入らせられませう、と見えるが、さあ、と成ると、置炬燵を振袖で飛越すんだ。蜜柑の露も、咽喉へ通らないやうに、尋常かと思ふと、冷酒を湯吞で呷る。」……

十

「つんとして居て、氣取らないで、澄ました中に人懐こく、仇氣ないのに、よく氣が着く。……此の間も床側の丸窓を、ひよいと跨いで入つたのが、月の中から出たやうだつけ。不作法に見えない處が備はつた人品です。……あれぢや樹登りもしかねまいが、裾が綾に掛つたら、枯木も珊瑚に見えるだらう。」

だから眞個だとさ。御飯を八杯食べたと云ふのが、其れがね、廂髪の姉が、金米糖が咽喉へ支へて、目を白黒したと云ふより、餘程華奢に聞えるから可いではないか。」

「だとて私がそんなに食べたら、御飯が此處まで。」

と指を反らして、頤を掬つて、

「充滿え。……而したら咽喉を突いた時、」

と寂しく笑顔で、

「汚うおすやろ、な。」と、眞顔で言つた。

……此の話は、清之助が、随分腹を切らう、に返して、自分は何うせう、と言つた續きである。

……
又黙らせられた、おのぼり氏。

お桐は小さな吐息して、

「綺麗な血が出たら美しおすやろ。死ぬるにはな、咽喉を突いた方が可うおすやろか、女子は然したらいかつい？ え？」

と澄まして言ひつゝ、次第に坂へかゝるのを、引添ひながら、唯姿を見れば、随分今日は遠路をして居る。……荒い風には當つたり！ さすが、引束ねの花月巻こそはらくと亂れたれ、衣紋も瘦ぎすにひつたりして、羽織の紐の傾きさへせぬ。途中の小休みにも、陰で然うした處もなかつて、揺直しもせぬ帯ながら、唯心持、下締の緋の結目が、押合ふ人中でするりと廣く緩んだばかりで、急ぎ足にも棲が崩れず、膚を包んで婀娜な裳の松葉も散らさぬ。……一體が京の女は、

裾を些と長めに着るが、其れにも駒下駄の齒も見えないで、憊う、黄色いやうな、薄赤いやうな、青いやうな路が、上から朦朧として落ちて、天下る雲に引包むで、お桐を押上げて行くか、と見える。

婦人が氣にして繕はないのに、襟も崩れず、振、八ツ口もしつとり着いて、刻みつけた中に白脛の進むやうな、端然としたのが通越して、寂しく凄いやうに成つたのは、兎もすると胸に覺悟がある。……世にも人にも離れて行くのを、神か鬼かが引添うて導く時に、フト何んとなく顯る相好である。

と清之助は其の心覺えがあつて、思はず前後が視められた。

來がけに、大構の白い門に、醫者か、病院かと思ふ、瓦斯が點いて大玄關に電燈が一ツ、寂とした灯を見てから、此の邊しばらくは、ちらりとある灯の影も見なかつた。

人家に離れたのではないが、なぞへの土塀について上る……塀の内は植込ながら、すく／＼と松が茂つた。

あいろは見えるが、見えるほど、お桐の姿が、裾ばかり色めいて、足が暗い。外なら手を取つて引返したらう。

が、さして行くのは音羽山、音羽の瀧の音に聞く清水寺の觀世音。夜の暗さも御袖の雲の楊柳

の蔭ごとよ。あゝ、また一つ星が出た、大慈の露の光輝であらう。

紫の球が浮いて——翁の髯がぼつと白い。

「お桐さん、最う直きかい。」

「草臥れやしたか。」

「いや、私は男だ。然う云ふと又私やかて女どすえ言ふだらうが、氣の毒に随分歩行かせたね。

……間は電車だと言ふものの、北野から壬生までがなかくある。……あれから町通りを二條ま

で。……何處だつけかね、真中を用水のやうなのが流れて居て、軒並揃つた賑かな通りの、向う

横町から、幟を何本もひらく／＼押立てて、眞赤な上下を着た親仁と、椎茸鬘で衾襦袢を端折つた毛

脛を出した若いものが前に立つて、大勢道中笠で練つて來たつけ。

(あれもおばけかい。)

ツて聞いたら、年越のおばけは女ばかり。……あれは京極の芝居で、重の井をする廣告だつて、お前さんが笑つたつけね。彼處等ぢや最う坐りたかつた。口ぢや男だと言ふんだけれども。」

十一

「漸と電車に乗つたので、何うやら一呼吸ついたほどです。……其れも込んでたから、お前さん

は立つて居たんだ。

北野へ月参詣をするんだつてね。あの湧立つやうな中で、御膳を供げる、お前さんを見て、受附けが顔馴染らしく挨拶をした。そりや行くには行くんだらうが、往きがけ二條の停留場で、北と南と電車を取違へた案内者と云ふものだから、……電車にさへ滅多に乗らない、何時も車なんだらう。――

病氣上りだと言ふのに、其の身體で、可いのかい、お桐さん。

坂も思つたより急だ。然うしてずん／＼勢よく上るが、我慢をするんぢやないかい。何故か顔色もよくない。暗い所爲か知ら。……眞個に私にしてくれるんなら、然までには及ばない。

疲れたら言つておくれよ。」

と些としみ／＼となる……

沈んだ中にも、お桐は元氣で、

「よう案じておくれやす、嬉しうおすえ。けどな、私氣がせい／＼して足が軽いのえ。……身體にも歩行く方が可いのどす……其れに、清水はんへ上るのよつて、尙の事勇むえ。――今日は何うしたやろ、此の様子やと、まだ／＼な、一里二里、辛い事些ともおへん。」

「だつて、呼吸が何うも發奮むやうだぜ。」

「寂寞な所爲どす。貴方が私に聞える。弱いえ。――私、動悸も打たんだつせ。嘘なら一寸觸つてお見やす。けどな、貴下の手が觸らはつたら、何うやら知れへん。」

空谷の跫音、くわつと響いて、前途の暗まぎれを、とつ／＼と靴の音。垣を築いたる如く、高等學校の制服着たのが、三人、二人、三人と、雙六の目にきちんと揃つて、雲の湧いたやうにうらうらと下りて来て、傍目も觸らず下へ通つた。

天下泰平、如何に清水詣とて、些と此の同行二人の體は、諸君に對し憚りあり。……清之助は俯向いて過ぎた。

饅頭屋、ぜんざい餅など、一つ二つ燈が見える……から／＼と戸を鎖す繪葉書屋の店もあつた。夜は人通もないらしい。

「今に、あゝして學校へ出るんだね、小兒があつて樂みだね。」
と護謨風船のいきさつは忘れたやうに故と言つた。

「嬰兒はんどすか。」

「あゝ、然うさ。」

「私の許のは女子どす。」
成程、其處までは知らなかつた。

「ぢや、尙の事可愛いだらう。」
「憎い事おへんえ。」

とわけもなく言つたものの、葛の葉でなし……口では留まらぬ。袖口を引合はせ引合はせ、護謨風船を持つて居ようではないか。風が大分染む、……ひり／＼と来て、外套の下でも手を出すのはつらいほど寒じるのに。……誰がための玩弄物であらう。此の母親の指一つ離れたら、紫は忽ち消える。唯此の細い糸のやうに、嬰兒の縫つた絆を、どんな風が揺ぶつて、世を拗ねたことを言ふのであらう！……

「憎い事ない、くらるぢや不可いぢやないか。——抱くかい？」

「え。」

「小兒は抱いて寝るのかい。……いや、あ、夜更しをする稼業ぢや、思ふやうに不可まいなあ。

……」

と半ば獨言に成つて、一寸黙つた。

「乳母が居るの？」

「はあ、好い人だつせ。」

「其れでも間がありさへしたら、些少の間でも抱いてお遣りよ。でないと情愛が薄くなるとさ。

などと言ふが、そんなら私が邪魔をしないで、今日一日抱かせれば可いんだ奴だ。男の言ふ事は恚う間違ふ。……言ふ中にも是だから容は不可ん。我ながら間違つてる。處を、商賣なら勤めねばならない。そんな、こんなで、お前さん、串戯にも果敢ないことを言ふのぢやないかい。」

十二

お桐が何んにも言はないで、少し顔を上げて流眇して、ぶる／＼と頭を掉つた。——此の明瞭で且つ簡単な打消しで、疲れたらうの、寂しからうの、氣兼ねも、心扱ひも、慰めも、する事はさ
らりとない。

其處で、

「お父さんはあるの。」と聞いた。

夜の色が、色香も返事も隔てたが、

「嬰兒はんの父はんかいな、私の父はんかいな。」

と暗紛れに聲がする。此の言は、罪もなく報もなく、仇なくうら若く、清之助の耳に響いて、

キヤリと胸に應へたが、さて、自分にも其のどちらを聞くのだつたか、俄に見當が着きかねた。

猶豫つて、夜を刻んで、

「お前さんのさ。」

「内に母はんと居やります。」

「あ、阿母様も達者なんだね。」

と急に勢よく言ふ。

お桐は力のないものいひで、

「お母はんは違うとるのだつせ。」

「え、繼母かい、いや、其れは。」

と又思當つたが、引續ければ同じ事を繰返さねばならないので、……

「而して、嬰兒はんの父はんは。」

「居やはる。」

と軽く言つて、身動きをする袖が觸れた。衣摺れがさらりと音する。まだ宵だのに……名所の坂は名ばかりで、寂寞りと、何んにもない。しばらくは家並も途絶えた。

清之助は、我が楚音の高いのを聞きつけて、時々耳を澄ますやうにしたけれども、お桐は裳の氣勢のみ、駒下駄がすつとも響かぬ。

「ぢや、心配をするがものはない。其の父はんは然う言つて、もつと何時も嬰兒はんを抱けるや

うにしてお貰ひよ、……不可いかい。」

「出来んことおへんのどす、……商賣な、留めよ思へば留められるのどすえ。お金子も澤山くれはる因つて、勤めも氣儘やはけ、今日のやうに運動して遊ば思や遊べるのえ。」

「其のくらるで何故藝妓を留めないのだね。旅のものが遺放しに、心にもない深切めかすと、つもられるかも知れないが、いや、實に好いてすべきものぢやない。早い話が、お前さんが、餘所の娘なり、極つた夫のある人なら、何も嬰兒はんを内に置いて、一日私と一所に歩行かなくつても濟む譯だ。」

氣障がらずに聞くさ、可いかい。」

と一つ壓へて、

「まだ、まあ、お前さんくらるから、最つと年上の連中は、善いにしろ悪いにしろ、好勝手も知つて居るから、些とは勝のやうなものだが、舞子と成ると、實にあれは情ない。中や乳首より堅いものは當らないほどな口へ、かち／＼杯が打附かる、あれは何うです。……客も酔つてりや有頂天で、分別もなく飲ませもする、又小兒たちも無我夢中で、まくりの氣だらう、がぶ／＼遣る。背中を斷割り鉛の熱湯、體の可い拷問呵責さ。何んの事はない、鶯の口を捻開けて、鹽を嘗めさせると同じ事です。……お節句の白酒だつて、お雛様の口の端へ附着いたら何んに見える？」

昨日だつてか、芝居で見たが、極彩色の綺麗な處が、十四五を頭に、十、十一ぐらゐるまで、七八人、新高の出張り假花道の附元と云ふ、衣服なら襟の處へ、赤いのがすなりと並んだ。

並んで、何んかの幕合に、鰻か、鯛か、井を揃つて持ったが、あの板のやうな帯を張つて、うつむきもしない行儀は可いが、土間へ向つて正面を切つたは何うだ。

然も其れですよ、……膚撓まず目まじろがず、雀のおむすびほど割箸で搔ほじつちや、すかすか遣る……人間が飯を食ふのに、胡坐も立膝も遠慮をしろ、と云ふんぢやないが、あの酒亞として取澄まして、是見よがしに臆面のない様子を、京の人は、私は知らん、旅他國のものが見ると、いや、見る方で極りが悪い。

江戸ぢやないね。」

十三

「が、何も可哀相に、子どもたちが悪いのぢやない。前々からの習慣で、あんな稼業を、派手な、立派な、豪い事と思ふから、正的に向いて恥かしくも思はんのだらう。江戸ぢや俯向きます、皆な一寸陰になる。今時ぢや、何處の何處でも、藝妓をして極りが悪い、と自分で思ふものもなか

らうが、其れでも舊を受けついで、誰も言はないが自然に卑下をするのが床しいのさ。で、何んとなく、世の中から槍襖を造られて、穂尖を握つて突立つから、其處で商賣人は身がしまつて、身體もきり、と、氣に意地も持ち、張も出る。

此地のは手放しです。一寸見ると、羽を廣げて自由に飛廻るやうだけれど、……其の實は、祇園なら祇園と云ふ大きな籠の中に入つて居て、目には見えぬが、其の區劃の中を出ないのぢやないか。おまけに舞子などは、長い翼に縫上げがしてあるから、袖が重たくつて振切れまい。

處で、振切れない其の翼を開かう、籠を出ようと、悶え、焦る、と見る目には無慙だが、しかし外には廣い世界と、巢なり時のあることを知つて居るだけが幸福で、機會があつたら出られもしようし、傍から救出すにも手懸りがある。

が、籠の中で孵化つた金絲雀は、戸を開けると恐怖がるだらう。土鼠は目を拜むと眼を眩す――舞子も矢張り、籠で育つて果てるんだね。……其れをあらはれとも云ふ事か、皆がまはりへ寄つて集つて、綺麗だ、妙だ、と、賞讃す。……御覽、煽ぎやうが烈しいと、扇の風でも蠟燭が消えるんだよ。

串戲はよして、お桐さん、自分も早く身を堅めようし、忘れても、嬰兒はんを舞子になんぞしようにとは思はないが可い。風船は親が持たせるし、銚子は客が持たせます。……

否、否、そりや然うさ、然うさ。可愛い兒を舞子にしようとは思ふまい。——此の土地ぢや、母子代々と云ふのが多いさうだが、ね、其れが今言ふ、金絲雀の卵だよ。が、お前さんは、様子を見た處でも、小兒を賣物に出さうと思ひさうな人ぢやない。ないが、土地に居て、然も親が其の商賣ぢや、見やう見真似に、可い事とばかり思つて、小兒の方が其の氣に成つて、新高で、幕間で、揃つて正面を屹と切ります。其處が、金絲雀の卵なんだね。

いや、まだ誕生前だつけね、嬰兒はんは？

と心着いて、思はず笑つた。

「が、其れなら尙可い。疾く其の嬰兒はんの父はんと相談して、苦界を抜けたら可いぢやないか。何かい、然うしてくれないのかい。」

「それはな、私が、望むなら、ひかせる言うて。」

と切々であつた。

「ぢや、何かい、向うには極つたのがあつて、父はんの内へは、お前さん入れないのかい。おかみさんに成れんのだね、……お待ちよ、其處は又些と考へものだがな。」

「おかみはんは居やはりはせんのだす。」

「ぢや、何故、考へる事はないぢやないか。」

といひながらフト思つた。

「あ、舅があるのか、はてな、舅姑があると成ると、些と煩かしいか知ら。」

「何んの、舅姑なんかあるのやおへん。」

「小姑も、」

「はあ……」

「む、では、お前さんの親たちが不承知かい。」

「母はんもな、貴下、」

と特に繼母を言つて、此處で聲が曇つた。……清之助は又血に響いた。

「お金子澤山くれはるよつて、不承知なことないのだす。」

「可、」

と故と勢よく、笑を聲に含ませて、

「分つた、お前さん情人がある。」

「え？」

「間夫が、情人があるんだらう。」

「欲しうおすえ。」

と聲を切めて、驚くばかり力が入った。
「私、祇園の小鳥どす。知つてまつせ、——誰も籠の外を知りやはらん、金糸雀の卵どす。其の親どす。……真綿の中にくるまつて、ぬくとう氣やすうして居やはる。紗綾縮細着てな、西陣の帯締めてな、裾一杯に飛びやはる、袂を開けて舞やはるえ。」

十四

「其のな、祇園の藝子入れた、美しい鳥籠はな、玩弄物にする人が大事にしやはるよつて、雨にも風にも當りはしやせん。世間のな、苦勞しやはる女衆が、涙拭かはる袖に鼓抱いて、御飯焚きやはる手で、茶の湯して居るのどすえ。けどな、矢張り籠の中に居るのやはけ、山雀の藝當だつせ。」

藝はせいでも、山雀は山に居るのが可いのどす、撞木渡りよりか小枝うつりして、地唄歌ふよりにチロ／＼轉つて居やはる方が、なんぼ可い藝や知れん。藁屋で聞いても、御殿で聞いても、手に取られん、位が備はつて見えるのどす。

野に居る鳩は羽も光る……動物園の孔雀はな、綾錦の帯擴げても艶がおへん、と私思ふえ。淨瑠璃の文句にかてな、姿をトンと投入れの水仙清き言やはるが、夕霧はんは活けた花。——私は

陰でも根が欲しい。屋根の下に生え、では、雨も風も強いやろが、其のかはり、天から直接の日が當る。……其のな、日の光受けるためなら、霜も乗せうし、雪も被ぐえ。雨風なんぞ、槍が降つて大事ないえ、なあ……

然うやかて、私など、其の、日の光には遠いよつて、先あ前へ、霜が欲しい、雪が欲しい、身を切られたい、凍えたいすえ。

何んにも知らぬ籠の衆は、世の中からは花笠で圍はれてる思うてどす。京の藝子も氣がつくと、槍襖がよう知れるえ。

今日は貴下が言やはつた。眞個に！私はな、其の以前、函嶺でな、其の馬牽いてくれはつた西洋人から、籠の外、山な、森な、時もある事を、はじめ聞いて——其の時分つた。

金子澤山くれはる言うて、撫で擦つてくれはる言うて、棹竹持つて狙うて歩行く、雀さしが何んになる！……嬰兒はんの父はんかて、雀さしや、え、貴下。」

と肩を寄せた。鳥の翼が、襟卷のあたりか知らず、外套の袖を透して、清之助は、身に沁むばかり慄然とした。

「皺くたのお爺はんやが、其れが私の時どすか、巢どすかいな！……私可厭え！」
と拗ねたやうに、身を揉む留南木が暗がりに、ぱつと散つて、

「天から射す日に照らされたうすせ。其の前に雪が欲しい、霜が欲しい、苦勞がしたい。私が慥うして煩らふのはな、昔の話に言ひますやろ、蒲團に寝かした金魚の所爲や。生命の水に入れたらな、上へ氷が張つたかて、何食べいでも生きて居る!……」
嬰兒はんお乳が欲しかろけれどな、……其の母はんは、氷の下の水が欲しい。……氷柱割つたやうなのが、咽喉へすつと通つたら、何ほど胸が透くどすやろ。其の一雫もないよつて、呼吸が詰るやうで死ぬか思ふ。辛うおすえ。」
と弱い聲。

「お桐さん、情人が欲しいね。」と、清之助は串戯ではなく、しみじみ言つた。

「……………」

「ね、然うに違ひない。」

「知らん。」

「何、生娘ぢやあるまいし、藝妓が情人に不自由をする法がありますか、明日からでも拵へれば可い。」

「東京では、直き出来ますかいな。」と言つた。

一句、清之助を抉つたのである。

「京ではな、駄目だつせ。そりやな、今、慥うして、貴下はんはんに話したやう事言つてお見やす。此の京の人やつたら、明日まで待ちやへん。……途中から、家へ歸つて、直きに金子持つて來やはりますえ。其れで出来る情人どすか。」

私が言ふのは、兩方、命。

最惜いの、可愛いの言つたかて、死ぬ、死なうとは誰も言やへん。……清水の山の奥にな、兒

ヶ淵言ふのがあるのだす……」

清之助は、思はず、

「むゝ。」

と、唸るが如く頷いた。

十五

「晝間は思はんえ、月の良い晩でも、暗夜にでもな——其處へ一所に連れて行ておくれやす。——いくら頼んでも、随分と、酒のんでいきらはる人もあるけどな、來い言つて、連れて行つてくれはる人さへないのだつせ。」

好いた男でお見なはれ、女子やな、私なら、戦争にかて跟いて行く。

卑怯だつせ、情がない。金子やるから人大勢雇うて行け、兒ヶ淵へ、……と、こない誰も言や
はるのだす……大江山の仁輪加やないえ、四天王連れて、山へ行て、何うするのだすえな。私え、
可厭え。」

「お桐さん、」

と更めて、

「而して、もし連れて行く男があつたら、夜夜中、其の淵へ行つて何うするつもりだね。」

「あの、互に生命と生命なら、其處で二人で死にますせ。が、な、私など、そんな事望んでもあ
かぬはけ、せめて其處まで送つてくれはる、優しい人やつたら、私一人飛込んでな、後世弔らう
て貰ひます。」

「あ、危い。」

と躓いた手を取ると、密と取つて、

「恥かしいえ、こんな事、貴下に話して、……歸らはつたら、おかみはんに黙つて居ておくれや
すや、東京の女子衆に笑はれまつせな。」

「お桐さん、ぢや連れて行く、と言つたら私とでも可いかい。」

「え、行つておくれやすか、さあえ！」

と、ぐいと取つて、すつと急ぐ。……清之助は足が浮いた。が、お桐の姿が臙に立つた。

「いや、然うすると、——お待ち、東京へ歸つて話したら、私の方が笑はれる。相談を掛けられ
て、女が行きたい、と言ふ處へ、和蘭陀見物と言ふのぢやなし、たかゝ音羽の山一つ、連れて
行かれぬ法はない。けれども、何故か力がない。……此の様子ぢや、ものは串戯にしろ、お前さ
んが、淵へ入らうとすると成ると、私の腕で立派に留められるか何うか分らん、かつてお桐さん
は殺したくない。」

「而したら一所に、」

と振向いた、笑顔が慄然とするほどで、

「死にましょか。」

「む、まあ、参詣をして考へよう。」

四邊を見ると、早く葎を下ろしたが、兩側は、ずらりと並んだ商店で、フト虹が立つたやうに
明く成つた。羽目を洩れ、節穴を透く燈の影が、ちら／＼と坂へ流れて、狐火を見るやうな。

音羽の樹立が城を築いて、中空に梢の尊い、清水寺の大手下りに、天さがる坂の上からするす
ると下りて来て、白が鼠に、濃く、藍になり、浅葱に顯れ、霞に仄に、近づくまゝに由縁の色、
紫颯と袖を長く、藤の花を地摺りの姿で、裾を末濃にゆらくと中脊ですらりとしたのに、最

う一人、燃え立つ牡丹の花片一つ、赤い手絡の圓鬘を艶々と大きく結つて——成程遠目に見えな
んだ——くすんだ濃い茶の詰袖に、石持の三紋、黒縹子の襟かけて、緋縮緬の前垂蓮葉に、淺葱
の蹴出を仄めかした、服装は茶種に蒼空ながら、脊丈はいたいけな撫子ほどな、と見ると十二三
の舞子が別に……

紫なるは鬘斗目の袖、衣紋凛々しき小姓扮装で、白博多の帯を歌留多結び。目鼻立すつきりと、
雪のやうな細面に、黒髪の鬘を豊に、繪を見るやうな若衆鬘。……扇子を斜に胸をせめて、きり
りと帯にさしたのが、腰の絲の青柳に楊弓の箭のそれたやう。

其の圓鬘を肩のあたりへ、すらりと脊高う手を曳いて、見迎へ顔が穂に出でつゝ、薄のやうに
靡いて来る。と此の何處までも包ましく、もの騒ぎをせぬお桐が、思はず喝采と調子高に、

「おゝ！」

と言つて、はつと出合つた。角に兩方家を挟んで、産寧坂が、三人の姿で分れて、雲のやうに
左へ走る。……

顔を合はせて、

「あれ、三千歳はん、岸勇はん、よう、おばけやしたえなあ。」

鬘斗目の藤は年紀十六、圓鬘に結つた撫子は、其の乙で十三の、舞子二人は姉妹と、清之助も

知つた中、我を忘れて見惚れてゐむ。……

十六

「清水様へお参りやしたが。ようお参りやしたえ。」

お桐が、二人の振袖の裾と前垂の端とを、伏目に見るやうにして言つた。

思懸けない舞妓たちが、美しい此のおばけに、そゞろに成つた氣も、最う沈んで、姿も復其の
氷の下の水に臨む。

「は。」

と言つて其の扮装を、出會つた連れの清之助に、恥らふ風情で横に背いた、淺葱の襟に頸の雪
おくれ毛のたゞほんのりと曇つた他は、笑靨も頬に透過つて、此の宵闇に月の顔。

妹の岸勇は、濃い紅の口元が、墨を嚙んだ徒な手習兒のやうに、莞爾すると、圓鬘も据腰の嬌
態を造つて、姉の袖を一寸取つて、

「どないなもんや、お桐姉はん。」

と澄ました顔。

「眞個、好いお若衆はんや、けなるおすな。何處から連れまうておいでやした。」とお桐は岸勇の

其の様子を可愛げに、あやすやうにして言つた。

「兒ヶ淵からどす、なあ。」

顔を見る。と見返つて、

「何言ふのんや」と、三千歳が、鈴を振るやうな聲して、たしなめて、遮つて、裾を軽く、此方に振向き、細面なのが優しい目で、

「姉はんは、おばけはしやはらなんだんのか。」

「ばけてますせ、お見やす、……東京の奥さんに……」

更めて清之助に肩を並べた。角家の戸の隙間を、絲のやうに洩れ来る灯が、眞黄色な細い霞で、袖を縫合はせた模様に見える。

「先夜は失禮。」

と熨斗目の袖を、ひらりと翻して會釋する。若衆鬘の元結も背筋の紋も際立つた。

「あゝ、綺麗だね、二人とも。何より増な土産が出来た。……而して二人切でお参詣したの。」と清之助は、其處から姉妹が歸るらしい産寧坂が、穴のやうに眞暗なのを見て尋ねたのである。

「豪いね、感心に寂しくないね。恐怖くはないかい。」

「はあ、些とも恐怖ごとおへん、なあ、岸勇はん。」

「私等が、おばけやはけな。」

顔を見合はせ、何故か二人が向合つて、花やかに吻々と笑つた。

「えゝ、えゝ、えゝ。」と云ふ聲が、暗がりの中に掠れて聞えて、むく／＼と、灯離れた坂の隅で軀を起したものがあつた。……唯見ると、面のやうに眉、鼻、額、口の皺の、くつきりと深く刻まれた、顔の長い老爺で。鼠色の頭巾を、背屈まりに搔すくめた其の頸に折掛け、黒の紬の被布を被て、大きな藁草履を穿いたのが、こゝで心着けば前刻から其處に蹲んで居たらしい。掛聲と一所に、二寸三寸、やつとこなと伸びる身體が、やがて、杖の上に出た——其の杖も長くはない。纜三四尺で事足りる。曲つた腰の、胸一杯に突支棒にするのであるから。

寄る年浪を漕ぐやうに、權の手練で、軽く掬つて、路を刻んで、

「えい、えい。」

又言うて、来て、四人の中へ頭巾を入れた。が、浮世は見盡したらしい老の身の、目を瞑つても、顔は分ると云つた風。誰にも目をくれず、獨で頷き、獨で笑うて、

「えい、えい、ふふふ、可うこそや、恐怖がらいで！ 美しい孫どもが、何んぢや、……此

方がおばけぢやに因つて、夜が恐ろしいとの。ふふ、ようかし恐ろしなからうぞ。

こな、姉孫や、兄孫どのも聞かつしやれい。老の愚痴なやうなれどの、月日の經つ、疾さは、

疾さは！……」

とぶるくと頭を掉つて、

「や、最う、木の葉が風に舞ふやうぢや。それくと言ふ中にも、今日は年越よ、年越の。歳の神様が、こちらの清水の舞臺から、眞葛ヶ原へ飛ばしやれるぢや、何んと譬へたか、は、は、は。」
手を其の俯向いた額に當てて、杖の揺れるやうに一つ咳をした。

十七

「其のもの、歳の神様を留めうとして、芝居して見せる氣か。其處な孫どもが舞臺へ上つて、摺れつ、纏れつ、遊びまうて坐せたは可いがの、見さつた通り暗うなつたで、路が寂しうて歸られぬ氣で、私が念佛堂へ頼みにぢや。處で木魚をもくくと敲きやめて、こゝへ送つて來たぢやの、ふ、ふ、さて又、道草食うて居すと、疾うござれ、えい〜。」

獨言のやうに言うて、杖を漕いだり。

「ほ、ほ、皆知れて了うたんえ、かなはん。」と、三千歳は袖を合はせた。

「圓山のなかを何うおしる。祇園まで送られやはるか、えらいな。」とお桐が空の星を見ながら言ふ。

「姊はん、お桐姊はん。」

岸勇が口早に、

「産寧坂の下にな、合乗が待つとるんえ。車夫はんもお居るよつて、大事おへん。」

「そしたら、何うして連れて來んの？」

「然うやかて、な、車夫はん連れまうて、お参りしたら、おのぼりはんのやうやないか。」

聞くと、お桐が、清之助の外套の袖を一寸曳いて、

「氣をつけておくれやす。……此處にお居るのは誰や。」

と岸勇を優しく睨む。

清之助は怪顔して、

「御挨拶だね、お桐さん、然う言つちや尙悪い。」

「あ、然うや。」と片手を胸に、襟を引合はすやうにして、俯向いて莞爾する。

老爺は、背中泳ぎ、拳で腰を丁と打つて、杖を一つ石に支いた。

「え、孫たちいかつせえ、坂の下まで見て進ぜる。」

「そしたらな、あんたはん、後に逢ひまつせ。」と三千歳は、暗まぎれにも細りとした紫小袖、襟の淺葱に水際立つて、生際も濃く色香も揺ぐ、藤の俤また目につく。……

其房長き花の袖から、岸勇は紅の前垂を、ほら／＼と、蝶の翼を姉に離して、ものの氣勢の可懐しい、はつと散る薫の裏に、清之助を、真中に挟むやうにして、眉を展いて下から流眇。發明な瞳の働で、じつと見て、

「……此の間は、ちよぼつとほか逢はいで惜しうおしたえ。」と可愛く言ふ。

清之助は思はず、外套の袖を開いて、石持の其の圓い背を抱込むが如くにして、三千歳を見向きながら、

「いや、君たちにもなごりは惜いが、最う東京へ歸るんだよ。」

お桐は拗ねた状の背後向きで、あらぬ、坂の上の空を仰いで、

「三千歳はん、ちよつと、あんた一遍留めて見ておくれやす。」と澄ました聲する。

「私ではあきまへんえ。」

「そしたらな……岸勇はん。……」

「私かて知らんえ。」

花やかに二人で笑つた。夜櫻に燈が灯れたやうに。

「覚えておいでやす。……あ、そないな事言やつたら、ほら／＼、産寧坂の鹽舐女子が、かがッ。」

と柔かな握拳を、白く返して額に當つた、お桐は腰を曲げて衝と顔を。

「あッ。」

「きやつ。」

「え、え、え、轉ぶまいぞ、これ、これ、産寧坂で轉ぶと最後、三年の壽命と云ふぢや。……ほ。」

と地を吹くやうに咳をして、

「其處な娘も轉業な。……これ轉業と云へばの、私が留守の庵室で、また木魚を敲いて轉がすまいぞ！ 然らば、客人參つてござれ、立春は大吉ぢや。孫ども待ちな。」

と云ふ聲が眞暗な中へ消えた。坂の石段、舞妓の蹠音、綿に金打つ響あり。

戸の透間洩る燈の影に、濃やかな鬢のほつれ、お桐の片頬は蒼白かつた。

凹ますやうに胸を擦つて、

「氣せい張つて威したんえ、お、しんど。」と幽な吐息で、寂しく微笑む。

十八

「悪い串戯をする。私も驚いた。お、辛度もないもんだ。」

清之助はお桐の顔を瞻つたが、最う尋常京の美人であつた。……一人姉さん鼓が上手で、舞も巧と聞く——おくれ毛を手に捌いて、撞木町から來やんした、と櫻を抜いたら凄からう。不用意な戯にも、自然と備はつた所作と見える。

「あんた、私やよつて吃驚しやはる、三千歳はんのおばけの方が、どない可恐か知れんのえ。振袖のお稚兒やないか。兒ヶ淵の主が出て、産寧坂から圓山抜けて、祇園へ通らるンやつたら何うおしる。」

と袖を合はせて歩行き出す。

「然うすりや戀煩ひに成る。……私かもしか婦たとさ。眞個綺麗で、杜若の幻のやうだつたね。お桐さん——昔、江戸に、似た話があるんです。山の手の麻布邊から駕籠で遊山に出た娘が、上野の三枚橋。あゝ、然う言へば、其處にも清水、此の御堂のうつしがある。……其の傍に、秋色櫻と云つてね、一寸お前さんが元祿鬻に結つたやうな女が、何んとか云ふ短冊を其の枝に結んだと云つて名高いよ。今度來たら案内しようね。」

「何うか。……祇園の鳥が、籠を抜いたら飛びまつせ。鳥刺の棹の尖免れてな。」

「そんな間緩ッこい事を言はないで、すぐ其の風船に乗れば可い。」

「しもた！」

善哉餅の看板に、桃の下路、薄紅の、清水坂に柳の姿で、其の紫の風船を見た。

「三千歳はんは車や言うた、ことづけ頼んだら可うおした。」

「手が冷たからう、持つてあげよう。」

「大事おへん、けど面倒どすな。」

「確乎持つて居ておくれ、放すと大變だ。」

……自分でも其の大袈裟なのが漫に可笑い。清之助は實は、嬰兒はんの土産なのを、つい忘れて、壬生の門を出しなに逢つた旅籠屋の女中が笑つた、おのぼりの此の魂が、お桐の纖手に、絲で留まつた事と思つたのである。

「而したらば？」

と眞に成る。

「と其の三枚橋の袂で、すつと雲のやうに駕籠の戸を擦違ひに通つた、悚然するほど美しい小姓があつた。……白菊の模様に染まつた紫の振袖で。これがね、江戸中を焼拂ふ通魔の所爲ださうだよ。」

「は、あの、振袖火事の話ですか。」

と聞く人が知つて居る。

「明曆の、……あゝ、御承知か。」

「悉し事知りへんけどな、貸本で讀んだのどすえ。」

「其の方が一番悉しい。私は飛々に聞いているばかりさ。何かい、本は好なの。」

「大好きです。分りはしいへんけどな。……晝間内に居たら、母家から、中庭離れた、別の二階に一人で居て、小さな机置いて、……壁にな、死なはつた姉はんの寫眞飾つて、そしてな、本ばかり讀んどのどすえ。……誰も來ては成らん言うて置く。半日の餘も、私が居るか居んか、内知らんことが不斷どすえ。死なう思へば其處でも何時でも死ねるのどすな。」

ではと明日のお茶ぐらなるものいひ。

清之助は答へかねた。

「あのな、麻布の其の娘はんが、綺麗なお小姓に逢やはつた言ふ、三枚橋は、上野から見て此の邊の處とすか。」

聞くと清之助は悚然とした。夜が窪んで朦朧とした地の深いやうな暗がりを、ふつと湧いて、三千歳と、あの岸勇の、今も目に着く……奇しいまで艶な姿が、衣摺の音を立てて、すら〜と來さうでならぬ。

「否、」

と言消し、清之助は瞳を轉じた。

音羽山、南無、清水寺、正門の石段は、ほのく〜と浮世の暗に區劃を作つて、廣き霞にひだある狀、恰も聲なき瀧の如く、明星さがりにお桐の黒髪、末は外套の袖に流れた。

十九

「三枚橋から、黒門の石段は、まだ間がある。……第一もつと賑です。……誰も居ない、寂しいね。」

と思はず言ふ。

段に向うて黒い影は、實際、こゝに二人の他にはなかつたのである。其の影の後映すやうに、鎖した兩側の小店が續いて——其の處々に、沈んで陰氣な灯は、これも鴨川の水に映るか、渡り來し松原橋を思出す、遙かに夢路のやうであつた。

「眞個な、三千歳はんたちは可恐しおしたやろ……一人では來られへん。」

摺寄つたのも可懐しく、肩を組むやうにして上り掛る。……と人の姿のふら〜と且つ黒く動くのが見える、燈はどんよりと白かつた。

「あゝ、待つておくれやす。」

カタリと駒下駄の軽い音。

「何うした。」と同時に止まる。此の人の足は、恙う石を渡るにはなよやか過ぎよう。随分今日は歩行かせた。……

清之助は一段、斜めに肩で肩を支へる體で、

「さあ、最う一息、姫君お草臥れではあらうけれど……石の棧橋、それ石橋を舞ふ勢で。」

と勵ましながら打笑ふ。……褻捌きする裳のあと、冷き牡丹開くべし、見上ぐる空に礎消えて、雲の左右に躍れる獅子あり。

お桐の氣は衰へず。

「あなたの方が幾度も躓きやはつて、私些とも弱りへん。けどな、思出した。……丁度此の邊どしたえ。……一方でお参りに來た時にな、急にお腹が痛うなつて、立つ事もならんのどすせ。段の角へつかまつてな、師走の寒い暮方どす……氷りついて居たればな、——あの、お見やしたる、三千歳はんやら送つて行かはつた、念佛堂のお爺はんが出て來やはつて、私をおぶつておくれやした。」

「おぶつた？ あんな爺様が、何うしてね。」

「え、く、え、く、聲掛けて。あなに見えはるけど達者どす。私、肩にしがみついて、切な

うおすけ、目を瞑つて居た。……産寧坂の下に、あの琴責の阿古屋はんが居やはつた言ふ茶屋があつて、今貸席どすせ。其處へ漸と行て倒れた夜さり、嬰兒はんが出來やはつたんえ。」

「や、腹が痛いッて産氣だつたの。」

清之助は今も覺束なさうに目を睜つて、

「まあ、飛んだ事だぜ。」

と驚いて言ふ下に、言ふべからざる奇蹟をさへ感じたのであつた。

「ぢや、嬰兒はんは、觀音様の告子のやうなものだ。大事にしないぢや不可いね。」と些と、しんみりする。

「嘘や！ 觀音様は鳥刺やないのえ。——而して私のは爺様の。」

と面はゆげに顔を背けて、

「私、願掛けしたよつてな、苦しい腹がすつとなつて、切ない胸がすつきり下つたと思ふのどす。

——何んの、觀音様が、——小兒授けはしやはりやへん。」

と拗ねたやうに頭を掉つた。

又清之助は言を反らして、

「あ、何んて名だい、嬰兒はんは。」

「みさを。」

と些と考へるやうにして答へする。

「女の操？」

「然うどすやろ。」

「よく、つけたね、母さんが極道だから。」

「え。」

「感心に覺えたらう。極道さ。」

「知らん。」

と衝と棲を刎ねて、肩を撓わにすらくくと急いで登る。……はじめて聞いた花やかな笑ひ聲。

清之助も引續く。

立向つた門の柱は、鏡とも、瑠璃の如き光を放つて、浮出づるが如く堆い。こゝにおはす仁王尊は、鎌倉の住人運慶、一代の作と聞くからに、網戸はづれに、夜を破つて、肩のあたりすつくりと、雲にあらはに見え給ふ。

二十

二人はびつたりと門に着いて、並んで差覗くやうにした。が、偉大なる其の拳のみ、棟を壓する氣勢して、網戸の中は暗かつた。

鬼ではおはさぬ。威厳げな其の拳も、衆生を掴むとは見え給はねど、春寒の宵を裸でまします。

……此の神は、樗蒲市を好ませられて、ソレ一だと投げた掌、あの御力では乞目が出る。……美

婦を張れ、おのぼり来い！ で、石の上の盆莫座に、此方が負けて、お桐を奪られうも料られぬ。

兎角は急がうするにて候。

「此のな、……お待ちやす。」

案内者は行届いて、

「此のな、一寸、角い柱に節があるンえ。同じやうに四本の柱の向う裏にも節があつて、其處へ吻をつけてものを言ふのを、此方の節に耳を着けたら、蟻や言つても蜂や言つても、密と響いて聞えまつせ。一遍、試して見まほか。」

と袖を舉げて柱の其の節、搔探るのが、雲を撫づる風情に見えた。――

「薄暗うて知れ憎うおすえ。」と便なげに言ふ口に、自からしんせつが籠つて居た。……何、木の節や、ものの音信を待たないでも、お桐の聲が、霞を傳つて彩に傳はる。

「澤山だよ。お桐さん。そして、今のも、……此の門も矢張仁王様かい。」

「此處なはな、矢大臣はんどす。」

「あ、羨しい。」と伸上る。

「何うしてえ？」

「嗚、可い心持の微酔でいらつしやるだらうと思つて。」

「誰や。」

「矢大臣様です。其の證據には、…何んだか唄のやうな言種だね。」

と笑ひながら、

「どちらも眞赤な顔をしておいでだらう。」

「そんな、矢大臣はんがあるものどすか。」

「東京のは皆然うさ。而して醬油樽に腰を掛けて、生味噌を嘗めて居ます。あ、羨しい。」

「ほ、ほ、えらい繼兒や、あんたはん、飲みたうすか。」

「瓶詰でもありますまいか。」

「まあ、来てお見やす。茶屋は最うしまうたやろな。」

「殘惜しさうに言ひながら、背後へ手を伸べ、清之助を前へ曳くやうにして衝と急ぐ。…踏心

は、草ともなく、地ともなく、雲井の庭は高うして、するくと柔かかつた。

二三軒、茶店の屋根は、音羽山の影に仄めいたが、葦簀を畳み、床几も引いた、柱と柱の間の空洞が、中凹に暗いのが、靈場の端なれば、宙に書いたる卍に見える。…

お桐は尙覗込むやうにしたが、左の端の店前で、

「悲しいな、あんた、お酒あげましょ思つたけど、遅うまで出て居やはる、此の、とゞろき餅の

お婆はんも最う歸らはつた。辛抱おしやすや。」

と優しく言ふ。

「はい。」

「私、可厭や。そないな返事しやはつて。ほ、ほ、まあ、お聞きやす。此店のお婆さんはな、赤

ら顔の、齒の白い、眩しらしう目皺寄らかいて、仰向いて話しやはる、拵へたやうな人だつせ。

而してな、私の姉はんが、兒ヶ淵へ行かはつた時の事、よう知つてどすえ。…雪駄穿いて、

洋傘持つて、ふつと來やはつた。兒ヶ淵へは、どないして行きます問やはるよつてに、…此

の山上つて、谷へ行て、奥へ入るやて、委し事教へたら、…戻りに來て、茶々よばれますえ、

言うて、和と笑顔して行かはつた。」

と、熟と俯向いた、瞳を上げて、

「お見やす…あれ、向うの、小さな御堂の傍に、高い石燈籠がありますやろ、霞が捲いて上ば

かり、ふうはり浮いたやうに見えるのんえ。」
と便なささうに、指しをする。

二十一

「行つても可いのかい。」

清之助は取つても着かない事を云ひつゝ、其のまゝお桐に導かれて、二つ三つ、星の春立つ宵の空を、こゝに清水の階の前に、切つて据ゑたやうな、龍頭を湧出て、潺々として石に溢るゝ手水鉢の處に來た。……此の手水鉢の許へ寄るのに、可いも不可もない筈である。が、實は此が、お桐が、とゞろき餅の角店から指して教へた、件の石燈籠の傍にある。

……其の石燈籠の礎に、深張の洋傘を一寸肩で支へなりで、腰を掛けて、紙切へ何かしたゝめものをして居たのを、——洗髪の花月巻で、簪の珠の晃々と青く隣りく色とともに、茶店の婆さんは、兒ヶ淵を教へて直ぐの、見送つた目も放さないで視めて居た。が、あはれ、離々たる枯草に咲残つた、龍膽の花の蔭に、はな紙入に挟んで残した、……お桐の姉が其の兒ヶ淵へ沈んだ時のかき置であつたのだ、と婆さんが手に取る如くに話すと云ふ。……

石燈籠に直ぐ近い、其の手水鉢へと導かれたので、清之助はフトお桐が氣を入れた話の發奮に、同じ形に腰など掛けずや、と危ぶんだためであつた。

其處で、お桐を向うへ廻して、自分は彼を遮る體に、石燈籠を背にして立つて、つゝ、井筒振分髪を今様に、唯見ると白蓮の影が射す……御堂の、廣い、折曲つた、向う遙な、廻廊に、苔を揃へて灯し連ねた、三つ五つ十、十五夜の朧の月に、白い珊瑚の粹を刻んで嵌めた姿の、菱形の燈籠や、……其の一つ……又二つ、遠くの燈も水巴に、影を散らしてちらりと映る。……龍頭の清水に差向ふ。

あゝ、嚴かに蒼く鏽びたる哉。其の角よ、眼よ、口よ。深祕なる龍の胸を透して、脈々として清淨方圓の靈池に灌ぐ。……さても如月の京の冷やかにして清く且つ麗しきは、鴨川に飛ぶ千鳥と、三千歳が手から飲む酔覺の洋杯の水と、お桐の涙の人知れず氷る紅猪口と、寧ろ尙ほ其れよりも、こゝに掬んだ清水の柳の露の御手洗と……やがて三條の白銀の瀬に、油も縁に、三つの御明颯と映つて、白菊に玉散る如く、裏透いて、水晶の簾さらりと、鳴るは、音羽の瀧とであつた。

さて、御手洗に對した時、幸にお桐の姉の話頭は轉じた。が、其の石燈籠を背にして、苔の冷たさは、清之助の外套を透したのであつた。

雪のやうな絹手巾を、ほつれ毛の柔順にかつた、美しい口に啣へながら、お桐は向うに、姿

も一段高い處で、

「よう、お灌ぎや。……前刻壬生のお地藏様拜む時、手を洗ふ言やはつた。私、薩張氣が着かいでな、手水鉢の許つと通つた。あんたが、あない言やはるよつて、男でさへが、女子で居て、うっかりして恥かしおしたえ。けどな、あの人混雜やはけ、其の傍へ戻るの、えらい難儀どすよつて、……堪忍しておくれやす云うて、堪へてもらうたえ。さあ、手をお出しやす——美しい、澄んだ、綺麗な水どすやろ。」

手巾を啣へた其の、皓齒を嚙むまで熱と凝視めて、

「これがな、お見やす、氷の下の水やつたら、私、こゝへでも入つて死にたい。……勿體ないけど、流れてますせな。それでも一寸、濟まんけど、手だけなと入れて見よか。」

と、や、激した獨言のやうに言ふかと思ふと、風船の絲を片袖に胸へ締めて、左の白い手を衝と潜らす。と、浅くすらりと、練絹のやうなのが指に擲んだ。白魚に霞が流れて、春の暮れ行く風情して、燈籠の幻の影を、はら〜と追ひつ追はれつ。

「あゝ、綺麗だな。」

と清之助は我にもあらず目を洗ひ、

「銀の色した金魚のやうだね。」

「嘘や！ 鮒どすせ。」

衝と火に觸つて遁げたやうに、手を引込めた肩が震へた。

二十二

却説廻廊を靜に渡つて——戸は最う引いてあつた——御堂の正面を、や、斜めに開いて、伏拜み、それから、すつと……やがて墨繪に薄彩色した、鴨川かけて、四條五條、松原の松の梢を波越すばかり、北野の社に手届くまで、京の町の半ばを彼方へ、雲から乗出したやうに思ふ。……音羽山の星の鏤ばむ、夜の霞の千疊敷、すらりと踵に這るやうで、目に立つ板目の膨りした、此の清水の舞臺へ出て、二人で欄干に凭れた時まで、濫りに言は交はさなかつた。

で、奇とすべきは、石にも角立たず、土も滑かで、木も這る。……他國の道は、通るものが、我と我が足で踏まねばならぬが、京都のは然うでない。前刻渡つた松原橋も相齊しく、此の板敷なんども、いざと立向ふと、廊下の方から掬つて乗せて、すら〜と運ばせる。……

花もみぢ、吉野、龍田織、御手洗には、金色に搦んだ蔦の、蔓唐草の模様も見えず、……梅の枝以て衝と掲げる金欄の幕もないけれども、滴る水の響をあとに、御堂の渡殿に差懸るのが、恰も能の橋がかりに、大口高く立顯れた心地がした。

シテの其の白拍子は、静々前へ進んだのである。

思ひなしか、我を導くお桐の姿が、小袖の襟を、友染の色ある花の影に宿して、菱形の其の緞子張の下を行く、トほんのりと浴る明るい煙に、羽織も帯も朦朧として、たゞ透通る膚の雪のみ、暖かな玉を伸べて、紫の風船に軽くすらくと浮いて渡る。

唯見て、清之助は、大悲の誓……楊柳の御手の絲に、京の藝妓を縋らせて、東海の魚をして靈場に結縁なさしめ給ふ、と心清々しく、骨明かに肉の澄むまで、尊く可懐く感じたのであつた。あれ見よ、燈籠の灯の連なつて、朧々とある隈は、合天井は、梁は、滴る如き翠の影。ものの黒きは濃かな葉、柳の枝の茂れる氣勢。

唐戸越に密と見れば、秘密の山は夜に鎖して、三箇の燭火、三ヶ處に、九つばかりの灯あるのみ。寂として静まり返つて、漆のやうに暗かつたが、伏拜む二人の立居に、燈籠の影も動けば、欄間の隈の柳も揺れて、燈心のちらりとする時、天蓋なりや旗なりや、柱の如き錦の色、蒼く凝つて、龍の背の、薩睡の裳を頂く状に、煌々と輝く折、微妙の薫り燐として、其處へ名香の煙が翳むか、紫の雲が靨黷いた。

立つて禮すれば、跪居て拜む。……お桐の頸は白かつた。——此處へは景清も來、阿古屋も來、頼政も來て、鶴も來て、淀君も來たのであらう。……見渡す額は朧氣ながら、あの雪の衣、緋の

袴、黄金の兜、白羽の箭、萌黄緘の鎧は誰ぞ。——知らず夜半には抜け出づるか。いづれ昔は、今とても、黄昏も光氏も共に詣づる御堂である。……去ぬる日はお桐の姉が、今しがたは三千歳が、岸勇が、其の紫、紅の

此處の額に離る、時、お桐は恰も、舞臺へ繪が抜出したやうであつた。燈籠の影の霞を曳いて

「天上の臺のやうだね。」

清之助は思ひが叶つて、然も安心したやうに、且つ雲の端へ唯二人して迫出しと成つた、馴れぬ舞臺を危つかしうな素振で言ふ。

「ものの譬にも聞く、高い處だとは承知をして居たんだが、恚うして、空の星を視た處は、何んだか、廣い、明い、大きな井戸の底に居て、眞晝間の暗い世界を澄まして視めるやうな氣もする。而して二人ばかりだから、尙の事、私は何故か夢を見るやうな氣がするよ。」

然矣、霞の舞臺の上に、燈籠の翼ひらくと、鶴のやうな蝶々の影。

二十三

「而して此處からすつと恚う見渡す、京の夜は、漆に蒔繪をしたやうに美しい。それには誰も居

す、……二人で此處へ立つた處は、妙に浮世離れをして、龍宮へでも来たやうだよ。」
清之助は欄干に支いて、高慢らしく下界を望んだ頬杖を引込まして、腕組をしつかりするまで、串戯ではなく眞顔で言つた。

又實に、其の空は、眞晝視むる工場の煙突さへ、吐出す煙が、後からく、東山、鴨の水に、拭はれ漉され洗はれて、直ちに薄い霞と成つて、須磨明石の浦風に千鳥を縫つて松に結んだ纜ひ船の帆柱よと視めらるゝ。殊更夜の色に包まれては、其の船が波に沈んで、水底の宮殿の、別の一室に、新築の柱立てした風情である。

屋の棟は、八方から龜甲形の波を合はせ、濃く累り、淡く展けて、處々に濡色颯と、蒼く紅に錦を流す。電燈は、珊瑚の渡殿、瑪瑙の棧橋。四條あたりの川水に、廣告の悪火の燃ゆるさへ、琅玕の巖室に夕づく日の波、月の出潮、廢と淺葱に、朱鷺色に、透通るか、と美しい。然ればこそ砂利を碎く水車も友染の水を巡らし、鍛冶が炎を打つ鎚も、紅を煉る仙人に齊しい都である。鴨川は庭に敷妙の、金銀の星の砂、其の川筋を輝いて、晝の風の名残を瞬き、彼處に、王城の天高く一簇雲の白きあり、まだ暮果てぬ嵯峨の北方、碧瑠璃に澄渡つて、圓山と見る森の隈、祇園一帶、靄低く、仄に薔薇紅を彩るのであつた。

時に、瀧の音が幽に聞えた。此の水底にも春立つと、巖間を潛る祕密の音信、瞰下す左手の帷の下、千仞の谷の孤家に、燈火の影三つ、三筋の瀧を現に映して、耳を澄せば、音羽の音も、三つに分れて傳ひ來る。

巖を刻んだ長梯子が、眞直に其方へ掛つて、折から事も珍らしく、影のやうに三人ばかり、もう最下の段へ、一人づつ、順々に下りて行くのが、恰も泥龜が縦に泳ぐ、潛水夫の形に見えた。……瀧の流に風添ふよ。地に敷いたやうな柳の梢が、海松房の狀に揺れて居た。

お桐がこれを片頬に見替へて、

「阿彌陀堂へ下りて行かはるのえ。」

「あゝ、浦島三人、上れば可い。……乙姫はこゝに居るのに。」

と乗つて出る體で段を深く……

「あら、龍宮や思やはる？ そしたら、私なぞ、恚うして風船に下つた處は、それな、女子の衣服着た海月どすせ。」

「すると海鼠だ、——此の方は海鼠です。然も恚う堅く成つた處は、金海鼠だね。懷中も軽いけれど、雲の上へ乗出して居る形は、ふらく立泳ぎをして居るやうでならない。……然うでなくつてさへ、お前さんとちや、平地を歩いて目くらみさうなんです。高い處ぢや危つかしい。」
「そしたら可厭な心持しやはるか。」

「好過ぎるくらうだね。お桐さんは？」

「私かて、こんな寂とした處大好どつせ、矢張お酒に酔うたやうに、ふうはりと鹽梅よう浮上つて居るやうどす。何時までも何時までも何うして居たうすえ。……けどな、翌朝までも……何んの翌朝までやる、あんたはん歸らはる、汽車の時間までも、此處には居られへんのえな。橋の欄干でも然うどすけど、此の欄干ばかりえ。」

と胸を引いて、向うへ、壓すが如く試みて、

「私たちが、生きるも死ぬるも、欄干一つやおへんか。此をな、ふいと外へ跨いだら、思ふやうに成るのどすせ。……」

而して、こんな、い、心持やつたら、岨へは落ちいで、欄干と同じ高さの空を、ふらくくと泳いで行かれうも知んんのえ、なあ。」

と熟と見越す……濡色に輝く瞳。

二十四

魅せられたと云ふのであらう。凝視められて、顔に其の瞳の透通る、冷い薄絹打蔽はれた思ひで、茫と成つて瞻つた、無言の清之助を促すやうに、

「一寸、倒に成つて、欄干の外へ出て見まほか。」

「一人でかい。」

と正的に見た。

「は、私一人でようすせ……貴下はん、飛べ言やはりや、……」

「まあ、待つておくれ、怪我にも一人ぢや殺せないが、」

と申戯を言ふつもりが、引入れられて、妙に眞面目で、

「此處の舞臺から飛出すと、立旦形が土間へ落ちちたやうに世間の見物が湧くだらう。第一お前さんのやうな華奢な身體は、霞の上へも柳の枝へも、すらりとかゝつて、下までも落ちまいが、……お附合ひをする、骨の硬い野郎と來ると、悲惨や！ 立處に粉微塵だ、些とまあ考へさしてくれたまへ。」

「貴下はんが、何んで私と死なはるもんや、兒ヶ淵へ連れて行つておくれやしたかて、私かな、氷の下の水が欲しい云うて、身投げしたと見て居ておくれやしたら、それで可いのん、本望え。」

「だから、だから其の、」

と何故か急いで、

「薄情でも卑怯でもないけれど、其れだから、兒ヶ淵へは一所に行かれないと言ふんです。さあ、

手を曳いて飛ばうと成ると、何うも、慙う言つては可笑しいけれど、うつかりつい一思ひに、此の勾欄を跨ぎさうでならないんだ。

観音様はおいでなさる。慙うやつて仕切がついてると言ふもんだから、まだまあ此の舞臺だけに、確乎堪へては居るけれど……御覽、それだつて此の通り、欄干に掴まつて居るんだよ。」

「然うやはけな、見て居ておくれやす……私一人で飛ぶよつてに言ふのどすせ。……ほんになあ、今あんたはんが言やはつた通りや。京もな、誰も居ん處に、慙うして居たら、龍宮はんへ行たやうにおすな。」

とあどけない、可愛い聲で、

「海鼠でも大事おへん。海の底へなと入りたうす。……而したら何時までも、こんな心持で居られますやろ。兒ヶ淵へ入らはつた姉はんは、龍宮に居て京を見て居やはるのえ。羨るおすせ。私など、これで祇園へ歸つたら、又莫産に載つた鮎に成る。……鰭が苦しい紫色、……腮に血の出た紅さいて、お、可厭らし。」

と肩をしめた。

「お桐さん。」

俯向き聞いた面を傾け、清之助は差覗いて、

「此の御堂へは、一寸々々お參詣をするのかい。」

「は、月毎にな、十七日には缺かしまへんの。道も近いよつて、暮方から一人で來ることも時々おす。」

「何んてつて拜むの？」

「え。」

と、うるんだ目で見て聞返す。

「何んてつて拜むんだね。」

「只な、手々合はせてお拜みするのえ。私、何も知りへんけど、難有うおすよつてに。」

「お護符は持つて居る？」

「頂いて居りますせ。」

「何處に。」

「背負上げに包んであるンえ。」

「大事におしよ、決して其れを放すんぢやないぜ。」

と幻の中に、清之助は身を正しく、

「片時も、寝る時は枕許へ。……忘れても肌身を放さず持つておいで。え、可いかい。」

而してね、もしか又、どんな發奮に、ひよんな氣が生まれものでない。其の時は、屹と一度しつかり、其のお護符をおさへて、其處で分別をするんだよ。可い可い、分つたかい。」

二

「で、又、そんなに、兒ヶ淵が戀しかつたら、此處を其の水の底だと思へば可い。而して今までより數を多く、度々お參詣をしたら何うだね。……龍宮だつて始終より、時々の方が尙居心が可いと思ふ。淵の水も、海の潮も、雨も涙も同じ水です。」

此の清水は人も知る、楊柳觀音におはします。

「二人で此處に立つて居て、頻りにもの身に染むやうなは、夜の冷たさもあらう、山の樹立の雫もあらう、灌の音もあらうけれど、それよりは觀世音の楊柳の露が點滴るんです。

雲も柳、棟も柳、舞臺も柳の梢にある。……大氣の中に生きてるものが、其の形の分らぬやうに、水の中に居る魚は、其の水は目に見えぬ。

同じで、お互に、樹も枝も知れないが、此處は柳の葉の中だらう。其の淺翠、濃い綠を、水だと思ひ、波だと思へば、流れる風には鬢も濡れよう、靜まる枝には袖も淀んで、燈籠の灯も搖れて映る。其のまゝの淵ぢやないか。

あの龍頭から湧くのを掬べば、望みの通り、氷の下の、其の水もあるぢやないか。

何も淵川へ沈んだり、骨を砕くには當らない。お桐さん、然うぢやないか。」

我ながら説きたる哉、と清之助は打沈んだお桐の色の、花やかに晴れるのを待つ、と間もない。懷疑の瞳は、うるみを帯びて睜かれた。

「よう言うておくれやしたな。あの……な、然うやかて、影のやうな柳ばかりでは、私、可厭。

其枝の茂つた中を、燕見たやうに、私出たり入つたりするばかりでは、辛抱できへん。」

「否、燕だと言ふから悪い。」

清之助は、思はず莞爾して、

「然う、お桐さんが住んでるなら、青柳の茂つた中に、夕月が細り籠つて、薄りと鴨川の水へ映るやうなものだらうか。」

「まあ……お月様どころやおへん、私はな、燕でも蟲でも構やへんけど、一人では可厭やて言ふのどつせ。」

「だから寂しくないやうに、觀音様がおいでなんだよ。」と此には清之助は猶豫はなかつた。

處をお桐が、言の切れるを待たないで、

「そしたら觀音はんは、私の好きな人に成つておくれやすか。鳥刺のお爺はんやつたら、私嫌ひ！」

と拗ねたやうに頭を振つた。雪の頸におくれげ掛けて、
此に支へたが、力を入れて、

「怪しからん事を、そんな！……餌刺に成つて可いものかね。随分お前さんの好いたらしい、まあ、どんなのが望みだか知れないけれど、申分のない、思ふやうな男に成つて下さるんだよ。

若有女人設欲求男、禮拜供養、觀世音菩薩、便生福德智慧之男、

——と普門品と言ふ御經にあるとさ。だから罷間違へば、御自分が男になつて下さるんだ。」と
賺すやうにして悟して言ふ。

お桐は聞沁みる状だつたが、

「其の人やかて、何んどすやる、——矢張り此の舞臺が柳で充滿や言やはるやうに、私の目には
見えんのどすやる。」

「まあ、同じ事さ、然う思へば間違ひはない。」

「私、そんなら知りへん。」

と衝と向う向いて、目も遙に、夜の京の灯を見遣つた。

「……柳やなんか、影でも、幻でも大事おへんけどな、好いた人が形のないやつたら……私居
られやへんの。何の袖へ女子が縫る……誰に抱てもらふのどす、何處の枕に手が入るのえ！……

あのな、一心のおもひが燃えて、天上から振袖の火を降りて、江戸のありたけ焼きやはつた、
——其の、強い、……私らが神様のやうな娘はんやかて、お稚兒の姿を、三枚橋で見やはつたや
ないか。そして、まだ其の記念や云うて、振袖を縫やはつて、それを抱いてこがれ死しやはつた
んどすやるな。」

ときほひ言ふ、優しい聲も、唇にきり、と締つて、臍に燃え立つ紅の艶。

二十六

「眞個に、其の娘はんは、戀に強うてけなりおす。綺麗な振袖ばかり残いて、其の、あの袖の下
に消えやはつた、友染に積る淡雪のやうに、身體は弱い女子やけどな。……

其の淡雪を消す、眞赤な太陽の光をすぐに取つて、思ひの火にしやはつた。煙を立てて、ひら
ひらと人の姿で風に舞立つ、稚兒の紫の振袖は、炎に成つて搦みついて、圓明寺とやらの棟の瓦
の上へ雲にかゝつて、すつくりと上らはつた時は、どんなに嬉しおしたやる。

私、本讀んでも身體中ぞく／＼する、恐怖いのやない、けなるうて。

石段を下りて去た、あの産寧坂曲る角で、先刻不意に三千歳はんが、小姓の姿で來やはつた、
——三枚橋の駕籠で見染めたと同じ姿見た時はな、手を曳いてやはる岸勇はんの前垂も、燃えて

るか思うたえ。

あの姿があれなりで、三千歳はんやなかつたら、私な、——それが、あの鬼でも魔でも大事おへん。……振袖借りて抱締めて、兒ヶ淵へ行きまつせ。其の一念で、——逆も、其の強い、情の

深い、東京の娘はんのやうに火に成つては燃え得えでも、京の私は水に成る。……成つたら水に、水に成つたら、鳥邊野の露、嵯峨野の雨、鴨川には流れいでも、あはれや思つてくれはる人の、袖の雫には成りますやろ、なあ。

帷の暗夜に燃え立つばかり、小袖の裏の白羽二重にも、膚の血潮緋桃と成つて、薄紅に透通るかと、黒髪の艶の光つたのが、炎の消ゆる雨とともに、露を誘ふ聲も濡れて、時に燈籠の灯に水際立つて、袖も裳も滴る色香。

美しい哉、京の水。

「果敢う涙になるのやかて、空蟬と言ひまつせな……藻脱けの袖にも縋りたいもの。……生きて居るのに、あんたはん、影も形もない好いた人、……勿體ないか知りへんけど、佛はんやかて何うなります。」

清之助はしどろになりつ、

「凄いやうだよ、お桐さん。——驚いた、何うも其の烈しいのには。然う何も然し何です、果敢

なむ事はないぢやないか。其れがね、決して影も形もないものとは限らない。願によつては、屹度其の好いた人を、佛が授けて下さるんだよ。」

「あゝ、あの、活きた。」

「然うさ。」

「ものを言やはる。」

「然うですとも。」

「一所に連立つて歩かはる……」

「勿論。」

と答へた。

「清之助はん」とはじめて名を言ふ、知れては居たらう、が此の時はじめて、清之助は呼ばれた我が名に愕然として、

「え。」

「あんたはんでも授かりまつか。」

「詰らん、お桐さん、——私、私などを授けるやうな、そんな野暮な、」

と一寸途絶えた。幽に響く瀧の音……神心ともに澄む折から、謹みなし、と靜に省み、

「そんな間違つた佛様があるものかね。」

「然やかて私が望んだらば、え？」

「望むなんて、」

「望むとするのえ。」

「授かるとします。」

「授かるえな。」

「あゝ、授かつたら、」

「観音様。」

と白い手で……

一足退る清之助を、胸で縋つて、欄干摺にするく二人の袖の音。舞臺の影法師が、はらく

と、燈籠を離れて動く。

「而したら、あんたはん、……これからな、兒ヶ淵へ連れて行ておくれやす。」と外套の端を衝と

取つた。

清之助は更まつて、

「そんな我儘を言ふものには、夫はお授けに成らんのだよ。」

と屹と言ふ。

二十七

「私も男だ、なぶるなら、なぶられようし、遊ぶなら遊ばれるにして、假にお前さんが授かつた好いた人だとする。」

一寸、男と云ふものは、假ひ嫌つて嫌つて嫌ひ抜いてる女でも、時の拍子で一所に歩行いて、もし狼が出て後をつけりや、一足退つて對手を庇ふ。前から來れば楯に成る、左からなり右からなり、其の來る方を歩行くんです。いざ、飛蒐りや蹴飛ばすか、迎も敵はぬなら身代りに咬まれて遣つて、其の隙に弱いものを遁すんです。其れが、嫌つて居る女でもだよ。

お前さんが嫌へるかい。

其れが、死にたいの、死なうと云ふ、活きたい、助かりたいと言ふにこそ、火水も一所、毒も薬も飲みつこだが、——唯串戯にもしろ、手に負へんやうな我儘すると、情人ならば切れようし、夫婦なら直ぐ此の場で暇を出して了ふが、さあ、何うです！」

と笑ふつもりが、聲に出ぬ。

お桐もはつと泣かうとした、音を忍び、しばらくして、

「堪忍して、堪忍しておくれやす。……わけを言はんよつてな、眞個に、佛様やかて、我儘言ふと思はりますやろ。」

我儘やない、眞實え。

姉はんへ義理があつて、私死なねばならんのどす。……あのな、三千歳はんと、岸勇はんは姉妹や、姉妹やけど、腹は違ふのどすせ。三千歳はんの方が貰ひ子で、岸勇はんが實の兒や。……けどな、彼處の母はんが、眞個優し人だな、實の兒より、貰子の方を大事にしやはる。其れも世間の義理やない、眞から、實から、三千歳はんを可愛がらはつてな……衣服一枚でも、岸勇はんより、あの兒に買つて上げなはるんえ。

然うするとな、又三千歳はんが、義理の妹を眞個に大事にしやはるのだつせ。お客はんは、指環貰やはつても、人形貰やはつても、姉、私におくれやす、岸勇はんが言やはると、あい／＼云うて袖から離れて、指から取つて上げやはるのどすせ。優しおすやろ。又な……岸勇はんの其の我儘なが可愛いのおえ。——揚屋へ行て三千歳はんが、ぐい／＼茶碗で飲みやはる事ありますやろ。誰が留めても、莞爾して居て、止しなはらん時でも、妹はんが來て、姉、毒え、言やはると、あい／＼言うて、笑醫壓へて俯向きやはります。もしな、私が此の風船を、」

とお桐の言ふのが、細い絲の縁に今も繋がつて、海月の青い景色がある。

「先刻、三千歳はんに託けごとしますやろ。預りものや言うて構やはりせん。姉、おくれやす云やれば、あい／＼と、矢張り岸勇はんはんに上げなはるんえ。後でな、泣いて、私にあやまりやるまでもどすせ。私また然うやかて、あやまらせはしいへんけどな……」

其のな、岸勇はんの我儘なのが、あんだ、聞かはつて憎おすか。私、憎ない……實の姉や……違つた腹やないと思はん事には、駄々が言はるゝものやない。

聞いとくれやす。……私もな、あの、岸勇はんと同じやつた。——顔までもな、一寸、あの子に肖てますさうな。……

私を矢張り、三千歳はんが岸勇はんにしやはるやうに、甘やかいて可愛がつてくれやはつた、親より大事な、其の死なはつた姉はんも、同じやうに實のやおへん。——義理のある姉妹どした。

けど、あの妓たちとはあちこちでな、私のは姉はんの方が、母はんの産の兒で、私が貰はれて行つたのどすせ。……其の母はんは三千歳はんのと同じやうに、實の子の私の姉はんの方を放つて、私ばかり可愛がらはる。姉はんも一層私を可愛がつてくれやはつた。

矢張りな、姉はんの持つて居やはる、簪一つも欲しうてな、自分のもの打捨らかいても、お

くれやす言うたのだすせ、あい／＼と、何んでも背いておくれやした。」
と涙ぐむ。……聲の途切れた時、木魚が聞えた。……もく／＼と霽に包まれたやうでもあるし、地から湧いて出るやうでもあるし、天から降つて地にも溜らず、樹の間に掛つたやうでもあるし、とぼけた石が、話に點頭くやうにも響く。……

二十八

「お、念佛堂のお爺はんが歸らはつた。」
と言ふ。……お桐は又、其の姉が、あい／＼と言つたのも、三千歳が岸勇に一切を背いて、あ
いあいと言ふ、其れも、――坂で逢つたあの爺が歩行く時に、人とも佛とも分らぬ音で、えい
えい、えいえい、と拍子で言ふ、其れと同じ響きだ、と恍惚して妙な言を。
覺えてからも、やがて十年、同じやうな同じ年の――夏もすゞしの頭巾着た、齒も髯もない、
大爺で、同じ念佛堂に籠つて、南無とも言はずもく／＼と木魚を敲く。――鼠木綿に黒の一重の
廣袖の道服着けた、佛前に屈んだ背は、木魚を据ゑた蒲團よりも低い、造りつけの、何時も莞爾
莞爾した尊者であるから、參詣の老若、いづれも見知越、顔馴染でないのはない。
分けて日參詣月參詣の、足は繁く、廓のものは馴れ易く、舞妓などは、密と入つて、背を丁と

遣つて一寸遁げる、こちよ／＼と擦ぐるのもある。一度などは二人で組んで、一人が背後から目
隠しをした。

「えい。」

と云うて、其の形も、ポカンと撞木を留めた下から、引込らして、ポカリと木魚を突轉がして、
吻々々と手を拍く。

「えい、えい」と云つて叱る。……其の叱るのも、讃めるのも、頷くのも、えい、えいで、杖突
いて坂の上下、大儀なばかりの掛聲ではない。

其の立違つた堂の中へ、すつと入つて、澄ましてお桐が、木魚を敲く事など今でもある。
出て来て、大爺が、

「えい。」
と莞爾やかにほく／＼と頷く。……又木魚の音も、心して聞くと、大爺がえい／＼と云ふ聲に
齊しい。ために、遠くても、近くても、木魚の音を聞くと、もく／＼と静まつて、もく／＼と動
く、其れに籠つて――ピアノ、オルガンの茫とした中に微妙の聲が、谿河の黄金の岩に白銀の水
の絲の觸れるやうに――三千歳のあい／＼も、亡き姉のあい／＼も、寂しく、心細く、そゞろ悲
しく可憐く、背擦らるゝやうにも、胸を抱かれるやうにも響いて聞える。……と言つて、ほろり

とした。

「兒ヶ淵へ行つたらな、矢張り、淵の底の方に、木魚の音が聞えますやろ。……其の淵へは、姊はんが何んで行かはつた。私が遣つたのえ。あんた。」

と切々に……

「姊はんにな、一人言交はした人が出来た。眞にな、生命掛けて好いてやつた。俳優はんどす……帯も紐も、櫛、笄、髪のものもなくしやはるよつて、母はんが中を裂かはつた。襦袢の襟を嚙裂いて、二階にばかり泣いてどす。」

「私な、密と文箱託かつて、母はんの目を忍んで、宿へも樂屋へも使をしたのえ。……知れてもな、私がする使やと、母はんは叱らはらんよつて、私の座敷へ連れまうて、逢はいてあげて居たのどす。」

けどな、段々辛うなつて、活きては居やはらん様子が見える。私にかて見えるんやもの、母はんがな屹と思案しやはつた。

他に意見のしやうがないはけ、お桐はん、あんた、姊はんから、あの人を相對づくで、もらうて了うておくれやす。……妹に譲つたら、あきらめてくれるやろ、としみく私に頼みやはつた。私えらい阿房やつたな。……ほんに、而したら姊はんも、あきらめがつくやら知れん。——今、

其のまゝにして置いたら、命はあるにしたかつて、氣が違はずには居やはりせん。……思つたよつて、横戀慕した。姊はん、私に、あの人おくれやす、屹と言つた。」

と目の艶涼しく、

「漸と黙つて、私の顔見やはつて、人形や簪のいつもの傳や。……あい、と一言いやはつた。」

思込んだ心ではな、自分の男や、氣も心も許した中、よそのあんたが、とれるなら奪つて見や、思やはつたも知れんけれど。……

その俳優もな、浮氣やないか。

小楊枝嚙んで紅で書いても、乳の下切つた血と違はぬ、……女子の切ない状やもの。切火打つても見ようもの。

樂屋かゞみは曇らぬのに、衣服合はいて、丁として、文箱の紐を解いたかて、男の恥にはならぬものを……

と美しい拳を握つて、衣柔かに膨らかな、胸を切めて、しつかと當つ。

二十九

色なき柳さらくと、廻廊長き十ウ十五の燈籠、一列にすつと灯を潛めて、音せぬ風の添ふ状

に、女の黒髪颯と濃く、舞臺は此の時暗かりけり。

「白粉つけたしやくんだ面で、毛むくじやらの胡坐かいて、アイ来た、まだ出る、まだ出る云うて、弟子や男衆の見る前で、姉はんの其のふみを、チャンカチャンカと囃しまうて、文箱からずるすると長う引張つて出しやはつたえ。……」

「……かびた干瓢の味がしたえ。」

と手中を口に當てたが、吐くとよりは身を絞つて、血を灌ぐかと切なげに、肩を絞るのがあはれに見えた。

「でもな、姉はんは死なはつた。對手がかびた干瓢やかて、私が然うしたに違ひはない。——濟む、濟まんは別にしても、懐かして、戀してな、早う傍へ行にたうおす。……」

よし、其れでないとしても、私は容易く覺悟が出来る。一息に唯目を瞑りさへすれば、其のまゝ、氷の下へ行かれさうな事も毎々で。

幼い時、つい隣家から火の燃えた事がある。私を負つて、裏木戸の水門で、川原に釣するのを見て居た子守が、狼狽へた餘り煙の舞込む縁側へ驅込んで、何を周章てたらう、押入の中へ入れた。而して閉めた。……幸に自分の家は焼けなかつたが、半壊して、床の間の壁を鳶口で突落

す音を聞きながら、入れられたなり、出もしないで、震へてばかり居たと言ふ。

近年、圓山の也阿彌樓とか、白晝火を失した事がある。……折から紳縉の客に呼ばれて、丁度一さし山姥を舞つて居た。ソレ火事だ、と言ふと、蜂の巢のやうに湧き立つて、羽を眞赤に、客も藝妓もわつと遁げた。が、如何に急でも、藝の最中、然までには取亂されず、さす手を控へて、捲袖の扇子をかざして、峰を視れば、欄間を覗く煙の端、黒雲颯と吹下ろす。小樓もあげず、裳を曳き、舞扇を小脇に切めて、壘廊下を落つる身が、遁後れて唯一人。矢を射るやうな炎に追はれて、式臺際まで走つて出ると、水も人も渦巻く中、通りかゝりの兵士一員、火を見て救はうと驅込んだ出合頭、躍上る足の發奮に、此の膝頭を磔と蹴つた。あつと脛もなえ、帯を亂し、崩れたやうに腰を落すと、其の場合にも驚いて、兵士は立窘みに成つて熟と見る。火よりも其の顔の恐ろしさに、あれ、と廊下へ驅戻つて、煙の下を座敷へ抜け、廣縁から庭へ遁げたが、炎は忽ち廂を嘗めて、濁朱の瀧津瀬、松に浴び、葉尖から火花が散る。……火氣に惱んで、藤の花が見る見る色變る棚の下に、べつたりと諸膝組んで、舞扇を折つて敷きつゝ、覺悟の口に杖を啣へて、薔薇の薫る手中に、息も吐き、且つ氣も遠くなりながら、つい、別に、あせつて悲しくもなかつた處を、講中で來て居た東京火消が、ほりものした裸體の肩へ、引擔いで出たと言ふ。

火は、當日、別室に、婚禮の披露目があつて、未だ媒妁人も來ない先、櫻炭が蒲團に刎ねて、

花輪櫻の梢を揺つた、折からの風に煽られて燃えはじめた、と後で聞く。……
今日の話の序に思へば、思はぬ男に添はねばならぬ、仔細あつて、嫁に成るべき振袖が、焼滅
ぼした火かも知れぬ。……

「焚かれて死ねば可うおしたな。けど、藤の房では、じつとして、擱まつて死ぬにたよりがない
のえ。同じ色の振袖やつたら、助けよう、言やばつても、火の中を出るのやなかつた。

記念のお召縮緬や、裾模様をな、二階の部屋の衣桁に掛けて、夜さりなどな、姉はんにも言
うて、一人で泣いて居る處は、その昔の江戸の、其のな、娘はんにも變らぬけれど、弱いえ、逆
も火に成つて、振袖に燃え立つて、天へ上る力はおへん。思ふのがないゆるどす、戀しい人を知
らぬゆる。

氷の下の水がなうては、炎の上の煙にもなれぬ。何やかて、私なぞ、露玉はおろかな事、小糠
雨にも成れ得んやろ。

そしたら、東京の女子衆にも恥かしいやないか。私口惜いもの、あんた、途中でも頼んだ通り、
兒ヶ淵へ連れて行て、せめて、一雫、袖の涙に、私を水にして欲しい！ 京の人やつたら頼みや
へん。」

と又縫つた袖を引かして、清之助はすつくと立つて、息も吐かず、お桐を凝視めた。

瀧の響も途絶えるやうに、もく／＼もく／＼たる聲。あい／＼と幽かに、綺麗に、衝と閃いて、
中に交つて、其の音羽山の奥なる淵の水底から、山を貫き、地を潛つて、大爺が蹲まる、頭巾よ
りむくと堆い、大なる蒲團の上、木魚の下に籠るかと、凄く美しく聞えるのである。

「お桐さん。」

と清之助は力ある聲を沈めた。

「……………」

目と目の熱と合つた時、

「行かうよ。」

「え。」

「兒ヶ淵へ。」

「あ、行かはるか。」

と……珍らしいまで、些と燥いだ、飛立つやうな身動きで、

「もう、こんなもんな、放かつて、」とかながるやうに手を放す……其の護謨風船の影は見えずに、
山の巖積が、ばら／＼と、漆黒な木の葉を映して、音羽の梢を倒に、つゝと糸を曳いて眞蒼な
星が流れた……兒ヶ淵へ落ちたであらう。

と見然と飛んだ筋を辿つて、其處へ山越す路筋の、落葉、枯葉の散り埋む、松の下、谷、藤蔓、桂、薄の刈株、木の根も白けた骨の中に、底澄んだ淵の藍の如きが、幽に風も添つて、草ながらおどろくゝと動いて見ゆる心地がして、其處とも分かす、濕つた薫が颯と來た。

お桐の裾は、居ながら、其の亂敷く、常磐木の枯葉の上を乗るやうに見えた。

途端に、手早く外套を脱いで投げたが、下へも捲落つべき勢が、重量で留つて、舞臺の欄干に

翻然と成る。

清之助は、瘠ぎすな中脊の、羽織の袖をぐいと締めつゝ、お桐の手を確乎と取つて、

「顔を御覽。」

と言ふ、……調子が變つた。

「顔を御覽、私の顔を。」

と屹と見据ゑて、

「袖を、袂を、帯を。……二階の居間に掛けて置く、記念の其の小紋にも、裙模様にも見えるだらう——それ、襦袢も紅い花がこぼれる。菖蒲、おもたか、岸の白菊、水の中を今出たやうな、

振袖を着て居るよ。可哀相にお前、お桐さん。可愛い人を、淵へ沈めて可いものかね。

私が殺しはしないから。」

肩を胸へ抱き込んで、

「さあ、よく顔を見せておくれ、可懐かつた、可懐かつた。清之助ぢやないよ、お桐さん、顔を御覽、私の顔を、顔を。」

と云ふ、色の白い、鼻筋通り、眉鮮かに浮出るやう、舞臺の空に星を透かした、影なき楊柳の縁を籠めて、……あゝ、観音の御功德、額に髪にはらくとした、るばかり、肩に餘つて、丈なす黒髪。

「あゝ、姉はん。」

と恍惚した、お桐はぶるゝと戦いて絶つた。

「あい」と清之助は優しく答へた。

其の時學んだ不思議な聲は、もくゝ、もくゝとして、暗にふつくりと湧く其の木魚の底に沈んで聞えた、と思ふ聲音であつた。

で、此の時ほど、心のまゝ、思ひのだけ、骨髓を徹して婦人に扮し得た事はない、——と清之助は人に語る。……

斯の人、姓を袁山とて、若手當時の立旦形が、祇園の芝居に約束出來て、はじめての京のぼり

に、其れとなく、土地の人氣を見に、一度先んじて潛かに旅した、……これは其折の事であつた。

恚くて、や、お桐の心を宥め得た時、清之助は、自分の生命も助かつたやうに思ふ。淵へ行
く女の力は、断たれぬ絆であつたと言ふ。尙清之助が、悚とするまで、且つ凄く、且つ美しく、
潔く感じたのは、――さて更めて手を取つた時、淵の水をつらぬき留めた露のやうに、力なき
お桐の腕を迂り、手尖にはづれて、冷たく光つた、一聯水晶の數珠で。
晝間から、思ふやうに肩の上へも手を上げなだは、京の女の、包ましく優婉なためばかりで
なく、腕に秘して其の數珠が。

三味線堀

發端

路地口から、銀杏返をばさくくに、黄楊の櫛を横つちよな、蓮葉らしい十八九——女髪結と記したのと、歌澤ながしと書いたのと、削り放しの貸家札めいたのが、二枚、長屋の角に打着けてあるから、いづれ其の梳手か、下地子——らしいのが、糠雨の中を袖笠もせず、紅い襷の二の腕白う、

「豆腐屋さん。」

と呼びながら、溝板を、かたくと驅出して、

「一寸、豆腐屋さん。」と甲走る。

「おう、」

と答へて、素直に、細い路地口一杯に突立つたのは、中親仁。荷の古びたのも、つぶ濡れで、笠に雫のぼたくと垂れた處は、初夏も雨の夕のうそ寂しい、路の邊の世渡草。但し元氣の可い聲で、

「いやア美しいの。」

「知らないよ。」

「は、は。」と笠の紐の振れるばかり、大口を開いて笑うて、

「私がおぢや間に合はないのかね、前途へ行く若いのを呼びますかい。」

「何をさ。」

とツンと眞顔。

「何をつて、あれぢやねえか、豆腐屋、豆腐屋と、可なりそれ、の、大きな聲で呼びなされるもんだから、ちやんとお目通りに待つてます。待つてるものを、まだ喚くだ。處で私ぢや氣に入らなくつて、遠くへ行つた奴を呼ぶのかと思つて、心配するだね。」

「大きにお世話ですよ、呼んだが何うしたえ。」

と襷を扱いて、

「そんなに聞えて居るんなら、早々とお入つておいでなね、いけ不精な。口の減らない親仁だよ、憎らしい。」

親仁は、けろりとして、天秤をがたりと置き、

「何は、奴に切るかね、八杯かね。」

「聾の早耳だつさ、人、そんなものが要るんぢやないわ、一寸あの、今日は午の日ですかつて。」
「ほい、油揚げが御入用。午の日……午の日、お午の日、狐の日だ。」と笠が頷く。

「お師匠さんもね、祭禮紛にうっかり忘れようとしたんですつて……ぢや、二枚おくんなさい。」
と蓋を取る荷を覗きながら、狭い廂に雨を避けつゝ、

「小父さん、午の日だの何んのかつて、羊、申、酉、戌、」
と美しい指をばら／＼と折る……

「亥、亥でせう、猪でせう、小父さん、猪まで日があるのに、何うして猫の日が無いだらうね。」
フトこれに耳を留めて、思はず、其の紅い襷を熟と見たのは、折から此處を通りがかり。

向うの黒板塀の樂書、お定りの相合傘を……珍らしく……羅馬字で書いたのを、ト忍返を見越
しの柳が、雨にびしょ／＼と濡れかゝつた風情とともに熟と視てゐんだ、脊のすらりとした青
年であつた。

骨太な奴蛇目傘を邪慳に擔いで、柄なりに出した腕まくり、些といかり肩の凜々しい奴、紺紺
の單衣に焦茶の無地の扱き帯、これは縮緬をぐいと、而して裾短で、高足駄。齒も爪皮も眞新ら
しいので、素足なり。但し黒緞の紋付羽織で……

額は迫つて短氣さうな、眉のくつきりした、鼻の隆い、目瞼が膨りと優しい、口元の締つた、

細面で色の浅黒い、頭髮の黒々と艶の好いのを、遺放しに、無雑作ながら分目の立つた、柔かに
初々しいのに、帽子も被らず、唯見ると、鳥打らしいのを、引捻つて懷中に突込んだ、一ツ所に、
銅貨銀貨取交せてぐわちやりと若干金、上首尾なれば紙幣が四五枚、新しいのも揉みくちやに
して捻入れる……

お父上が月極めの分は、月の朔日、立處に羽が生えて、今残つたのは母君に強請つたお寶。
さて、其の、又かい、と眉を擧めながら、お居室の小箆筒、二ツ目あたりの抽斗から出さるゝ

時の、は、きぎや、其の人柄も可懐しき。……悪垂れたやうながら、人品が備はつて、人摺れ世
馴れのせぬ風は、衿に襲ねた肌襦袢の汚れ目の無いので知れる。……衣紋も、瘦せた胸にしつく

りと、雨の中には肌薄いが、雫の腕を傳ふのを、冷たさうな様子もなく、篠を亂して降らば降れ、
額髪で受けむす意氣の、自から眉宇に顯れたも道理こそ、優しい臉に色を染めた、此の面にのみ
夕日影、暗々として且うるんだ、五月雨の夕柳に、微酔の可い機嫌。

娘の言に、一寸其方を、傘の柄越しに向いて、
「場所がらだ。」

と獨言……思はず目を合はす……娘が顔を背けたので、傘を横に、肩を隠して、柳を見上げた。
「猫の日……」と呟いて、枝垂る、柳を其儘に、寂しさうに俯向いて、柄の端に兩手を添へつゝ、

すら／＼と歩行き出す。……

其の間に、びしよ濡れの笠親仁は、蛭を穿るやうな體で、小溝の上で油揚二枚―蔦も鳥も出ないから、此の豆腐屋に餘談はない。

又しても言ふやうながら、青年が、人柄な風を見ると、何處で飲んだらうと大抵當る……鳥屋か牛店だ、と思ふと違ふ。實は蕎麥屋、の其れも可いが、あらう事か、廂間でも二階はあるのに、帳場近い處へ揚胡坐で陣取つて、

「極甘……」

などとしつぽくの抜、汁加減をちゆうと舌鼓。一銚子倒したあとが、

「釜番の若い衆、釜振り……釜振。」と賽壺を振る手つきで言ふ。平絢の三尺、尻下りの兄哥なら知らぬ事、何家かの若様ともありさうなのが、然うまで下つた舉動をすると成ると、財布を探つた勘定も、早や母者が内證の分さへ遣ひ果して、弟御が野球買ふのを引奪り、妹君が孤兒院あたりへ義捐の思召して貯金したのを強請つたものに相違ない。

洵や、邸は駿河臺、今は職を休められたが、世に時めいた陸軍の將校、子爵山科家、何某氏の嫡男松之助と云ふ、私立――大學の學生である。

が、帽子を控いで懷中へ、蕎麥屋の釜前で一合で、奴蛇目傘でぶらりと來ては、父君の名にも

恥ぢよかし、……早い處が神田の松さん。

其れだと今時分、雨の中、此處等あたりを同伴ついで居る理由が知れた。……油揚を買ふ娘に

聞いて、(場所がらだ。)と云つた……場所は、下谷竹町を、堀へ近い……向つて三條、三條の絲も寢絲に成つて、強く觸ると切れもしさうな細い横町。

界限に……近頃は仔細あつて中絶えた……と言ふのは、人の愛妾。以前は、友達の中にも浮名を流した、駿河臺の其の館に、文金の高髻縦矢の字であつたのが、情夫の名の松の翠にも包まれず、あからさまに圍はれて、まゝならぬ世を泣くのがある。

其の婦に、逢はねばならぬ事があつて、松さんは三時さがりに、駿河臺の邸を出た。

出たが、眞晝間罷向つて、

「居るかい。」

所の義理では無い。

時刻は夜、と豫て心得ても居る筈ながら、さあ！ 行くと成ると、午餉も落着いては濟まされぬ。……

何とやらは魔多しで、出掛けに友達に寄せられでもしては、と云ふ懸念から、一寸其處等へ散步の體で――尤も近頃學校は怠惰けて居る――館の首尾も妙ならず、で、門前の長屋に蟄居の處、

足駄も自分で引摺んだ。

臺所に有合はせた傘を、濡れたまゝ、がつちり開いて、大手を振つて門を出た。日はまだ高かつたけれども、然うした處へ迎る身には、くわんく照らされるより、此の雨は誂へたやうなもの。戀を知つた可憐さは、……早くから傘を窄めて、辻に兩國行きの電車を待つと、乗地に成つて驅けて来るのを、空に二三臺遣り過ぎしたのは、満員の所爲では無い。車臺に記した番號の數字を讀んで、丁か半かを占つた、智慧は女から着けられた。……敢て算盤を持たないでも、二進が一進で、二ツに割れると逢へぬ、と言ふ。

其の経験は、婦の身が自由であつた時分から……何の馬鹿なで、故と偶數のに乗つた折は、他愛も無い、狐が風呂に入つた様な事が湧いて、何時でも不首尾を果敢んだので、今の境遇尙の事。で、よくは覺えないが、あと前へ1が並んだのを見掛けて乗つたのである。

却説、傘の柄漏も厭はず、さす方へ行かうとしたが、少い娘が花やかな聲、豆腐屋のぼやけた言語まで、下町を飾る彩色のやうに思はれた。

「猫の日か。」と思はず口の裡で繰返すと、其の尻尾の長のが、ふはりと黄昏の雨の中へ、浮いて出たやうに見えたので。つい、背後を振り返ると、何か、もの思ひをしながら、虚氣々々と歩いたから、間が隔つたためであらう……路地口に立つた其の娘の姿も無ければ、豆腐屋の笠も見

えぬ。路が一筋、薄暗い中に、雨の艶で陰氣に底光りがして、且前後に人足が途絶えて、寂とした事は、自分が歩いた足駄の跡も、ひたくと着いて居さうである。

と立停まつて視めたが、黒板塀に濡れた柳、紅い袴を掛けた娘と——其の袴の色は椿が散つたやうに地に映つた——古笠を被つた親仁が、彼處に出會つて、偶然其處へ通りかゝつた事が、何か我身に取つて、意味がありさうな氣が頻とする。

で、一度自分が見ただけで、最う其のものは、世に顯れた用濟みと成つて、ずしんと地の底へ沈んで行つたかと疑ふまで。

と成ると、其の板塀に樂書した相合傘の字も、つい通りなものでは無い。何うやら自分に與へられた、祕密の暗示らしくも思はれる。

其れが羅馬字であつただけに、等閑に唯見たばかり、讀んだか、讀まぬか、覺えが無い。「待てよ。」

或は此れから逢はうとする、其の婦と、自分との名であつたやうでもあり、有觸れた徒らしくも思はれるし、電車の番號と同じ數字のやうにも考へられる。

「はてな……」と打傾いた時は、最う踵を返して、舊來の方へ引返して居たのである。と、町の間は長かつた……殆ど咄嗟の隙に、二個の影形の無く成つたのにさへ、七間八間とは

隔らなかつたやうに思ふのに……柳の風情も見えながら、松並木から、恰も棒端を望むばかりに遙であつた。灯が早や點れた。

其の灯の影が、兩側に赤い巴の祭禮の提灯。其れが、つゝと、今見た柳と、自分との距離だけ、向うへ幽に離れた時、やがて、見覚えのある、其の路地口を右に、左に例の黒板塀に辿り着いたが、間近く成つた時分には、急いで、渠の歩行は慌しかつた。

が、日が暮れて暗いのでは無い。たら〜と雨の滴る、柳の露は蒼くも見えたに、相合傘は影もなく、拭ひ取つたやうに消えて居た。

松之助は悚然とした。

媒酌人の無い戀路には、兎もすると、どんな人にも、慙うした事は數々ある。……

前編

一

町の角へ、淺葱地に熨斗を染めた幟などを閃めかいて、景氣を附けても、裏が草の生えた空地

だけに、紺屋の看板ぐらゐに見えて、一寸寄席とは氣が着かぬ。

淺草小島町も、堀に近い、裏町を入つた處に、新瀧と云ふ……時節柄、お湯屋の開業と聞えるけれども、なか〜以て其の儀にあらず。古くからあるが、餘り人の知らぬのが一席ある。

一昨年だつてか、喜の字の祝に最う一ツと云ふ處でなく成つた女隠居が、綿は見えても友染の蒲團の上に、しやんと坐つて、眞白髪の切髪、黒い籠甲縁の眼鏡を掛けて、手つきの煙草盆の木の地を氣にしては切で拭き、拭き、大聞記を読み、読み、這奴！云ひ效なきものどもや、と空板の小牧山を聞いて木戸番をした時分は、つはものどもの夢のあとに、蟋蟀が鳴く寂れやうでも、忠臣は二君に事へず、貞女兩夫に見えずで、講釋のお席で立切つた、……其の頃は確か水龍と云つた筈。

悴……と云つても五十を越えた、其の男の代に成ると、當人は慙うした職業にも似合はないお人好で、此の頃だと、萬筋のよれ〜とある織縞の黒地の單衣に、小倉の帯、銀鎖太い處をだらしとして、胸が寛けよう云ふ骨で居るから、何んでも傍の言ひなり放題。

お嬢さんを葬つた、旦那寺の和尚までが、今時講釋でもごわすまい。同じ武士道にした處が、太平記と忠臣藏、楠も功を經ないと、……

「宜しいか。」

大石には成らぬ理合。な、それ、つらく世相を觀するに、浪花節に限るでござす！と柵經濟んでの團扇づかひ、法衣の袖を捲り手に、賣もので接待の、胡瓜ラムネを、ぐい、と遣つて説かれたりで。

席亭忽ち其の氣に成つて、一兩年、御入來を仰いで來たが、近頃は薩張下火で、其れも思はしく客が來ぬ。ト大石も屋根へ上つて、鴨居、柱が挫げさうに、土臺がぐらつき出したので、與一兵衛吃驚仰天し、二ツ玉を食つた體で、ぐつたり投首した處。

代が替つた浪花節の、其の新瀧頭から居候で、下足番の三次と云ふ、土地の遊人の三下奴が策を獻じて、曰く、色ものに限るでげす。……兎角世間は色欲の二ツと申して、諸事此の事にとゞめを刺します。……と前座の假色を惡身に氣取つて……え、樂屋のお三味線を拜借いたして、夕暮に眺め見渡すと云ふのを一振。月に風情を、と朱盆を翳して、東西！紅い處は霞の形などと受けさせ、ひよいと廻して黒塗の裏、月蝕と喚いて哄と言はせる。

「ねえ、旦那。」

本藝の衣紋流とは行かないでも、上潮で船が揺れる、とお盆をひらくと煽る如きは、私にだつて遣れますから、看板主は名ばかりで、天拔きの掛行燈。蕎麥のつなぎに山の芋なら、早い話が下足亭三次で間に合ふ。

「是非色ものになさいまし、色のこつた、旦那、然うすりや、講釋でも、浪花節でも、つつくるめて、五目に海老の大神樂まで掛けられます。」

「如何にも成程、いや其の事だの。」
で、六月のはじめから。

此處で景氣を附直して、比羅も幟も新しく色ものを掛け出したが、場末の小席、固より浪花節さへ、潛りの眞打。田舎廻りの藝人徒合。成らば、徒士町の鐵道を應用して、江戸は素通りに熊谷板橋と云つたのでなければ掛らぬ。

落語家とても右同斷、自分達が高座で饒舌る、弟子の又弟子の其弟子。賑かしの御機嫌を伺ふ西洋手品も、歸天齋正十處で、太夫身支度は兵隊さんの古服を以て仕る。……

二

また無理もない。大入叶正面の行燈に、木戸が今時金七錢。

時に此の比羅を掛け直した六月は、三社様の祭禮で、此の邊から佐竹一圓、鳥越から下谷竹町、徒士町、向柳原、佐久間町一二三丁目をはじめ、三區に渡つて、今年は影祭ではあるが、例年其の賑一方ならず、と古くから節用にも記してある。

「手の届かぬ遠い町へは、神輿が渡らうが渡るまいが、近所合壁は年に一度、小兒たちが小遣の、
餉のお錢の遣ひ時。」

「此れを絞れ！ 其の上、小兒の評判は、大人へ廣告。商賣に抜目のない名古屋ものの持込んだ
躑躅人形は、區内の小學校へ半札を配つた、あの、手際を御覽じやつたか拜見あつたか、と又候
甚句で囃して、下足の三次が計らひで——此の界限、材木屋の藏の角、染物屋が埒の前、學校の
裏門などを足溜りにして餉を賣る、荷物をのこくと運ぶ工合が、輕節の蟲に背た、甚四郎と云
ふ……もそりとぼやけて影法師のやうなお爺。二錢が賣れた景物には、うつし繪の影芝居。……
小兒衆御存じの旨いもので、田之助の聲は齒が抜けたが、……落人の旅の女が、山深い辻堂に病
倒れて、狼に噛まれる處の、いや、其の筋に響く遠吠などは、うゝと齒莖を切るのが、黒緞
子へ血走るばかり、物凄く真に迫る。——

甚四郎爺を高座に上げて、精々取立て御慰みに備へた上、前側の小兒達には、無代で餉をしや
ぶらせる、お剩に小人半直段、と云ふ。……

「何うです、わんぱく、お茶ツぴいの巾着は皆絞つて、自働器械の蜜柑水なんぞ、前の溝へ打覆
けさせてお目に掛けます。處で、餉賣甚四郎では威かしが利きませんから、うつし繪、影芝居、
……鸚鵡樓甚叟さね、旦那。まだ些とあくどいやうだけれど、これへ、狸の面を被せて、一世一

代と遣ツつけます、大人だつて吃驚しませう。」

「む、成程。」

と柱に凭れて、樂屋から茶を持つて一ツ目小僧が出て來きうな、堂々つ廣い、日中の相談。席
亭は眞面目な人で、

「小兒だましたの、まづ。……しかし景氣は附かう、お祭を見込んだり。あの、爺が高座へ出る
のは、如何様一世一代だ、表看板にいつはりはなし、とこりや出來た哩、三次。

あとはしかし、あり來りの顔觸れで、其れで客が來ようかの。」

「其處です、旦那。」

と三次此の機會に大きに氣勢つて、頤と一所に、拜むやうな手つきで乗出す……下足の方が、
椅子に掛つて、旦那は、と見ると、ぼん／＼時計を掛けた下、……がツち／＼が小さな天窓に響
きさうな處に、孤兒院の錢函を頂いた體は、如何にも寂しく、其の柱にぐつたりと抜衣紋。例の
銀鎖をだらり、で、時々じろ／＼と正面の高座を視める。

「餉屋の景物で、一番しやぶらせるなんぞは、太神樂の撥ぢやありませんが、ほんの前藝でさ、
甘いもんでさ。」

處で、甘いにも辛いにも鹽ばいにも黒いにも白いにも、ね、私か手加減唯た一ツで、ありつた

けの客人に、涙と涎を一所に流さして、とろりと味醂蒸のあとが薄鹽、後生だ、命だけは助けてくれ、もう何うも堪らねえ、と云つた料理があります。

旦那……竹町の夏の富士。

と椅子を突退け、三次、怒眉をして、しやつきり蹲む。

「ふむ、」

と間伸に鼻毛を見せて、席亭は仰向いて、

「三國一か。」

「其れさ、旦那、下谷一番。ヒイ、と笛のやうな聲して咽喉を鳴らす。

席亭はまんじりと、

「はての。」

三

乗氣の三次は、席亭の窪んだ頬を、平手で撫でないばかりの意氣込。

「ねえ、旦那、最う相談をちやんと極めて、段取が出来てるんで……これなら一言も無え、御大人方がとろりとしませう。」

「其りや、とろりともしようだが、と席亭は氣の無い顔で、

「しかし、些と甘過ぎるの。」

「串、串戲云つちや不可ません。今も私が云つた通り、甘えにも辛えにも鹽ッぱいにも、お前さん……」

「はあ、近頃は何か、些と鹽を利かせるかの。」

「へい、」

と云つたが其の鹽を嘗めた面で、

「何が、旦那？」

「何がつて、お前、鹽梅よしの事だらう。」

「當前さ、だから私が然う言つてるんで、甘えにも辛えにも、此の上の鹽梅なし。それ、御大人がとろりと……」

「とろりは可いがの、餡のあとへ又甘酒ぢやあ……げい、」

と暖をして、

「お彼岸の配りものが支いたやうに、五目の上へ牡丹餅にや成るまいかの。」
と席亭一代の警句を吐く。

「確乎しておくんない。私あ旦那、おためを思つて眞面目に話しをしてるんです。……甘酒ッて何うするんで、」

「だつて、お前、竹町の三國一だと云つたらう。」

「申しました、へい。」

「あの、鹽梅よし甘酒屋を掛けようと言ふ相談では無いのか。小兒衆には飴さの、御大人方にも祭禮の事だに因つて、」

「甘酒進上……あ、あッ、」

と開いた口を、少時して、

「確乎しておくんない。南瓜が接待をしまし、甘酒屋を高座へ上げて可いもんですか。」

私が言ふのは、然うぢや無えんで、……旦那、それ、竹町の夏の富士。」

「夏の富士、……はての、山川白酒か。」

「焦れつてえな！」

と煙管を握んで、

「お雪さんの事ぢや無えかね。」

「あ、清元の師匠かい。……成程、とろりとした様子、席亭は早や莞爾りとする。」

「如何で、如何で、旦那。紅絹の糠袋を細くかつた三の糸を皓齒か何かで、洗髪の透通る耳朶の白いのを、濡手拭で一才壓へて、素足に駒下駄、すつと通る、後姿なんと来た日にや、三味線堀から清水が湧いて、佐竹原が玉川でさ、兩側の屋根へ杜若が咲く騒ぎ。」

それ、見える、と云ふと、路傍へ人垣を造つて、壓合ふから、露天の古足袋屋の婆さんは、日除の蝙蝠傘を疊むんです……馬力も留まつて、走るものは郵便の配達ばかり。柳盛座の出方なんざ、くるりと背向きに成つて、見物を木戸口へ呼出します。

え、旦那。

白襟に紺の紋着、博多の丸帯か何んかで、高座へ上つて、ト轉進へ白魚がかつて、緋縮緬の背負上げを斜つかひに象牙がびたり、小指が反つて御覽じろ。……目を廻す。……掃溜……え、ま、ものは譬へですがね、其の鶴どころの騒ぎぢや無い、別嬪の彗星、七十五年の天津風で、天文臺でも驚きますぜ。」

席亭は咽喉から手が出さうに、口を開いて聞いて居たが、

「然う行けば、借金して、芝居を借りても遣つて見たいが、え、三次、だつてお前、お雪さんには、何かがあるが、れこが、」

と親指をぬい、と出して、慌てたやうに引込めながら、

「然も些と大いがの、……え、噂にしても祟りさうな、蝮と云ふ鎌首に曲つた奴、の。」と、木戸の暖簾越に戸外を透した。

四

「其處に實も蓋もあるんです。」

三次は腹掛の底を探つて、勿體らしく巻蓑を一本拔出し、

「實はね、……旦那、こりや、お雪さんの其の親指ものの發議なんで、……竹町の三角の兼床で逢つた時、——なあ、三次、お前ン許で今度五目を掛けるんなら、ものは相談だが、一ツお雪を出して見ないか。彼奴も何んだか身體の所爲で、半病人で鬱いで居る。些とは然うすりや引立つて、元氣も附くだらうと思ふが何うだい。尤も云ふにや當らないが、話は早い方が可い。此方から押賣だ、歩だの車代だのと……第一道は近し、そんな心配させぬ處か、親類つき合をして居るだけに、お前にや蕎麥でも驕つて、半纏の一枚も着せようし、席亭へも友だちの顔を揃へて、ずらりと比羅を張らうぢや無いか。」

と恚う言ひまさ。ね、牡丹餅で頬邊だ。」

「はての、」

「私も考へました、……旦那の前だが、親指ものはね、お雪さんにや、意地も、我慢も無いだけに、可恐い妬き方で、あ、してまあ、子分子方や附合仲間の繩張内へ封込んで、金子の柵、圍つては置くものの、陰の噂ぢやお雪さんが、些とやそつと撲ち打擲をされたつて、なか／＼何うして自由になるもんぢや無いんですからね。」

的切、情夫があるに違え無え、と云ふ處で、お茶湯日だつて淺草へも出しやしません。湯へ行くつてはお前さん、向うの鍛冶屋の職人徒、黒鬼のみる目、かぐ鼻が、鼻薬を貰つて見え隠れた。可恐い。十町四方は溝端へ出る露店の莫産の下、堀の舟の苦の中まで、鹽を撒いて居るんです。ぜ。お妾を淨めのために。

何うして高座處か、近頃は手紙のつかひでも出來さうな年紀と見ると、女の子だつて弟子も取らせ無えのが、何んだつて、不思議な事を言出したらうと、一寸聞くと可訝いんですが、……人情だね。

人情だか何んだか知れないけれど、無事なやうでも、然うして藏つてばかり置いたんぢや、あれが、と皆が指を啣へて、畜生め、と言ふのも七十五日。竹町の別嬪が——横井庄兵衛——ねえ横庄の持物だか何んだか分らなくなりますから、……それ、電車の中までも廣告を出して、秘佛を高座で拜ませて、隨喜の涙を流させようと云ふ腹でさ。

其とも疑ぐるに切はありません。別に怪しい素振は無い。無いとして、深い、分らない、情人
がありさうで危険な處から、一番法をかへて、伽羅でも燻いて、奥山から鹿をおびき出さうと云
ふ了見かも分りません。

が、そんな事は先様御隨意。此方は掛けてくれる比羅を敷へて、御酒肴、半會席、上等と云ふ
處を、御馳走に成らうぢやありませんか。」

席亭は唾を嚥んで、楊枝も使はず舌鼓を打つた。

こ、で極つて、景物が其の鸚鵡樓甚叟。客分が別看板に化粧して、天地紅で張出した、清元雪
江、——當席より出演 仕 候。

其の雪江の身の親指もの——横井庄兵衛。横庄が顔で、鬘斗進上、新瀧亭丈へも、一夜城の如
く張出して、柳盛座の屋根を遠見に、大銀杏の梢と相對して、活動寫眞の看板如きは、眼下下。
旗指物を翻翻と紺屋の溝を挟んで、濕地低い場所に翻す。

さあ！ 入つた。

席亭も久しぶり、朝湯へ入つて、髯を剃る、額際も照々と、木戸行燈に輝いた。

二日目も雑と一杯、三日目も先づ一杯、四日目に、どか落ちて、辛うじて三分ぐらゐる、五日
目がばら／＼で、六日目が島流し、平判官康頼、俊寛僧都、鬼界ヶ島に寄る波の、濁つた疊も荒

海同然。

一人の所爲ではよもあるまい、が、比羅ばかりで、お約束の雪江こと、お雪は、はじめから出
勤せぬ。

ト其の七日目の事である。

晩方急に天氣が變つて、一時車軸を流した、雨は宛然夕立の模様であつたが、濡れた柳に紅
玉の日もさゝず、上り際がじめ／＼と其のま、地雨に成つたらしく、夜に入つてのじと／＼降。
前刻大粒なのが激しく不意にざつと來た時、小路の角に荷を下ろした、びら／＼の風鈴賣が、
硝子をちやら／＼と、電のやうに閃めかして、氷屋の簾摺れに驅出すのを、腕まくりして見送り
ながら、

「狀を見やがれ、看板前へ荷を下しやあがつて、入口を塞ぐから可い氣味だ。……」

と下足番の三次が装鹽した手を拂いて云つた。——
此の二三日、同じ處へ日暮方に来て荷を下ろすが、入りの無い新瀧の旗差物は、氣の所爲か、
實際、風鈴屋の硝子に蹴壓されて、景氣に點けた提灯の灯も、其の釣葱の葉がくれに薄暗いやう

に見えたのであるから。

「旦那、これで、さらりと霽りませう。路も泥濘りませんし、蒸暑かつたのも、今の一降で薩張して、そよ／＼半纏でも羽織らうツツて陽氣です、今夜は承合入りませう。」

と大元氣で、旦那を祝つて、三次は白玉の向う願卷。雪輪の中へ、念入りに雪と染めた、今度の出勤に就いて横庄が配つた、新しい揃ひの半纏で、カラ／＼ガランと尻刎ねに松竹を捌いて、最う御膳が出た、食ひなせえ、と云ふ身で構へる。

やがて樂屋で、序の太鼓がドロンと鳴出すと、席中の古疊が、ひし／＼と縁を揃へて、一齊に武者震して人待つ氣勢。

お園と云ふ銀杏返、中形の浴衣に前垂した、當席の娘が、女中一人と奴を使つて、こゝを預る。……大藥罐の下には、未だ火を入れない炭の色が黒々と、女中の顔の塗つたのが白く目立つた。

最う陽氣だから、と軽く済ます、燧火を入れた火鉢が、碁盤の目に凸凹と隅を仕切つて、蒲團の小山に棚田の形。……一粒萬倍に實れば可いが、客が来ないで、戸障子襖、疊の破目ばかりが目立つと……燧火を入れた火鉢と蒲團が、新瀧に入った龜裂つたけに、べた／＼と貼る膏藥に見えてならぬ。

いや、鶴龜々々。

三次の懸聲も幸先の可い、其の七日目の宵のほど。木戸行燈も颯と新しく、灯の色の白いのが、薄黄色にとつぷり暗れて、あか／＼として来るまで、又しても一向に客が来ぬ。

木戸に坐つた席亭が、行燈に照れて、拔上つた額を背けて、……横顔で氣にし出した。

「何んだか、ぼた／＼と雨垂が軒を傳ふやうだがの、降つて居るらしいかの。」

土間の椅子の前に突立ちは突立つたが、當なしの掛聲は中弛みがしようでは無いか。突張らかいた胸も窪んで、腹掛けに皺の入つた三次が、

「止んでませう。」と氣の無い返事。

「だがの、頻りにぼた／＼する……屋根も漏らぬが。」

と、氣心で變に暗い、天井を仰いで見て、

「雫が頸首へ染むやうだ。……晴れたとは言ふけれど、お星様でも見えるかの。」

「然うですね、」

と三次も半纏の肩を狭く、悄氣た兄哥に成つて、簷下へのつそり出たが、

「入らつしやい、」

と一ツ喚いて、首を窘めた。

「ちよつ、角の水屋へ入りやがる。旦那、恚う其の何んですね、入らつしやいも打附からないと、

向うの屋根を飛越しますから、ドンと應へて胸前へ響きますね。」

其の向うは仕舞屋で、宵から寝るから、四邊も構はず、高聲で、

「糠雨です……旦那。」

「あ、悪いな。」

「と云ふ内にも、又びしょくくと来る奴です。」

六

「客の出足を留めると云ふ、厭な雨だの。」

と勢の無い事を言ふ。げんなりした席亭の顔は、平時のぢぢむさだと、まだ其れでも、皺に成つた紙幣を用意して居さうだけれども、こそげるやうに髻を剃つただけに、頬も瘦せて、行燈の横に霜が見える。……

「え、三次、戸外はどんな景氣かの。」

「角の氷屋なんざ、大したもんでさ。人をつけ、此の薄寒いのに、何うです、旦那、浴衣がけの新姐が、團扇使ひで雪の山盛を嚙つてら、何うだい。」

と拗身になつて、ぐいと反つたは可かつたが、

「お、冷え。」掌で首筋をびつたり撫でて、軒の雨垂を睨んで引込む、と廂に打つた揃ひの提灯に映る額が、酒氣が無いだけに、祭禮の宵を仇白い。

席亭は眉を擡めて、

「陰氣だの、涼風が起つて秋雨が降出す……山の手の場合へ行くと、得てこんな祭禮があるが、下町にはつひぞ覺えぬに、なあ。揃の提灯だとして、然うだ、竹町徒士町、鳥越邊は残らず巴が紅だのに、何んで三味線堀を境にして、九番地先から私方が町内、今年に限つて眞黒に彩つたらう。……向うと此方で張合ふ氣かの。何んの張合はずとももの事よ。四海は兄弟と云ふに、他ならぬ御祭禮。四民平等に睦まじくするが可いに。何うだい、赤い方は通りがかりに見ても赫と陽氣だにの、ものの黒いのは陰だとしてある。それ陰よ、陰な。何につけても變に滅入つて、何んとなく引立たぬ。見なよ、それ、黒い巴が氣の所爲か、白張へ出した卍に見えるかの。」

「え、」

三次もうそ寂しい上目づかひ。ト茫乎と薄い灯を並べたのが、糠雨に濡れ通つた土間へ映つて、巴の影が黒い蝶々、掃寄せた霜のやうな装鹽の上を、ふはくふはく。

「不可え、」

と思はず呟いたが、席亭の顔を一寸横目で、附元氣な頓興聲。

…手を代へ品を替へ言つて聞かしても、頭を掉つて六晩と抜いたは、新瀧の迷惑、委細承知だ。
何んの、泣いたつて喚いたつて、己が自由にして居る婦人よ。三次、合點だ、可し、見やあがれ。
とつて、お前さん、横庄が遊び場の、あの山田屋の帳場の處で——晝間私が談じた時——灰吹
をぐわんと撲つて、凄まじい劍幕さね。……

じたばたすりや引縛つて、戸板に載せて擔込まあ、高座で漣くつてでも見たが可い、どてつば
らを抉つても、きやアと勘處を上げさせる、と恚うです。

尤ね、佐竹界限、掌摑みの親分だが、へえ、可愛い人によ、へえ、なんのと、然もくお雪さ
んが自由にや動かねえやうに、……私が煽りつけたもんだから、一つは躍起となつたんですぜ。

ねえ、旦那、戸板にのせて、とまで言ふんですから、今夜來る事あ承合の西瓜、血を見るより
も明かなんです。

「あゝ。」

と手で壓へて席亭、頭を行燈のうしろへ曳いたは、目眦の下つたのを隠さうためで、

「手、手荒な事をしてくれな。繪に描いたやうに美しい、竹町名物の一軸だに、拂の尖が觸るの
もいぢらしいがの、……無理に出てもらつて、また、高座で煩らひでもされては成らぬ。」

「氣の弱い、何ですつて！ そんな事を言つてた日にや、梅雨時なり旦那、疊に草が生えらあね。」

「む、其れも然うだかの。」と滅入つたが、黙つて溜息を深く吐くと、

「や、高座で又癩を起したがい。」

と呟いて、疲れた面色。

「あ痛、あ痛々、あ痛々々痛。……」

時に裏悲しい婦の聲が、野を隔てたやうに、奥深い高座の上から、悪く氣取つて幽かに響いた。
「しやあい……」と紛らかしの筒抜けに喚くと同時に、三次は打附けるやうに椅子に腰。首も肩
もくつたりと、両手を下に揉手をしながら、苦笑ひして、

「東西。」

と極低聲。

「鸚鵡亭甚叟、御出勤だ。」

然矣、時刻を違へず、飴屋が高座へ出て居るのである。

「あ痛々々、痛、あ痛々々。」と、お定りの旅の女中が、山路で癩に悩む處、一流評判の影芝居。
爺の假聲眞に迫つて、就中、席亭の胸を刺す。

「入らつしやあい。」と又紛らかして、黒い巴が軒に並ぶ……提灯の間から、漆のやうな路地を覗
いて、

「旦那、何時です。」

「然ればの。」と俯向くと、胸の寛かる件の萬筋、ぶらりと扱いた銀鎖、克明に時計を見て、と一つ、くるりと廻して、熟と又針を視めて、

「八時半よ。」

「八時半……」

と鸚鵡返しで、三次血聲を絞つた。

「しやあッ、しやあい！」

「ほう、ほうく、」

と響いて聞える。……皴枯れた變な音聲。

「あれ、狼を遣りやがる。」

と席亭と目を合はせた。……三次遣切れず、飛上るやうに突立つて、

「入つしやい。」

八

變に其の咽喉佛をびくくくとさせるのが氣取られる。高座の館屋が狼の聲に、後髪を引かれて、

席亭は頸首から釣込まれさうに滅入つて、口も利かなかつた。少時して、

「三次、其の、どうく、と何か水でも出たやうに響く音は何んだらう。」

「え、」

と目が覺めたやうに、しやつきりと腕を組んで、

「あ、前の溝です。宵のどしや降が三味線堀へ落込んで、方々へ捌けるんです。成程、凄じい。川が出来たやうに、こうく言ひます。……鳥越の窪地なんざ床へ上つたかも知れませんが、柳盛座の奈落へ河童が潜りさうな晩ですねえ。」

「他所の河童は構はぬが、あれさ、又、内で……狼の唸りを遣る。……間々には絲のやうな女の泣聲、あ、可厭だ。何うやら溝の流が溪河のやうに聞えて寂々として来た。今の間に樹林が、のさくくと生茂つて、屋の棟へ蔽被さる氣がして成らぬ。草ばうくの前兆ではあるまいかの、

……の、三次、」

「しやあい、しやい、」と、下足番は聞かぬ振で、横を向いて又喚く。

「こゝへ悪く入らつしやれば、山伏か旅僧だかの。……天井裏をぐわたくくと、凄じい、あの音はい。蛇が鼠を追廻すだ。やれ又狼の聲を出す。……館屋は一體誰を對手に影芝居を遣つて居るな！ や、や、きやつくと云ふ、狼の啼くやうな、あれは何んぢや？……」

席亭は、恰も孤屋の納戸を覗く形で、客の無い空席を氣味悪さう。黒雲が低く下つて、岩角に野茨が白く咲いたやうな、背後の暖簾を、億劫らしく見返るトタンに、生暖い風が、堂々つ廣い野疊から颯と吹いて、ふはりと暖簾が其の天窓に被る。

「わッ、」

と云つたが、居窘まつて、席亭は目をぱちく。唯見ると、鹿ヶ谷の杉の立樹の如く、影も薄く暗く寂と立つ、中柱を見るにつけても、席亭は今度の企謀を苦々しく思つた。――

高座は、と見れば、十燭の電燈が左右に二ツ。何うやら他所のよりも、光が弱く、陰氣に壓されて朦朧とある真中處、最う一步で客座へ踏出しさうな端近へ、色の黒い法然天窓が、渦巻を墨でなすつた館の箱を膝許へ、大道を引いて廻る、車だけ外したなりの、影芝居映繪の例の舞臺を、ぐわさりと直して、悄乎と構へた體は、先祖が魂棚へ押直つて、山高きが故に貴からず、と實語教の素讀をなされる容體。折目怪しく、巖積の延びた嘉平治平の襦袢は、三途河の婆に一夜が損料と見えて、其の實、席亭が自分のを出して間に合はせに貸した代もの。

何やら淺葱地の手拭を、可厭な手つきで瘦せさらばへた胸先へ振れくくに釣下げて、ぶるくくツと振るのが、鬼火が燃えるやうに翻々と黒く揺れる。

これを見て、きやつくと騒ぐのは、五六人の子供客で。其れも、きちんと坐つてでも居る事か、高座に手を掛けて中腰で、蹠の眞黒なのもあれば、ぬいと立つて、此の陽氣に袖口へ手を引込ますいぢけたのも居る。……目を擦る、鼻を撫でる、中には、なは飛びの足つきで、ぴよんと匆ねるのさへある。

はてな？

「これい。」と席亭、それでも客が席に居ると思へば、木戸で神妙に聲を密めて、番茶に眠さうな女中を呼ぶ、と此のまた白く塗つたのが、鼻が尖がつて狐のやう。

「これい、小兒衆は何處から入つたい、木戸は通らぬであつたがな。」

「お園さんに強請つて、裏口から入れて貰つたんでございます。それと、あの、それからあの、中入の時口上言つて、齒磨を賣る孤兒院の小僧さんが二人居ますわ。」

と前垂を揉んだり撫でたり、誰も叱りはせぬのに、上目でじろり。

九

「お園は何うしたの。」
「あの、前刻奥へ行らつしやいました。」
「ふむ、」

と寂しい顔をして、席亭は其處等を舐し、
「萬吉は？」

「萬どん、おい！」と白粉の面なのが、薄汚い爪尖で、古壘を丁と遣る。と火の氣の無い箱火鉢を楯に突伏して睡つた奴が、口を開いて、むつくと起き、

「入らつしやい」と唐突に甲走つて、火鉢と蒲團を兩手に擱んで、當なしにくるりと廻つて、きよんとする。大掃除の夢見た顔色。

高座前の小兒たちは、件の奇聲に、一齊に木戸口を振向いた。

「傍見をせまい。」と、鸚鵡亭館屋の甚叟。……此の四五日の日當で、米代は十分なり、酒錢にも事缺かず。……餡は自分が持出して施行の見識なれば、鷹揚に小兒を制して、黒緞子の舞臺傍へ手拭を縦に置き、乾びた咳をなし、

「まだ宵ぢやほどにの、大人しうして、ゆるりと遊びやれ。これ、學校へ行つて、先生の話を聞くにも、傍見をしては叱られようが、騒いでは成らぬぞ。は、は、は。」と鼻の下をだるげに擦つて、額に皺を刻みながら、怪しからず上機嫌。

「尤も、寄席と學校を一つにする奴も無いかい。……其の代り、その、先生様は餡はくれぬ。芳しうて齒に着かず、甘いのを樂みに、しつぱりと御覽じろ。はッはッはッ。」

さて、小兒衆や、馴染がひぢやの。……私が道具立を見せて、木頭をチヨンとやれば、早主たちが方で狼の口眞似をさつしやる。あれはの、地體おほかみと云うてお山の神ぢや。……處に因つてはお犬とも稱へて、其れは早、世にも恐しい通力自在なもので、この神と梟鳥は、銜、木精と同じ事、人が聲を眞似れば負けずに鳴く。

獸でさへ、氣のある處、人間の私が狼の聲を出す、……其れを主たちが眞似るに因つて、ついで此の方でも釣込まれて、ほうほう、などと遣るわい、はッはッはッ。

したが、私が映繪の影芝居は、何も奥山、狼の幕ばかりと限らぬ。で、今夜は一つ新狂言を取立ててお慰みに備へる。

矢張りの、鳴聲は附いて廻る。……下谷竹町猫又怪談、つい此の四五日の事ぢやで、疾い處を御賞覽。」

と口をへの字形の眞顔に成つて、臺の上へ掌を立てて、すつと仕切り、
「場所は其の竹町で、……清元の師匠、……お雪さんと云ふ、美しい姉さんの内でなう」――

と、まじりと言出す。……席亭の目は暖簾の合せ目に据つた。
「實はそれ、看板にもあつて、今月此の席に出る筈の人ぢや。主たちには、手品と私が目當であらうが、大勢の客人には其の姉さんが呼物と思はつしやい。處が仔細あつて、初日當晩から未だ

に一度も爰許へ其の顔を出さぬ。……ぢやに因つて、右の大勢の客人が、小勢もない。まるで來ぬ。其の、客が來ぬに無理は無いが、お席亭は氣の毒ぢや。處が、もとく此の寄席へ出勤すると云ふは、當人の其のお雪さんが承知したわけでもなし、好き好んだでは素よりなし、何も知らぬ間に、傍で以てそれ極めた奴よ。

傍も傍ぢやが、其の姉さんの旦那——と云ふが、小僧を使ふ主人ではないよ。……何んでも人間の顔をした狻々同然の獸の事を、妾の旦那と云ふと思ふだ。主たち分らずば、内へ歸つて阿母に聞くが可い。」

と首を振つて、

「可いかの、其の旦那と云ふのが、手前の持物をひけらかす料簡で、高座へ顯さうの企謀ぢやな。中指にべつたり、掌を裏返しに天上を指すやうな形をしても、指環の黄金は何んとも言はず自由になる。」

ぢやが、それ、人間は然う行かぬ。

で、相談を聞くか聞かぬに、いまの其のお雪さんは、厭だ、と云ふ。」

と又頭を振つて、

「知らぬわいな、厭でござんす。」と、一寸假聲で、頤を細りさせる。

十

其れが俳優の假聲にて、獨合點の北叟笑をしたが、俄然として眼を剝いて、

「何、厭だ。厭だ、とばかりで濟まうと思ふか。これ、新瀧ではな、疾くの昔、汝が出勤の比羅をば掛けたぞよ。血の道だらうが、頭痛がしようが、五體満足で居るものを、今更しやつ面が出せぬとあつては、席亭は客に濟まず、己は席亭に男が立たぬ。否も應も我儘から、其の我儘も己への仕向け、思に靡かぬ平時の事なら、無理に手折れば散る花と、大目に見て許して置く。……今度は世間へ表向だ。四の五の吐すと焦熱地獄、鍛冶屋の土間へ打縛つて、鐵の棒の火を吐く奴を、手、足、胴、腹、容赦は無え、ぢり〜とお見舞申すが、さあ、女郎返事は、ど、ど、何うだ。——」

と皺びた腕をぐい、と捲つて、立身上りに力む下から、效性なく、口の周圍を横撫ですると、

其のま、げつそりと頤を細めて、差俯向いて、

「あい。」

と假聲。情なさうな、口惜しさうな、而して斷念めたやうに震へた返事で。……直ぐに甚叟齒莖を開けて哈々と笑つた。

「可いかの、小兒衆、野暮には勝てぬて。高い聲では云はれぬかの。」

野分の西瓜見るやうな、小兒の天窓の影を見越して、木戸の方をじろりと視めた。

「事と云ふとの、鍛冶屋地獄で威かすのが、お雪さんの其の旦那、横庄と云ふ男の押物ぢや。……」

まさかとは思ふけれど、さて、遣りかねもせまいかい。主たちには分るまいが、仔細あつて、妾とは名ばかりぢや、自由に成らぬ處から、焦れて悶えて、苛々して、油が燃えさうな劍幕ぢやでの。

先さ、納得して、

(あい。)と云ふ。……

愈々出勤と極つたのが、此の月水無月六月の朔日よ。

處で、日頃氣を鬱いで、お雪さんは髪も櫛巻の手束ね。善惡ともに、寄席へ出ると事が極れば、總髪なりにツイと寝かした、黄楊の櫛では勤まらぬ。隣家の姨さんを店から頼んで、髪結を呼ぶ段に成ると、横庄の曰く、圓鬘に結へさ。はッはッはッ、

と甚四郎お爺、瘦せた肋骨の擦合うて、カチ／＼と音するばかり、横腹を揺つて笑ひ、

「己が承知だ。尋常の藝人とは選が違ふ。言はば道樂、其處が見識。第一圓鬘がよく似合ふ、

……と晦日の鬼が禮に来る、おめでたい正月旦那、早やでれ／＼と成る奴よの。……

さて、引續く屈託で、纖弱い手には持重る、髷は重う成つたと云ふが、白い手絡の女ぶり。中指は澁くても、艶も色も水際立ち、露が垂りさうな髪が出来て、師匠の名の雪其のまゝな頸脚を、紙でぐい、と拭くのを見て、最う首の座へ直つたものと、横庄は安心しての、大胡坐のでつくり野郎。寛げた膝を真直にフイと立つて出て行つたは、何處のか小料理屋で、ちく／＼と氣樂みの獨酌で、自から、お雪さんが出入りの、其處等の評判でも聞く氣であらうて。

跡には一人、……

と甚爺は、小指を出して寂しさうに臺を指した。

「お雪さんは物思ひで、悄乎頰杖、と云ふ處が、三輪に結つて、紫の被布、脇息に凭れようと云ふ身分で無いぢや。

其處で、便りは長火鉢よ。火は多いことあつたか、何うかの。さて、恚う成ると暖いも寒いも無い。たゞつく／＼と凭れるのぢやが、フト眞向うに、横庄の敷いて坐つた座蒲團が、臀の形に幅をして、ぐたりと海鼠形に擴がつた體を見て、誰の世帯か辨別の無い、二十四五でも可慙さ、娘氣。

すつと、恚う銅壺の上に伸し懸る、と伊達卷博多お納戸地に白で獨鈷の貝の口、柳がしなふ及腰、膝も撓げに崩る、縮緬、其の水色の蹴出袴、取亂すまで身悶えしながら、大きな蚰蜒を芻出

すやうに、右の、其の座蒲團へ長煙管を引掛けて、すとん、と傍へ突退けたわ。……此の煙管がツレ、雁首のつけ元をの、三味線の線で巻いた奴。
いや、小道具まで口で饒舌るだ、田之助、大勉強」と、莞爾。……

十一

「本来なら、姉様の繪を切抜いて、綺麗事で、映して見せる處ぢやが、早急の出しもので間に合はぬ。其處はそれ、景物の餞に免じて許しつこ。」

さあ、突退つた座蒲團は、鼠が啣へたやうに簞笥の隅ツこへ暗く成る。

黄昏での、戸外を通る人顔も、彼は誰時と云ふ奴よ。

時に、其の長火鉢を置いた茶の間と、障子で仕切れて店ぢやわい。煙草に半紙なぞを小締りと置いてある。が、唯申譯ばかりでの、大した買手もない。……又買手の方でも、うっかりお妾の手から釣銭でも取つて、些と手間が取れようものなら、直ぐにそれ、横庄に尻尾を振る路地裏長屋の黒犬、赤犬が、のそくと附絡うて、フンく、

と甚叟、頤を低く鼻を鳴らし、目を細めて、

「フン、などと嗅ぐぢや、恐れたのだ。……だに因つて、近所の若い人も、つい遠慮になるわ。」

處で、火鉢に凭れたか、じつと物思ひに沈んだか、判然と浮いて見える、結立の其圓鬚で、白い手絡は薄い芙蓉。障子の紙より際立つて、しろくと咲いた顔、外から見れば風情ぢやらう。

……
が、當人はそれ處か、浮世が詰らないほどで、晩の御飯も咽喉へは入らぬ。豫てそれ、ぶらぶらと半分氣病で居る處、髪を結つて頭は打つ。……うます女の出ぬ乳を、絞るやうに、きやくく胸は揉まれる。所在は無し……恚う成ると、鬱ぎの蟲に押伏せられて、沸いて居る湯氣も自然と薄くなれば、鐵瓶も手ごと灰の中へ沈みさうぢや。

「餘り便なさに、お雪さんは静としては居られなく成つて、我と持餘す身體を、暫時枕に預けようと、力無ささうに、すつと立つたわ。心に苦があれば帯が緩む。……ずるりと腰へたるのを、白い手で、ト抱へながら、胸の脇を徐と壓へて、婀娜に眉を顰めたのは、持病がある、……で、細りした浴衣の裾も、消々とした姿で、」

と言懸けて、甚爺、手拭を取つて、はらりと捌いて、すつと扱いて、恚う樂屋口の襖へ、影を斜め。振向いて、ト加減を撓めて、

「はて、此處等は、映繪ぢやと、田之助にして見せて喝采ぢやが、私の手拭では納まらぬ。」と、口をむぐくさして一寸見たが、何うやら手拭の其の影が、見知越の雪江の、遠い處に映つた影

法師のやうに見えて。……間の離れた席亭は、此方で暖簾の裾を分けた。

高座前の小兒たちは、目と口が唯動く。

「で、店口の障子を閉てようとした處、と思はつしやい。……立棧に手を掛けて、戸外を見ると誰も通らぬ。晝と夜がむら／＼と入混つて、溝石の怪訝な奴が、ひく／＼動かうと云ふ景氣なもののよ。う、と唸つて、工場の汽笛やら、川蒸氣の遠吠やら、暮六つの鐘やら、氣が遠く空を傳はる。

妙にの、人間恠う云ふ時は、一人世の中から掛離れて、山奥へ引込んででも居る氣がして、近い向家に點いた灯も、谷底を見る孤屋の燈火ぢや。

あゝ、戀しい。誰かがこんな時に、旅の姿でふらりと来て、顔を見せてくれたなら、どんなに嬉しからうと思ふ。お雪さんは、然うして横庄を嫌ふほどのに、一人他に、命までもと、思ひ思はれる男があるぢやて。——はて、主たちには分るまい、——内へ歸つて内證で聞けさ。……

ぢやが、話のやうな身の上。……山の手へ飛ぶ時鳥が、宵に下谷で鳴いた處で、魂を、託けて遣るわけにも行かず、……手紙のたよりも出来ぬものを、……何が何う間違うても、その人の來る的不是ない、やがて來るのは、

(へい、姉はん。)

で、横庄の指揮の腕車が、此の寄席へ連出す段取。

トほろりとしての、拗ねたやうに、びたりと閉めたわ。戸棚から、仄白い後姿で、枕を出して、夜毎の涙にしつとりと、鬢を傳うて濡れるのを、つい仕替へるのも億劫さ。一枚刎ねて、一度坐つて、膝に乗せて、恍惚見て、トンと置いたのを抱くやうに、なよ／＼と横に成る……」

と、こゝで甚叟、臺の上へ握拳、其れに掛けて手拭を、細りと浮かして掛ける、と妙に顔のやうに手が白い。又其上へ、片手の掌、仰向けに載せたのが、がつくりと鬢に映る。……

十一

「横に、……其處で、蹴出襖をすらりと搦んで、膝を内端に寝て居ながら、恠う、フト目に着いたものがある。前刻方、横庄の身内同然の三下奴が来て、掃除をして、跡が世話の無いやうに、長火鉢の上あたりへ掛けて行つた釣洋燈ぢや。

磨硝子の、こんもりした大きな蔽での、白く朦朧と、尤もまだ燈は點けず。……何も變つた事では無いが、其のさ、油壺が眞鍮ぢやて。些と……此れに曰がある。……

お雪さんが、退引ならぬ仔細あつて、都合上、横庄に竹町の妾宅へ取籠められた、其の以前、家が柳原向うの神田白銀町邊にあつた頃よ。昨今でもな、——あの人は二番目の妹で、出戻りで

小兒のある其の姉さん、弟やら、妹やら、父親はなくなつたぢや、病人の母親をはじめ、大勢が、九分まではお雪さんの仕送りで暮して居る、矢張此が横庄の手當さの。其れも近頃は不勝手で、あの見得坊が妾宅へ電燈も引かない中から、お雪さんには胴巻を絞つて、財布を拂く。焦れて悶くのも其の筈かい。はて、其れは何うでもぢや——其の白銀町に居た頃よ。

大風の吹いた晩。今のな、……主たち分らずば歸つて聞けさ。……右の其の思ひ合つた中の若い男が逢ひに来た。何も大風の晩に来たからと云うて、主たち屋根屋の手間取とは思ふまいぞ。

お雪坊が泣かうでの、はッはッ、

と陽氣に笑ふと、何が可笑いやら小兒たちも嬉々とする。

暖簾を分けた席亭の顔は、且つ以て珍なもの。

「其の夜、逢曳をした歸りがけに、男が言ふぢや。……風が吹いても氣に懸るに、住居は狭し、小兒はあり、旁々以て、火の下で其の封筒の内職をする、あの燻ぼつた硝子壺の洋燈は危い。……其れを氣にして居る所爲か、二日續けて、洋燈で過失のあつた、一ツなんざ二人死んだと言ふ新聞を見たよ。何んの世話も出来ない私が、世帯道具を構つては、内の人たちの思はくも恥かしが、後生だ、頼むから持つてお歸り。

で、些と廻路をした柳原の裏通りで、成りたけ見つかないのを選つた洋燈屋で。……婦が前へ

入つてな、

(洋燈を見せて、)

と眩しさうに云ふと、背後から、

(金のだ、金のだ。)と男が入つた。

いや、何うも黄金の茶釜でも買ひさうな勢さの。

恚る客人、粗略あつては商賣冥利と、洋燈屋の主人が、べらくと帳場で指揮だ。

(へい、へい。)

で、若いものと小僧とで丁寧に出したほどの、見せたほどの、あれか、これか、と云うた處で、世話場で使ふ燈ぢやて、望み通りが二兩不足よ。……

すつかり揃へた蓋を嵌めて、

(出来ましたな。)と若いものが釣つて見せる。

男は少し酔つて居た。入りがけに勢よく、金だ、金だ、と威張つたあとを、少々鬱いで、戸外を背後に、土間の椅子に腰を掛けて、俯向いて、此、彼、と婦が言ふたび、黙つて頷いてばかり居たつけ。——

(粹が些と曲つて居るわいな。)

と其の釣つたのを視めて、……」
と甚叟此處を一寸假聲で、

「……視めて、其のお雪さんの、

(よいのと取替へて下さんせ。)

(まあ、澤山ぢやあないか。)

と男が云ふぢや。

(せつかくお前の御しんせつ、私や心が澄まぬわいな。)

男はついと立つて顔を背ける。婦もはつと氣が着いて、颯と臉を染めたと思へさ。そらさぬ亭

主が、

(それ、早く、取替へて、……心を入れたか、油をまけて上げ申しな。)

處で、大剪で、しやん、と切つて、若い衆が、絲屑を、ふツと吹いて、

(たゞ最う、お使ひなさりや可うございます。)&古新聞でそれ／＼に包んだあとを、くるりと車の絲を引く。」

十三

「其れをの、」

と飴甚仕方をして、

「半分持たうよ、と男が言へども、殿方が見つともないで、お雪さんが、ト袖に抱へて袂に提げてよ。先づ一張羅でも身躰みぢや、柔か羽織の扮装で、世帯崩して持つて歸つた。風の風ぎた空が、また胸騒ぎでもするやうに、お月様が晃々する……白銀町を、連立つて歸る。二人が氣では、輝き渡る寶の山から、大きな水晶を抱いて來たほどに、いそ／＼した。

と云ふ。……それ白磨きの、お雪さんには玉の燈籠でやす一物が、宙に、ぼうつと、恚う枕をした上に見えたぢやて。

わが背子が來べき宵なりさ、蟹の……」と飴甚、聲にまで、思入れで、要ありさうに掠めたが、何うやら様子が、歌のあとは知らぬらしい。

「すべて女中方がの、結立の圓髻で轉寢を、此の暮相にしてござると、思ふ男が逢ひに來る、……即ち待人來るぢやが、其のかはり、人が來ない時に無事では濟まぬ。必ず魔が魅すものとしてある。

以前、白銀町の時分には、恚うした處へ男が見えた。其れがの、何も魔性のもので、フツと見ると脚絆草鞋で、菅笠を持つて、すつと障子の間から間の内を素通りに、裏口へ抜けて消えたの

でも何んでもない。

正銘の、其の人さの。

夢かと起返つて、恍惚すると、

(何處か、お出掛けか。)と尋ねる。

(あら、何故ですか。)

と一寸髪に手を觸つて、うっかり衣紋の媚めかしいの。

(髪を結つたもの。)と立つて居て云ふ。

(たまには、貴下に見せたいわ。)

と、……莞爾した時の事なんぞ、思出して、今、お雪さんの、伴の洋燈を見るにつけ、

……あ、其の時はさて、來ると云ふ約束の、時が少し後れたのでさへ、五年目の日の暮がたに、

めぐり逢つたやうな氣がした。

今日の髪は何にする。……其の人に別れてから、死んだつもりで居る身體が、墓の中から迷つ

て出て、高座の満座に照らされる。横庄に結ふ圓鬘は、坊主になるより恥かしい、もしや其の人

が聞きでもしたら、と氣絶けるやうに、齒を切つて、ぶる／＼と震へたと思へ。

搔撈りたい髪の毛は、結立てのを見て行つた、横庄の疑り深い目に、うっかり獨寝の枕にも髪

のほつれは見せられず……で、大事に据ゑれば尚ほ重い。洋燈は、ぐん／＼天上へ、頭は何んと
……中差の兩端を、ものが、壓へて押伏せるやうに、ガツくり沈む。……瓜實顔は細りと、簀を
見せて白かつた。

ト其の、カタ／＼と音がするわい。

うあ、うあ、あ、あ、と逢魔ヶ時の、辻の物賣は、一里塚の呼子鳥ぢや。豆腐屋やら何や

ら知れず、穴の中へ消えて行く。……すると、又天井から下りたやうに、洋燈の白い蓋が目前へ

下りた。

其れへ、ちらりと人影が薄く映す。ト見るとの、違ふ。どん底へ落ちた日が、あくる朝へ持越

しの薄明りに、鉢前の南天の葉へ映つたのぢや。

最う一室ある。……お雪さんの横に成つたのは、茶の間の六疊。」

と飴甚、臺の上を手で仕切つて、

「店と……奥に八疊ぢや。ト此の奥との間が、狭い廊下に成つて居ての、突當りに、下の後架。

さて、恚うした三間ばかりの家にしては珍らしい。奥の八疊に附いた縁側の向うへ、十坪ばか

りの、じと／＼と濕つた庭へ突出て、上の後架が別にあるぢやよ。

ト此の八疊がだゞつ廣い。竹町あたりの町屋並には珍らしい、お屋敷方の書院づくり、鴨居に

犇々と鑄物の釘隠しを打つたわ、柱も黒塗に塗つたらしい。尤も大古なものぢやに因つて、悪くすると、ぶら下つた煤に見えるが、襖の引手に、念入ぢや、怪しげな總がぶらりよ。」

十四

「此れに準じて、床の間も大いわ。其の床の間に、緋の天鵝絨の脇息が一つ、据ゑてありは凄か
らう。」

横庄が恐しく、此の座敷を好んでの。それ、ト正面に構へて、脇息に凭れながら、お雪さんに
三味線を持たせると、其處だ！ などと奇な聲を發しながら、三下が酌をしようと云ふ……御家
風。

いや、さて聞いても恐れる。……」

と甚叟厭な顔して、

「續いて縁側も大分廣い。が、疊などはぐたくと中が窪んで、敷合はせの持上つた中には、鼠
の子でも、うぢや〜と蠢きさうぢやて、異體さの。……」

お雪さんが又こゝを嫌つて、衣服を着替へればと云うて、邪慳な姑を持つたやうに、茶の間の
隅で、坐りながら、きゆつ〜と黒襦子を廻すまでも、端近を厭はぬのは、奥の八疊が可厭さに

ぢや。

で、殿様脇息にお凭りの節、手足を釣らぬばかりにして、御前體へしよ引き出さるゝ他は、滅
多に自分では使はない。手廻りのもの一切茶の間ゆゑに、たゞさへ間廣な八疊が、寂と蒼黒う片
附いて、あのさ、ごみ〜した町屋の中ぢや。通りすがりに透かしてでも御覽あれ、恰どあかず
の間の千疊敷、昔、佐竹のお部屋様でも迷うて居さうよ。

其の筈かい。お天氣ものの縁日草などは、植ゑた處で、根から、じよび〜と浮いてしまふ。
ひとりでに生えるものは、三才圖繪でも評判な、濕地に生ず、とある秋海棠。で、青苔一面、
幻のやうな蟲が湧いての。……入梅時分は、によい〜と名も知れぬ、鉢坊主が雨夜の行列、
とある葦。奥州の山家だと、此の比丘に崇られて取殺されようと云ふ奴よ。正面が石垣ぢや。

が、さて、何十年経たものかの……蛇の莫蔭、燈心草、……濕氣るのは其れでも知れる。いつ
か中、墓原が定旅籠の曼珠沙華が、迷ひ咲きにめら〜と燃えたと思へさ、其の石垣に。……廻
りの八百屋の親仁様が、可い年を仕つて、何を狼狽へたものだか知らぬ、總井戸裏の石垣に、優
曇華が咲いた、と觸散らいて、近所合壁人群集。

あの分では、いまに蛭が湧きさうな。

と云ふ石垣で、裏に坂があるでも何でも無いが、其の上がの、根が濕けるに因つてぢやらう、

一段土臺を高く築いた、然る其の廣大な武家邸の跡よ。前から最う、壊れた門も見えなくなつたが、事に因ると、其のさ、邸の一間を、する／＼と引下ろいて、先代の家主殿が、家賃の策略に附着けたものであらうと云ふ。

石垣上の其の邸あとには、長屋もあるが、誰も住まいで、二三軒、屋根も草茫茫々として空屋で居る。……と云ふものは、垣越ながら一足出ると、彼の黒書院が目の下ぢや。其處へ横庄が脇息ぢやらう。お剰にお雪さんを惱めつける殿様の隠家ぢや。處を、上から見透かす、と云ふ廉で、窓を開けるな、張物を庭へ出すな、はまだしもよ。……上から抛つた西瓜の種が床柱へ喰込んで、お妾が氣絶をしたわ、と途方も無い難題での、三下どもが、尻やら頭やら突込むぢや。借手は這這遁げて行く。御差配も文句を言ふは知つたれども、對手が對手で泣寝入。

處で、垣越に高い處から、見下ろす人間は居らぬが、岨の草原容赦はせぬ。……右の書院の突出した廂と、擦れ／＼な垣の上を、のさ／＼と犬が通る、……馳が驅ける、蛇が這出す、蚯蚓が下る。……

ト此の縁の附いた鉢前ぢや、それ、洋燈の蓋に人影がさしたやうに、南天の葉がざわついたのは。聞かつしやい。――

上の後架が又一ヶ所さの。……同じく邸方のものらしい。此れが又格別に廣くて、大い。其處に……ト人の立つたやうな氣勢がしたとの、影は南天と分つたが、別に又ぢや。

黄昏さの。

これだけで、あつとも言ふべきぢやがさ、其處は豫て横庄が、嫉妬深い用心で、三下なぞが、裏口から、恚うした處を、拔足で窮ふ事が毎度ある。

十五

「剰へ！」

などと甚叟は意氣込んで開き直つたが、いや、高座前は悲惨なもの。景物の餉が目的の幼いのは、さすがに寄席と心得て手も出せず、芝居の影も、根つから義經にも辨慶にも映らぬ處から、鼠の驅廻る天井下、疊のへりをちよろ／＼と傳うて、一人二人と裏木戸さして縁側を引込む、と残つたのは孤兒院の齒磨賣で。其さへ、其の一人の年下の方は、茶番所へ引退つて、奴と二人で睨めつ競で、きよと／＼するのも道理こそ、今出た小兒が、一齊に新手と成つて馳加はつたやうに、甲高な聲がきり／＼と交つて、横手の紺屋の裏あたり、わつしよい／＼わつしよいと牙返る。ト又引込に、遠くの方へ行つたらしい、わつしよい／＼と波に漂ふが如くに、くる／＼と廻り

退きに退いて行く……

此の氣勢が、電氣を一ツ引搦んで、驅出したやうに一際陰氣。

其の替り、何の縁に引かれたやら、……間さへあれば奥へ入つて、件の襷がけのまゝで、古い繪入雑誌を讀んで居る、お園と云ふ娘が出て来て、正面のボン／＼時計の掛つた柱に凭れて、熟と聞くと、白面の女中は、件の積上げた蒲團を楯に、目をぱち／＼、驚破と言へば、突伏さうと油断なく身構へる。……席亭は、と見ると、何時の間にやら、半身暖簾に摺込んで居た。

「……何んと、それ近頃では、石垣の上の其の空長屋を可い事にして、地獄の石灰屋でございと云ふ、耳まで黒い、向うの鍛冶屋の弟子職人が、好い潛場所にして、晝情怠の、宵寝を遣らかす。……と此の徒が、その、搦手の見張番。要害よき處を占めた、横庄の隠目附ぢや。

何んとか叱言でも言ふ筈の、また鍛冶屋の女房も、火の職柄で、間狭な住居、糠味噌が湧いてならぬで、人手はあるし、町を越して向うの小山へ、漬物桶を入れて置く。

と云ふ始末で。

人氣はある……我性に遣れば、大跨ぎで、上り下りも出来る石垣ぢや。内證で裏から透見でもするか、と思ふと……今にはじめぬ事ではあるが、お雪さんが口惜くつての、

(誰? 誰だ!)

と重い枕を、斜に擡げると、沙汰がない。

(誰方です。)

何んにも居らぬ。

はて、其れは氣の所爲と極つたが、丁ど、こようを達さうと思つて、……其處で起きた。

が、枕を片手に、諸膝をくの字に極めて、屹と見込んで、別事なし、……とさて立つて、手近な、其の障子一重の下の後架と、思つたが、明取が絲のやうで、壁の隅ゆる最眞暗。……向うの縁は薄明、其の方へ、とふらりと立つと、キヤリとする、胸を例の壓へながら、浴衣の褌を引合はせながら、敷居を一段、がつくりするまで、廊下へ裙を引いて、向うの廣間ぢや。

伴の八疊をすつと通つたと言ふがの、……黒書院の薄暗い中に、浴衣が薄くよ……髪艶の照照とした形と成る、と人が戸外から覗いたら早腰を抜かし兼ねぬ。

御當人も凄いの。

で、縁側へ出た。

つか／＼と戸にか、つて、はつと南天の黒い影に、裳を包んで立留まつたと云ふものは、……

聞かつしやい。

日の暮方に、半分手探り模様で廁へ入る、と昔からも云ふ事ぢや。誰かの爪に搔かれるとて、

身體の何處かへ、不思議に、の、すつと絲のやうな血が走る。……靦面に疑ふべからず。
二の腕なり膨脝なり、露な處こそ然もあれぢやが、三枚襲ねた衣服を越して、女中衆は乳の下
なんぞ遣られるとよ。

さて、何うか、襲ねた衣服の覺としては當分ないが、飴屋の甚四、近い頃、股引を透された、
……繼はぎにもしろぢや。押事と云ふは決してならぬもので。……

十六

「さあ、其れに就いてぢや。」

と、飴甚は著しく眉を蹙めて、

「お雪さんの身に取つて、豫て一ツの不思議がある。……髪も結はねば艶が出ず、紅もさゝねば
光らぬが、自分の身體を何うも出来ぬ。時には何とも持餘す——と云ふのは……」

餘り思つて情が迫つて、其の情人のことで、胸を引裂かれるやうな氣がすると、あの其の、透
通る、玉のやうな乳の上へ、すつと薄皮を切つて一寸ばかり、颯と絲のやうに血が走つて、心の
いれ墨が眞紅に咲く。……又よく、それを横庄が知つて居ての、初中氣にして嫉み猜んで、見
けると、酷くして、其れだけの疵は別に、生身にお見舞申さずには濟まさぬのよ。祕して居るが、

他所からすつと歸つた時など、有無を云はさず、突如衣を脱がせて檢べる。……譯ぢやらう。

知らずにこそ事は濟め、……疵を檢べる仕打なんぞ、風の便りにも聞いたがよい、其の男は後
顛巻で飛込んで、お雪さんを自由な身體にして遣るか、出来ざ、横庄と刺違へて死なすばなるめ
え、うむ、でなきや嘘だ。」

と目を睡つて、ぶる／＼と、干鮪とある頭を掉つたが、一息吐いて、

「先づ……其れは兎も角もぢや、フト入らうとした時に、後架のものに引搔かれる、と血の筋が
走る事を思出す、とお雪さんは悚然として恐しくなつた。

……ばかりで無い、件の身内を檢べる奴。で、もし其の血の痕でも附くとすると、一責め責め
られねば納るまい。覺悟の事なら斷念める。……後架のあやかし、其れがためにと、最う我にも
あらず、密と膨りした我が胸を、凄いものやうに、恐怖々々覗くとの、其の白い色が中形の藍
を透して、植込の次第に暗くなる影に、藤の花が咲いたと見えたが、幸ひ葉の裏に、紅い守宮は
潜んで居らぬ。

物と息して、こようは後にしよう……考へれば不氣味な、其の八疊を、暮方來るのでは無かつ
たものと、……燈を點けて……ぢやが、其の釣洋燈では、何の後架の中も見ない、と云ふ、矢張
り情人への心中立てで。

どれ、手洋燈を別に點けて、今度は下の後架へと、其處で……戸に手を懸けたものぢやでの。さつと灌いで干杓をカタリ。ト南天の下葉の、はら／＼と雫するのを涼しさうに見ながら、つい、眞圓い書院の圓窓の前に、縁に置いた手拭掛へ、一寸屈んで、慙う手を拭いた時よ。……薄明に仇白い、足許にいい氣が着かなんだ、で、其の屈むのに力が入ると、

(痛い。)

と言つたものがある。

其の時、丸窓一杯に、むら／＼と影がさしたわ。唐突で、何を思ふ暇もなし、……

(御免なさい。)

とついそれ、お雪さんは其の拍子に、矢張例の隠密が忍込んで、さて御念の入つた、手拭の下に腹這ひして窺つて居たものと思つたさうぢやよ。

手應があつたわ、踏んだわ、の、

(痛い。……と云ふから(御免なさい。))

で、詫びながら、慙う足許を見ると何も居らぬ。……居らぬが、雖然、赤斑の猫が一匹、淺葱の暖簾と云ふ形で、手拭の中から半分……

と、偶然言ひかけると、其の木戸口の暖簾に居る、席亭の頭が變に、慙う、……上下にもじも

じする。

「ト耳を出して、圓く成つて、香箱を造つて居たで。

(まあ、)

と棲を膝で挟んで其れへ。……

(お前かい。)とお雪さんが、氣のそんな鬱いだ中でも、豫て嫌なものでは無いから、莞爾笑うたと云ふ。

すると、其の、痛いと言つたは何ものぢやい。」

と館甚、臺を壓しながら、高座で一膝乗出して、

「此やの、心が顛倒したと云ふものか。それとも、赫と逆上せた餘りに、茫と成つて、前後不覺とでもあつたかの。」と自分で言つて、打傾いて、目をじろり、人に訊くが如くに甚叟は其處等を視めた。

十七

見ながら館甚、何か樂屋口を覗いたが、敢て後連を心着けた様子はなく、何うやら其處に、大きな、夜の空洞があるのに、うしろ髪を引かれた風情で、其のまゝ、振返つた、目が、きよとりと

して居る。

陰氣な聲して、

「例の帷の上は空屋なり、境界の四ツ目垣の前の草の生は、前云ふ通りぢや、犬も馳も殿様さの。蝦蟇なんざ、槍を振つて、其處退けるで通らうと云ふ、車前草街道の松並木よ。……黒や、駒や、と名を呼んで、手から餌を飼ふ顔馴染は無けれども、白も赤も、いづれ見知越の近所の野良猫。で、お雪さんが、あゝ、猫の足を踏んだのか。

(痛かつたかい。)

と優しく、中腰で熟と見て云つたと思へさ。

赤斑が、取つても着けない風をして、故とらしく、瞼を深う、薄眠りをして澄まして居る。

(御免なさいよ。)

と其の顫の下を撫でさうに、お雪さんが手を伸ばいて、

(よ、堪忍。)

と云ふ。ト上瞼をピクリとやつて、巳の刻の目を黄色く、黒い瞳を衝と反らすと、むくりと、其の頸の斑に畝りをくれて、立つが疾いか、

(ニヤー)と啼いたが、ウンニヤー! ……と聞えて、其の差出した左の手で、ひらり、と招くやう

な手つきを遣る。爪が銀色に、ト動いたわ。其のまゝ横飛びに、胴を伸いて、ひよいと沓脱の石へ飛んで、のさ／＼のさと庭へ下りた。が、ものの六尺と遠くは退かずに、南天の下へ行つて、前脚を折つたらうではないか。

で、ぎろりと眼を光らしたが、すぐに薄眠りをする。其の毛が、ふは／＼と葉蔭に浮く。

(あゝ、聞分けのない。)

畜生よ、と浅間しく思つた。今度のニヤーは猫の聲、別條なし。ワンと啼いたわけではないので、これ、笑ひ事ではないぞ。」

と、甚叟薄笑ひをしながら饒舌つた。が、誰も笑ふものは無かつた。

「其れを……」

(いや。)と言つたやうに聞いたのは、自分の氣の所爲とは、お雪さんにも分つたで。詫びるものを、と憎らしくも成つた處。

妙に熱いやうな氣がしたので、何心なく、恚う、其の爪をかけられた處を見ると、……さあ、くつきりと、痕がついた。

吉野紙で包んだ眞綿に、紅糸が浸んだやうにの、あの腕の二を斜に切つて。——
猫が目を剥くまで腹立つて、爪を立てたにしては、餘りに弱い。實は巫山戯て觸つたくらる、

ほんの掠つた疵だに因つて、さして痛うもないが、それ忘れては成らぬ！ 横庄の呵責ぢやて。
此奴が纖弱い婦には、殆ど生死の目と云ふのよ。

苦患の手形が出来た。

とお雪さんは、引据ゑられたやうに、がつくり坐つた、縁の端で、

(あゝ心ない、獣だとして情を知らぬ。つい氣もつかずにした粗相、眞から詫びて居るものを、いやなら何うともしたが可い。何が憎うて、人手に掛ける遠廻しな祟をおしだ。其の人も、人に因る、横庄が目廉を立てて、どんな思をさせうも知れぬ。……それと寸分違はぬ此の疵、背だとして胸だとして、乳だとして腕だとして、ある處に容赦はせぬ。

そんなに、お前憎いなら、一層の思ひに、咽喉を嚙んで殺しておくれ。

最う、私や、それで無くつても)

と日頃の事を思出して、一時に、ぶる／＼と身内を震はしたと思はつしやい。

猫がの、……何よ、あの蛾の巢でもありさうな、耳の裏を、ビク／＼と動かいたわ。

前脚を揃へて、ト背伸をして居直ると、長い尾を曳きながら、悠々と二ツばかり飛石の上を傳うて来て、のたりと沓脱へ上つたて。

廁の屋根は眞暗で。」

と甚叟は暗い額で、天井を打仰ぐ。

十八

其處で、目を瞑つて、少時考へるやうにした。

「沓脱へ上るとの、脚を支いて、尾を捲いたが、石の色も薄赤く見えるやうに、斑の影が映つたと云ふわ。魔性備はつたものかの。別に伸上る様子もないに、其の舌が、縁側に、ト恚う膝をついて、其方へ返へして疵を見せて怨んでござつた、お雪さんの腕へゆつくりと届いたげな。

で、クシ／＼と息を吹いて、歪んだやうな、あの口を開けると、銀を磨いだ牙を齒吐いて、朱を流した顎を大きく、眞赤な舌で疵をべろ／＼と嘗める。

嘗めると……ざら／＼と其の、冷い刷毛の當る氣持で、紅を封じた蒼が開いて、眞白な花に成るやうに、すら／＼と曇が消える。唯見ると、赤猫の顔に光が出て、其の髭も腕に觸つて、金色にした優曇華が颯と生えた風情は可いが、……目の色が眞蒼に輝き出して、耳で兩つに別れた毛が、赤いか、黒いか、颯と捌けて、長い髪を振亂したに寸分違はぬ、……何うやら猫の形の人に見えるた。

其の顔が、手に着いて、嘗めて居るやうでもあるし、乗出して、廁の窓から熟と覗いて居るや

うでもある。

然うかと思ふと、石垣の上の四ツ目垣へ、首だけ出して、——其處にも大きな猫の顔。

迷惑な腕の疵が、見る／＼消えるのが嬉しうて、恍惚して、茫と成つてござつたのが、今のに
氣が着くと、はツと思つた。途端にの、人間の聲を出した。

(痛い。)と云うた事も思當つた。……怨を聞いて合點して、それ、舌で拭いて居る、と肩から氷
を浴びたと思へ。

猫殿は、一應仕事を済まいて、口を離れたわ、と一ツ横撫をなされた處で、

(最一ツ嘗めますか。)

と云ひさうに、至極心得た圓い顔を、耳を立て、眞向に、分厚に擡げた奴を一目見ると……
(うん)と引呼吸になつてお雪さんが、上から黒髪を、ト引立てられたやうに、衝と立つと、浴
衣の色を蒼く倒れて、其のまゝ死ぬ事と思つたらうでの、胸へしつかりと白い手を合掌に組んだ
なりで、氣絶して了つたものよ。……

縁側の端へ出て、眞暗な中に其の姿ぢや。……時刻も丁ど、寄席へと云ふので、指揮の俵が戸
口へ来て、

(へい、御新姐さん。)

か何かで、格子で呼んでも返事がないし、店を覗いても家中暗い。……で、まご／＼出たり入つ
たりの處へ、一足後れて、微酔で、引返して来た横庄。

酔つては居るしの。鐵瓶の置場所が違つても、何んの彼のとあなぐつて、目に廉を立てる奴。

命から二番目の魂と云ふ妾が、居處も居處。暗さも暗いわ。赫と成つて、暗にも白い、咽喉なり、
手なりへ、突如食ひつきもし兼ねぬのが、……實際、病氣と合點して醫師騒ぎに成つたと云ふの
は。……

毒も用ゐるやうによりけり。

例の隠目附の一人が、夜食後の骨休め、裏の空長屋に寝そべる次手に、四ツ目垣から覗いて居
たわい。で、此奴が、譯は知らぬが、赤斑の猫が、何かお雪さんの腕の處を嘗めて居たのを確に
見た。……處を急にフイと立つた姿が、暗い中へ消えたのを、氣絶で倒れた事とは知らず、其ま
ま茶の間へ入つたものと思ふ内、横庄の怒鳴る聲に、石垣を摺つて下りて、一緒にソレ、水よ、
氣つけよ、と騒いだ儀ぢや。

尤もの、幻についたやうな此の腕の血の痕は、現とも夢とも消えたり、の、横庄からは何んの
難題も受けずに濟んだが、さて、猫又の方は、其れ切りで落着せぬ。

今の話は、此の席の初日の宵ぢや。……さあ、氣が附いても唇の色まで變つたものを、出勤

處の段でない。

が、しかし、一時の事で、可恐しい夢に魘されたも同然。翌日は、もう、あの弱い人なれば、丈夫とは行かぬまでも、先づそれ、平日の身體に復つた。」

十九

「さしたる容體では無いに因つて、横庄が承知せぬ。直ぐに二日目から出勤と云ふ事よ。……お雪さんも厭々にせい、一旦頭を縦に振つたものぢや。自分でも其の氣で湯へも入つたが。

薄化粧の湯上り、髪も又昨夜の騒ぎぢや。結直して、きちんとして、茶の間で一服。晩方の、例の洋燈を、點けようか、些と經つてにしようかと言ふ、同じ刻限に成つたぢやの。

あ、今時分と思ふにつけて、妙に暮方の潮がさす、悚氣と頸許から寒氣がし出した。……頬に、窠れた影の映るのが、横庄の目にも見えたと云ふがの。

猫が鳴く。……あの、その、う、う、あ、あ、と、お日様と一所に世の果へ沈んで行くやうな、寂しい物賣のやうな聲で、ニヤーゴロロ、ニヤーヲ、ハ、ハ、!

と、眞似たが、厭な音で、餚甚は咽喉を揺る。

「ト鳴くと、お雪さんがそはつき出した。額に支いた長煙管の尖が、膝の彼方此方、右左に振れ

て、胸も上下に落着かぬ。

其の鳴くのが、一寸、間を措いて、又はじまると、

(姉や、姉や。)

と聞える。

(あれ、私の名を。とお雪さんは、煙管を、ぱったり、で、肩を抱いて一窘みに成つた。

(雪や、雪や。)

と鳴くと云ふのよ。

(馬鹿を吐かせ! 盗賊猫だ。手前が何か、盗賊猫を可恐がる風かい。呼出しを待つてる癖に。)

と横庄がの、執念深い目を晃りとさせて、じろりと見ながら、

(畜生)と怒鳴つて、奴が鳴いて居ると思ふ、……其の廊下の突當り、下の廁の傍に成る、板戸

を向うへ突開けてある明取り、細う、管の中見る體に、八疊の羽目と、廁の板圍の間から向うの

石垣が覗かれる……其處へどか〜と出て、ぬつと、横庄が面を出したが、何も居らぬ。むらむ

らと毛のやうに動いたのは、龍の髻と稱ばかりが嚴しい、もしや〜と生えた草での、年中日の

當らぬ廂合ひぢやに因つて、芬と、かび臭い。

(盗賊猫の癖にしゃがつて、遁足の疾い畜生だ。)

と横庄、忌々しさうに呟いて、

（お雪、もう居ねえ、大丈夫だ。）と言つた聲の終らぬ中ぢや、ダウンと屋根の上へ、夥しい、ものの石臼を落した音ぢや。

（あつ。）と、お雪さんは眞俯伏よ。

横庄も異な氣がした。

（燈を點さう、暗い。）と叱るやうに、些とけた、ましよう云うての、燐寸を搔探すで。

（私が、今。）

と、其の中でも、厭なものに手は掛けさしたうなかつたか、お雪さんが自分での、それ、洋燈を點けるぢやが、中腰の、膝も締着けるやうに震へながら、伸上つたと思へさ。洋燈も笠もかちかちする。漸と點けた燈が未だ蒼い。火屋をト冠せて、下から心を上げようとした拍子に、磨出しの蓋の裏に、ぎざ／＼のあつた奴、焦つてふらく／＼と成る指の腹が引掛つて、薄で裂いたやうに、すつと切れると、垂々と血が染む。

お雪さんは蒼く成つた。

横庄も顔色を變へたつけな。

天井裏へ息が懸るかと思ふと、近々と、釣洋燈の眞上の處、ぱつと、大屋根一面に擴がつて、

風袋を開けた聲で、

（消してやろう、ロロロ、ゴロニヤア！）

と猫殿が、

と飴甚、腰を宙に浮上つて、目を据ゑて、一生懸命の齒齧をしたれば！ 堪るものか。

（きやあ、）

と叫んで、繊細い脚で、高座前から、席の眞中へ刎返つたのが、まやかしの孤兒院で、いちげただけに、あとはびしよ／＼と濡鼠の體で、茶番處へ引込むと、それより前、ひそ／＼と一ツ處へかたまつた娘ぐるみ、稻荷堂の後へこぼれた、月夜の松球と云ふ風情で居寤む。

「何んです。旦那、ほい、」

と生欠伸を嚙殺して、下足番の三次が、暖簾を分けて、席亭の四角く禿げた、つむじの上から高座を見込む。

二十

「狼が猫に化けたわ、何んです……今のあの變な聲は、途方もねえ。や、眞赤な面をして、飴甚め、酔つてやがら……」

で、三次は、チヨと舌を鳴らす。席亭はものをも言はずに、唯まじく〜と聞く。

高座正面の甚叟、其處へ出た三次の顔を遙かに見ると、唐突な高笑。

「はッはッはッ、さて小兒衆や、」と句を續いたが、其處等には一人も居らぬ。

わつしよい、わつしよい、わつしよい、と呶えて虚空に舞上る……夢の雲雀のやうな遠くの聲を、ト目當ての如く、頭でゆるく輪を描いて、

「すると、その、横庄は、アツと立つて、突然洋燈の心をぱつと出した、……

……と云ふに因つて、猫殿が、右の、

(消してやらう)……は、横庄の耳には、燈を消してやらう、と、丁度、釣洋燈の上で聲がしたなり、然う思つたものと見える。

心は違ふが、お雪さんは、さ、其處どころではない。今の聲で、目を見詰めたまゝ、横に倒れて、食切つても秘す筈の、其の何よ、指の血も、旦那の前へ、花の影の白魚と投げた。

嘘を吐け！ 爺、どんな風にお雪さんが倒れたやら、起きたやら、坐つたやら、貴様見て来たか、可い加減な、とおつしやるまいものでもない、はッはッはッ。

と又瘦せた胸を揺つて笑ひ、

「其處が、それ、映繪のお爺さん、恚うもあらうかと云ふ體を、今夜はな、口で饒舌つて御覽に

入れた。話の筋道に形を付けたぢや。廊下も縁も、四ツ目垣も、して見れば道具立さの。

したが、此の話は實録ぢやよ、うむ、」

と一ツ合點んで、

「實録ぢや、が、處は前言つた竹町で、然る人の圍ひもの身にあつた、いや、現在にある事と言ふだけで、誰の事やら一向分らぬ。

處を、旦那は横井庄兵衛殿、婦人はお雪さんで話したは、當席へ出勤すると云ふに就いて、筋を判然と、つい掌を指すが如くに聞かせたために、借りて用ゐるたと思はつしやい。

飴屋如きが申しては、事も、烏滸がましようはござれども、狂言綺語の習なれば、お差合ひは御免あれさ。」

と、誰にするやら、ぐつたりと頭を下げて、

「何處から聞いたと言ふなればぢや、天知る地知る、飴屋知る、……飴屋知る、……飴屋知るか、はッはッはッ。

いや、申戲はおいて、二晩目も、亦其れがために醫者騒ぎぢや。

其の夜中にも、

(雪や、消してやらう、雪や消してやらう。)

と屋の周圍を廻つて鳴く、猫殿の聲を、……實は旦那も聞いたと言ふわ。
子分身内を集めた處で、佐竹ヶ原へ陣太鼓で、猫狩も出來ぬ始末。
内々は加持祈禱にも及ぶ由。

三日、四日、一昨日の晩、——昨夜も鳴く。續いて鳴く、宵から曉方へかけて、
(雪や、消して遣らう、雪や消して遣らう。)と幾度となく鳴いて廻る。裏悲しげに、情けなさう
に、然うかと思ふと翔るやうに、又慰めるやうに鳴く。

何う鳴かうとも、猫がものを言ふ人の聲。聞く身に取つて堪らうかい……寄席どころの沙汰で
は無。

が、其れはしかし、餘所の話を、甚叟映繪的一幕ぢや。……

御心配は御無用。當席お目的の看板、清元雪江儀は、下足番の三次骨折に因つて、今日より必
ずともに、頓て出勤仕る、誰方も其れをお楽しみに、

と云つたが故とらしく聞えた。

「え、御退屈。」とおおじぎをして、甚叟けろりとした面を上げた。

ト其處へ、三次の突出した顔を見越すと、

「三ちゃん、今晚は。」

と云つて莞爾とした。

いや、三次が沸えまい事か。

二十一

「畜生、お雪さんの猫一件を饒舌りやがつたな。」

「眞個かの、三次。」と席亭は念入に又吃驚する。

「嘘だか、眞個だか、變な風説はするんですがね、何も高座へ持出さなくても可んです。爺め、
何が氣に入らねえ。厭に面當がましくけちを着けやがつて、あの面色を御覽じろ。法外な日當で、
酒で産湯を使つたんです。糟喰え生酔め。旦那、引摺下ろして打擲いて遣りせまう。汝！」

「あ、これ、そんな事をしては、尙の事けちが着くかの。」

で、木戸口で、暖簾に搦む手が四本、頭を上と下で、一揉み揉む。

高座の飴甚は何處を風が、と云ふ顔色で、目もくれず、……澄まして樂屋へ入らうとして、だ
らしのない中腰で、樂屋を見込んで、

「幕を、幕を、」と云つたが、應ずるものなし。小僧ぐらゐは居たのであらうが、何んとしたか沙
汰がない。